

經基王 右馬頭太宰大貳正四位上號六孫王人王六十一代 朱雀院御宇天慶二年己亥十二月二日始賜源姓西海惡賊討藤原純友等成大宰大貳賜鎮守府將軍東國下向奥州ヲ治ム一代受領七ヶ國ヲ歷大納言橘繁古卿賀天德二年戊午十一月二十四日薨六十四靈祝六孫王大權現宮

滿仲 延喜十二年壬申四月十日誕生左馬頭內昇殿被聽於西州度々顯武功弓馬達者越于萬人貞元二年丁丑八月十五日出家長德三年八月二十三日卒去行年八十三葬多田院號多田左馬權頭從四位上伊豫守母武藏守藤原敦有女
 武藏守從四位下 忠重 從五位下 駿河守
 鎮守府軍將 陸奥守從四位上 致公 從四位下 兵部卿
 位上母同 忠隆 從五位下 左衛門尉
 從五位下右衛門督 忠國 從五位下
 長田越前守 致任 守

滿快 從五位下相摸介 滿國 從五位下伊斐守
 滿重 從五位下出羽介 賴行 從五位下伊豆守
 滿賴 從五位下上野掾 賴季 下野守

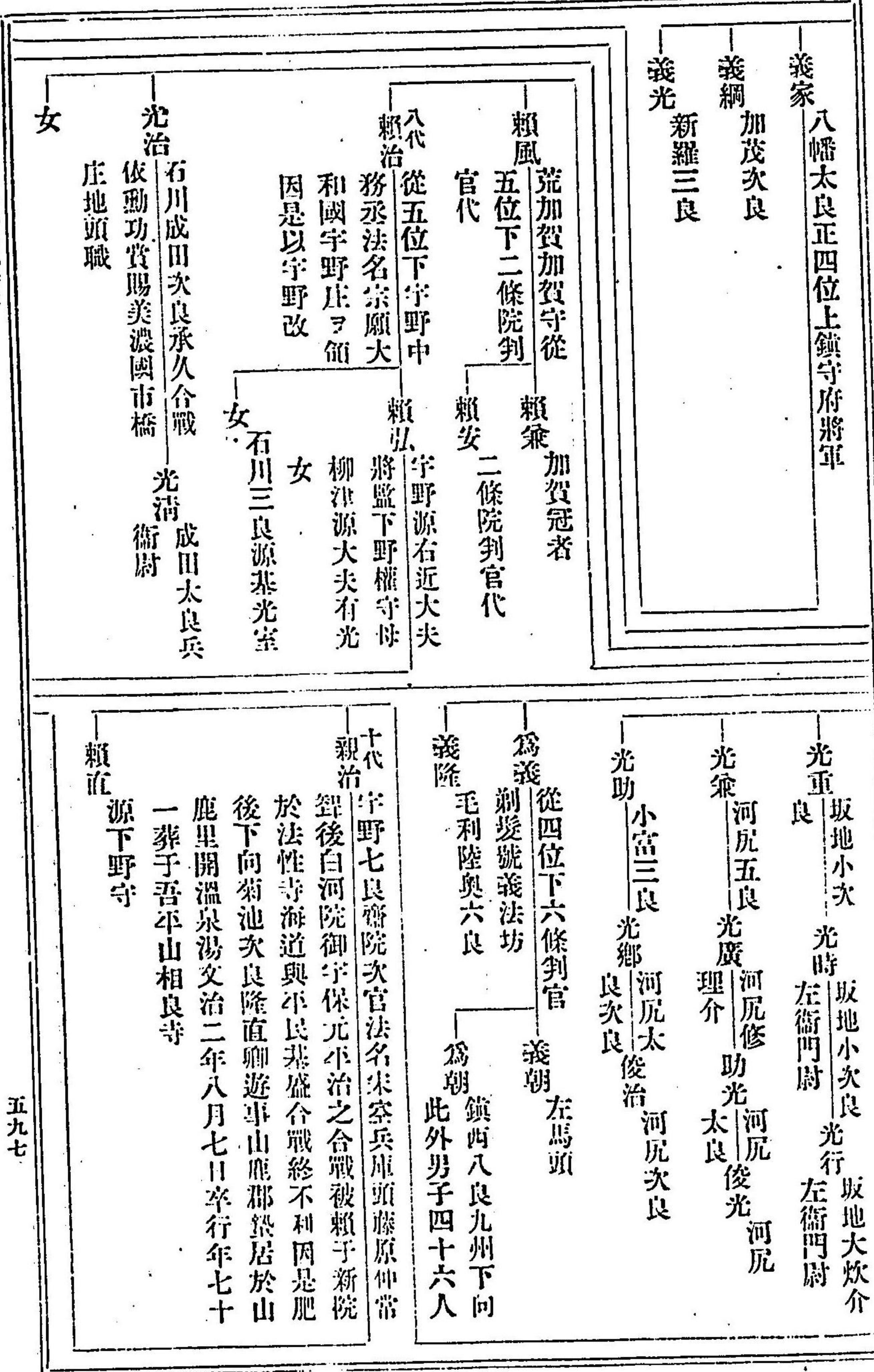
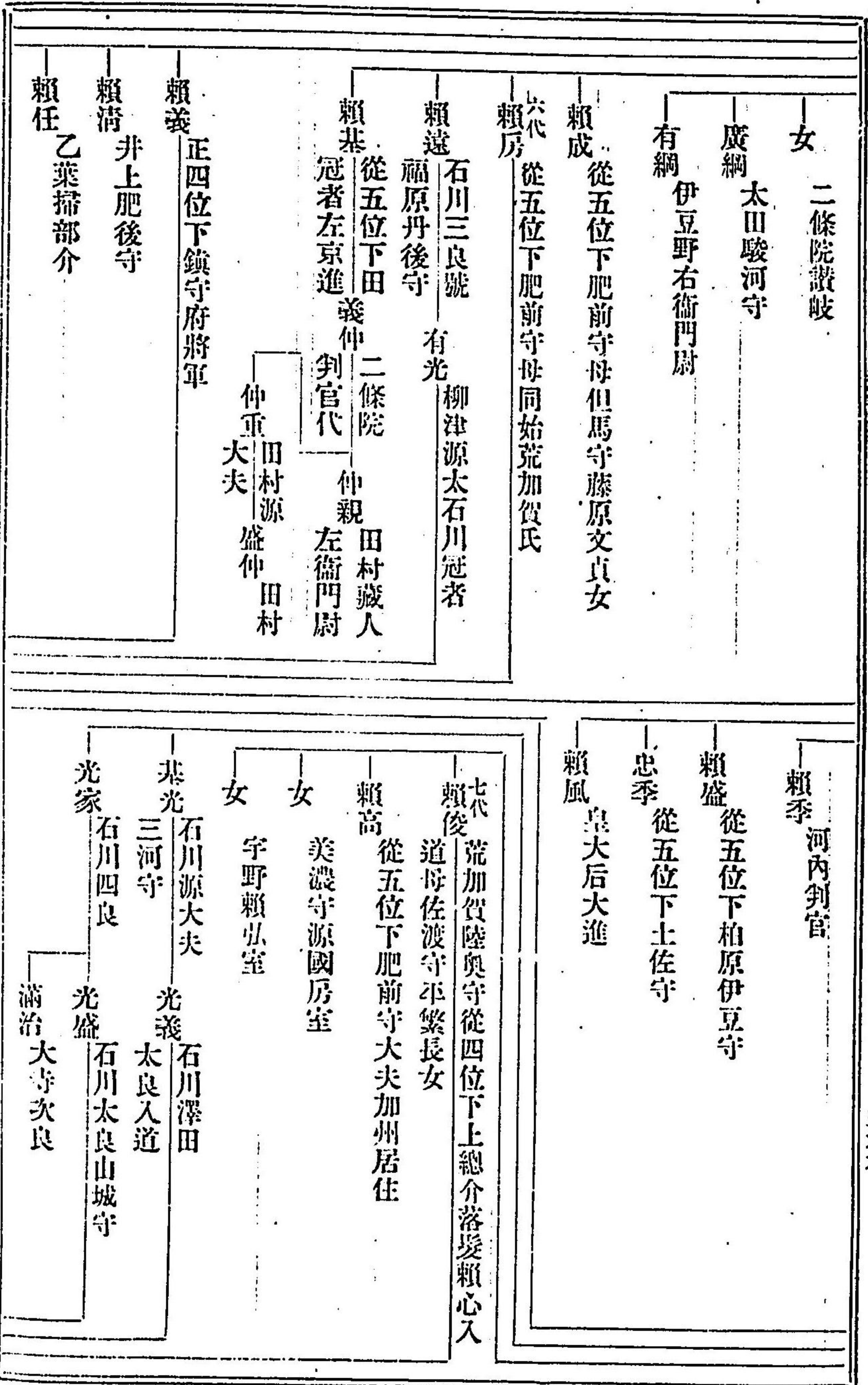
女 源次敦妻
 滿成 太田出羽介早世天延元年七月二十四日去行年二十二實經基公末子
 賴光 幼名文殊丸七歲時家督正四位下肥前守攝津守ニテ卒天曆八年七月二十四日誕生鎮守府將軍行軍六十八
 五代 淡路守從四位下周防守大和守ニテ卒行年四十八母左京大夫藤原致忠女
 源賢大阿闍梨 美丈丸藤原仲光子身替リニ立後小童寺立
 賴信 冷泉院判官代甲斐守鎮守府將軍河內守從四位上四品上行內昇殿被聽賴光養子ト成法名蓮心

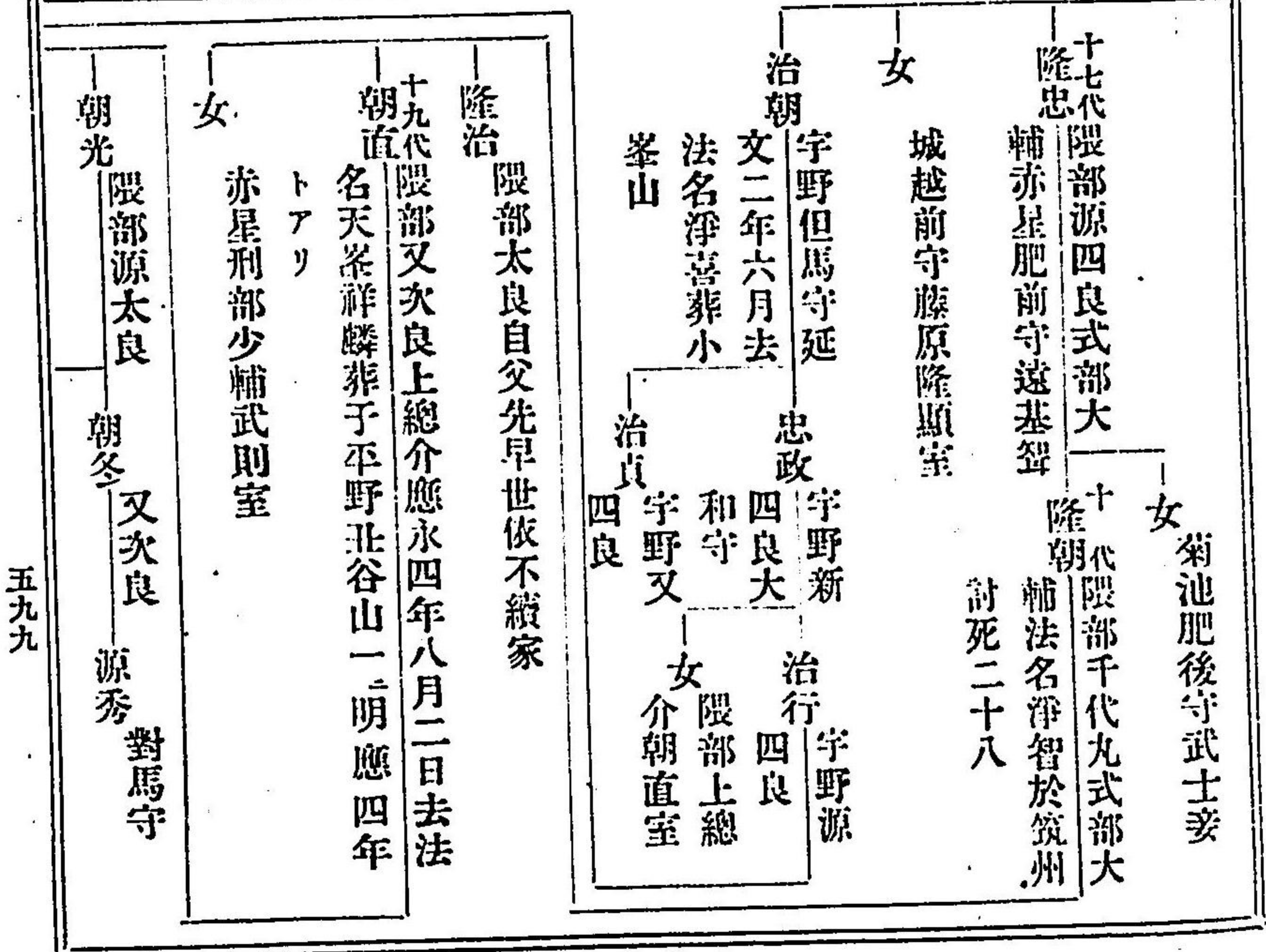
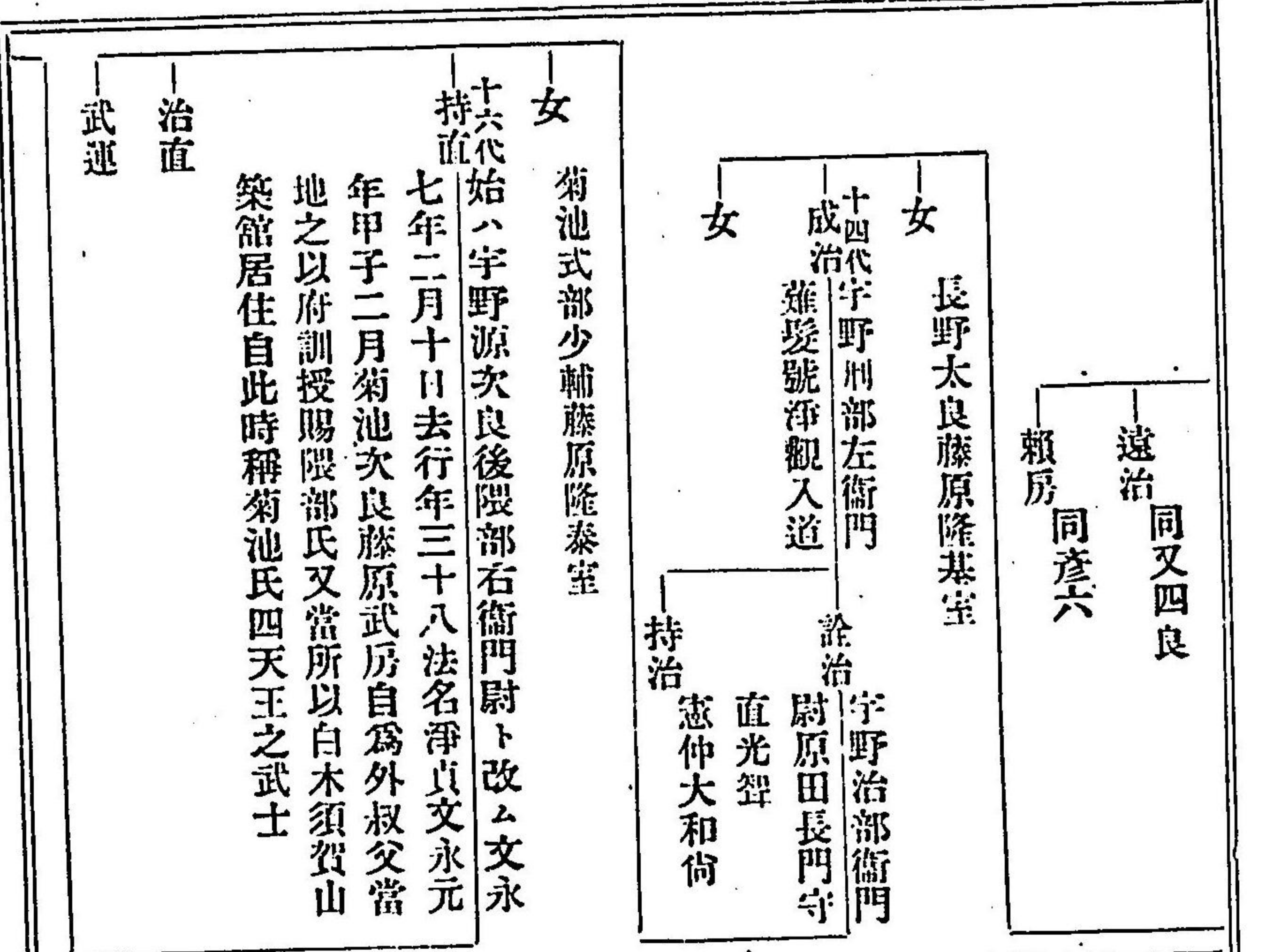
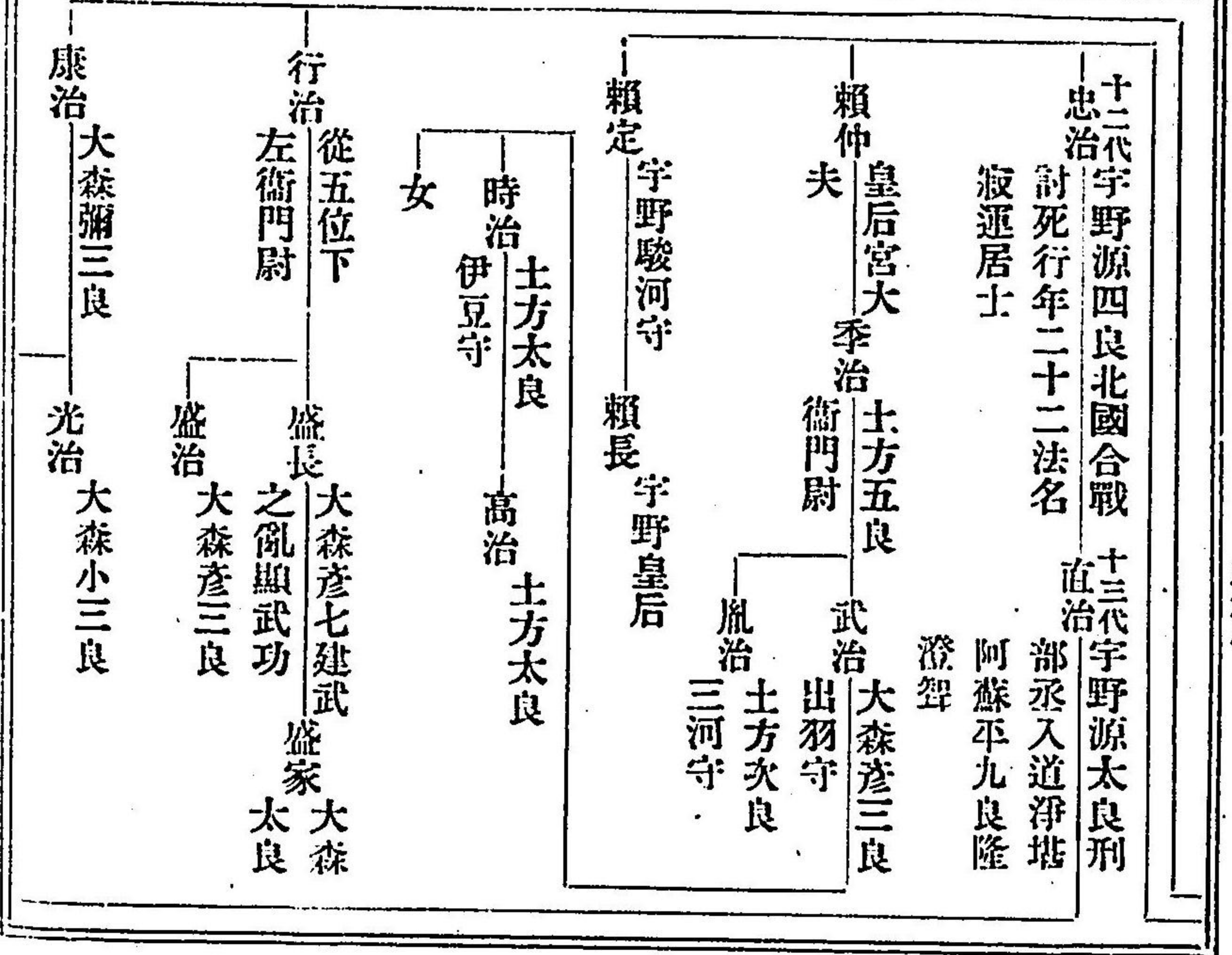
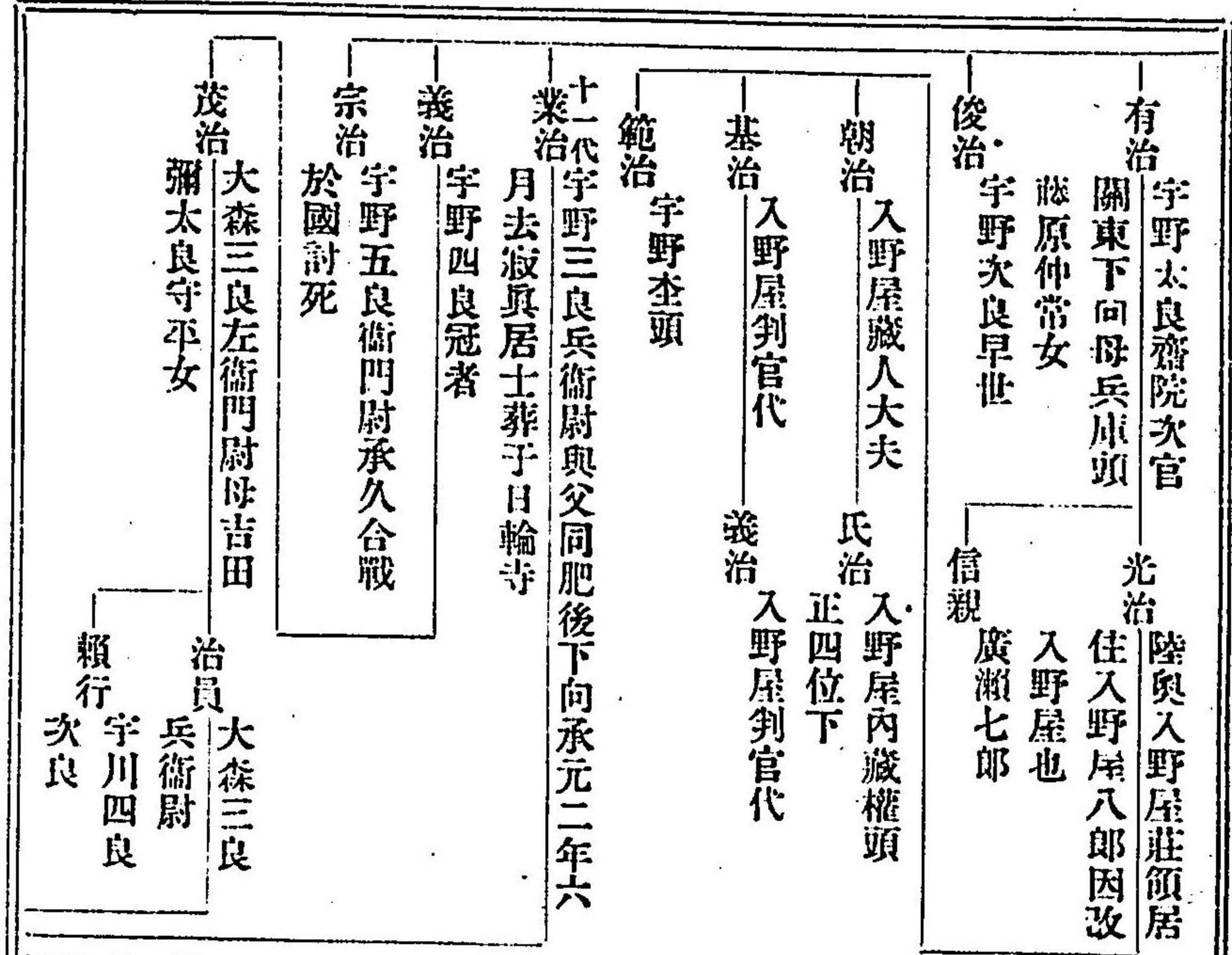
賴平 從五位下 大藏權頭
 從五位下右近 賴家 正四位下筑前守
 將監左衛門尉 孝光 從五位下大和 大掾 範弘 從五位下戶島藏人

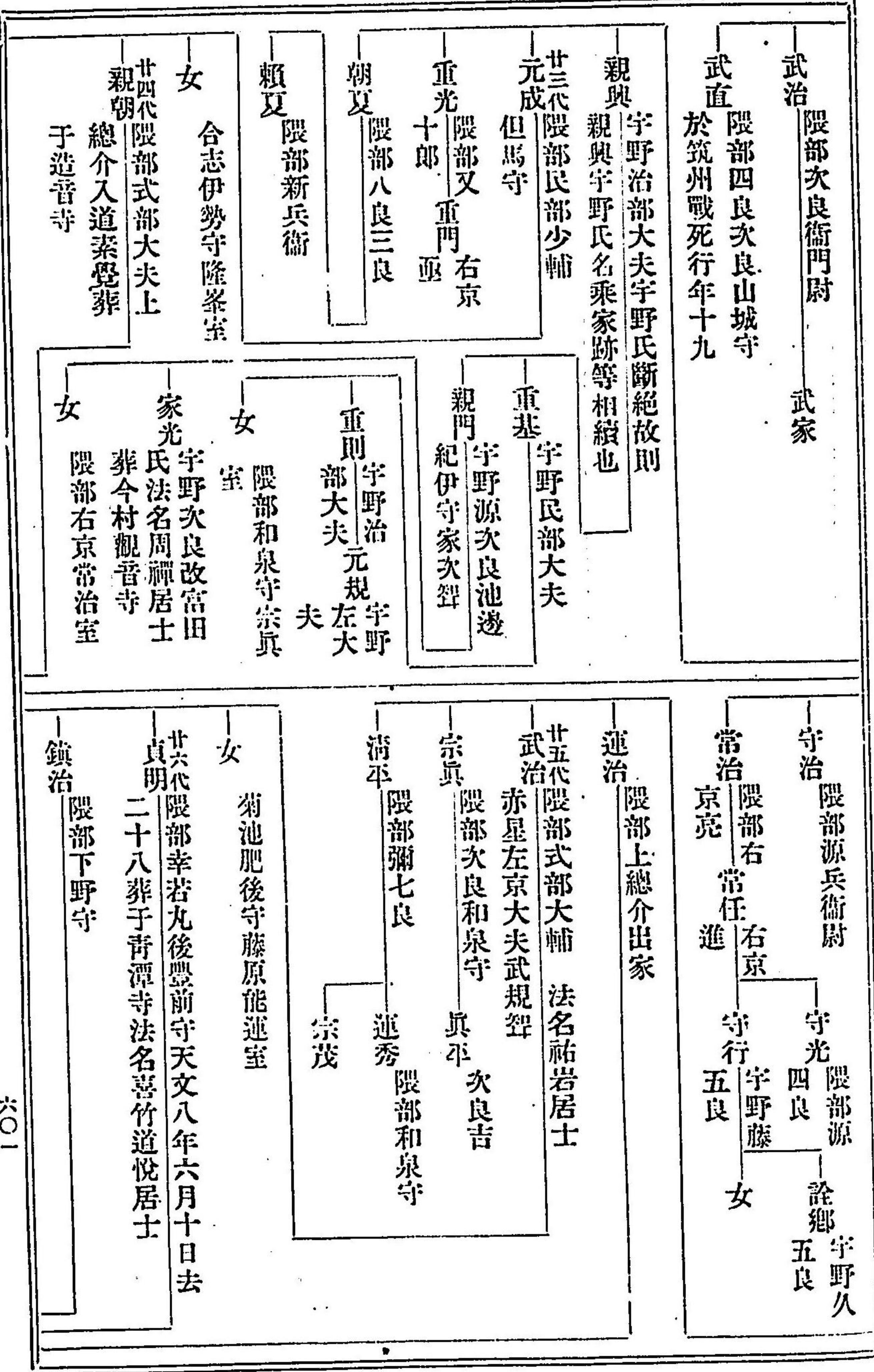
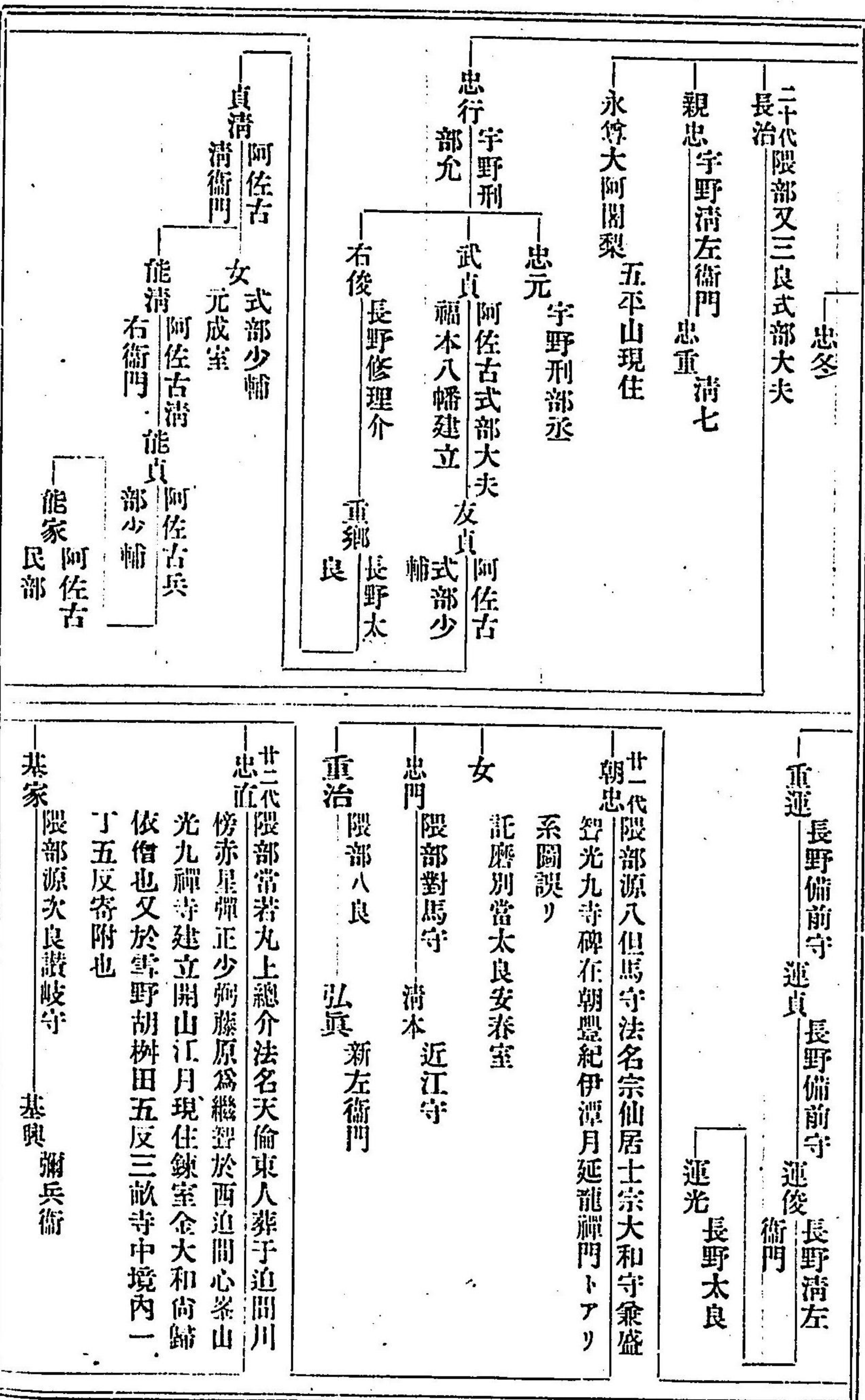
賴國 太田下野判官從四位下攝州居住
 賴家 太田筑後守從四位下 從五位下 伊豆守
 母中納言平惟仲女 滿綱
 賴元 太田出羽守從四位下
 永壽阿闍梨大王寺別當
 賴昭 二位中納言濟政卿室
 女 多田左衛門尉 賴綱 從四位下
 多田下野守 實國

賴資 從四位下 資金 溝機大夫
 下野判官 國房 從四位下 土岐伊 能勢上
 美濃守 國基 佐守
 國仲 福島相摸守

明國 多田下野守從四位下
 仲政 源兵庫守從四位下
 國直 山縣三良 國能 能勢判官
 賴政 源三位兵庫頭入道 仲綱 正五位下伊豆守
 賴圓於宇治戰死 母菖蒲前
 賴行 小國源大夫藏人 兼綱 檢非違使源大夫
 從五位下右馬頭 判官
 深柄三良丹後守 仲宗 六條藏人大夫
 光重 源藏人大夫關東
 賴兼 下向賴朝公仕







親元 隈部彌三良

景直 富田大膳介 景治 富田兵庫 元治 富田兵庫 二十四死 頭

景元 出家元選 治元 富田主膳 和尚青潭 兵衛後仕 寺住侶 清正公

直方 富田但馬守 家次 富田太良 家治 天正十五 青潭寺再建 但馬守改 年七月二 安藝守 十八日於 隈府討死 富田安藝 守

家朝 同父於院馬場口討死富 田帶刀後改飛騨守 女 有働大隅兼元室 棒千代 後仕清正公

女 實棒千代妹也 小關平藏武家室

治時 富田小左衛門

女 永祿十一年八月一日去葬于青潭寺

鑑義 隈部伯耆守 女 天文七戊戌十月十五日死去 花陰妙榮生年十八生味村祥 安寺二葬

親家 廿七代隈部式部大輔上總介法名高名須天居士天 文十九年六月十九日去葬于青潭寺

女 木野但馬守親政母也親政於南關戰死葬于 彰教禪寺號照山妙鏡母天正四年四月十一 日去葬于青潭寺

親氏 式部上野守 氏治 隈部軍治

親廣 隈部次良一說親水ヲ親廣ノ子トシ木野親政 又親家ノ子トス

治元 隈部五良兵衛

菊池風土記卷七

雜錄

菊池武朝申狀

菊池右京權大夫武朝申代々家業之事 右今度勅使如被申 將軍宮者、當家之忠功者、 不可過、元弘忠士、歟、因是難被關、群黨、云 云、謹檢、當家忠貞之案內、中關白道隆四代、後胤太 祖大夫將監則隆、後三條院、御宇延久年中、始而從下、 菊池郡、以降、至武朝十七代、不與凶徒、奉仕、 朝家者也、然壽永元曆之頃者、纓祖肥後守隆直、不 與東夷等之逆謀、奉守劍璽、受安德天皇之勅命、後 數年、勵忠勇、嫡子隆長三男秀直以下數輩致命畢、後 鳥羽院御代承久合戰之時、先祖能隆爲大番役、依進 置叔父兩人、隨院宣進戰畢、就夫當家本領數箇所、 爲平義時被沒倒畢、文永弘安兩度蒙古襲來之時者、 高祖武房、勵勇敢於戰場、施佳名於異朝、既抽日本之 爲日本之大功之由、顯天下之歌謠畢、後醍醐天皇御 時元弘三年者、曾祖武時入道寂阿承奉勅詔、同三月 十三日、打入凶徒將平英時之陣、父子一族以下無所

廿八代隈部刑部介但馬守法名仙空山鹿兵庫頭藤原 重行翌天正六年四月十六日赤星安房守親家 討負奔竹迫自是爲隈府城主其後佐々氏ト戰 豐前國於小倉自害

親次 隈部彌三良八管嶽住 山鹿彦三良藤原重政 南關ニテ討死四十一 室重安ノ母也 專阿居士

親安 廿九代隈部式部大輔山鹿城村在城山鹿彦次良重行 翌後改親泰

親房 天正十五年十二月廿日同父於同所自害隈部 次良法名泰岩居士 內空閑權大夫藤原鎮房室

親元 隈部七良左衛門 元家 隈部傳左衛門慶安 法名智仙居士行 二年七月二日去 年三十四 親種 隈部次良助 某 同三良助

親重 隈部藤五良

殘令討死畢、然者元弘一統之頃、義貞正成長年令出仕之日、如正成言上者、元弘忠烈者、勞功之輩雖惟多、何存身命者也、獨依勅定墜一命者、武時入道也、忠厚尤為第一歟云云、此條違寂聽之由、世以無其隱者也、建武二年尊氏謀叛以來者、武重令參洛、直獻忠誠之間、宸翰以下御感、特絕比類者也、於鎮西者、在國之一族等、致妙惠誅伐之大功、尊氏下向之時、於多々良濱合戰、勵武節畢、延元年中、武重下向之後者、致度々合戰、蒙都鄙之善譽歟、厥后武士令相續彼武名、馳廻肥後筑後、致度々之合戰、令護持遠近之官軍訖、興國以後者、武光奉成故大王入御、最初於八代城、自令對治一色入道々猷父子之後、申沙汰大小之籌策、令服大友少貳等於御方、二十餘年之陣、鎮西一統之大功者也、武政者令相承彼忠功、致度々合戰、運種々計略時分、令早世之間、武朝自十二歲之時、令參勤筑州大王之御陣、守父祖行跡、從令荷擔、鎮西御大事以來者、文中之比、了俊寄來肥後之時、數月勵防戰之武略、於水島陣、成了俊追落之功、鎮西致兩度靜謐訖、其刻武朝奉屬將軍宮、令在陣肥前國府、運諸方計策之處、今川仲秋相率松浦

以下之凶徒、打出博多之間、指道肥後守護代武國、致大綱合戰、追散仲秋畢、又大內義弘、豐前豐後兩國之凶徒、相共罷出之間、於嵯打陣致合戰、武光舍弟武義入道自關並武安令討死畢、然而後了俊一類、大友少貳大內兄弟數千騎、寄來肥後國之間、於託磨原、天授四年九月、武朝十六歲之時、任運於天道、忘命於公儀、雖為無勢、馳入多勢陣、抽戰伐之勇、一族以下銳卒數十人令討死、自身被疵、攻戰最中、將軍宮有出陣、而被馳向了俊、及御合戰之間、散在之官軍、少々依馳參御旗下、凶徒令退散畢、弘和二之比者、武朝守寂旨、奉仕將軍宮之間、一族以下扶持人等、受彼朋黨語、楯籠分領守山之要害、擬黽武朝之條、弗廻時日自馳向、各令追落畢、是則雖為私計策、偏所存公平也、且度々勅使被見知者也、加之元弘以後者、以當家武略、致九州每度之合戰、至于今相支了俊多勢陣畢、就中自元弘三年、至今稔弘和四年者、五十二年之星霜也、此間正平十三年以後二十七年者、顯興入道紹覺、憑武光以來之武功、令居住當家分國之上者、功勳之次第、皆宜存知者也、然則就忠之淺深、可有御成敗者、何被閣當家代々三

百餘歲忠義、被賞近年奉公阿黨之所望乎、亦任理非可有御沙汰者也、將軍宮御事、被受正平之救裁、為故大王御代官、年來被積勞功、御理運無相違上者、救裁豈可直餘儀乎、仍言上如件。

弘和四年七月 日

藤原武朝

良懷王報明帝書 按明史誤作良懷

臣聞、三皇立極、五帝禪宗、惟中華之有主、豈夷狄而無君、乾坤浩蕩、非一主之獨權、宇宙寬洪、作諸邦以分守、蓋天下者乃天下之天下、非一人之天下也、臣居遠弱之侯、編小之國、城池不滿六十、封疆不足三千、尚存知足之心、陛下作中華之主、為萬乘之君、城池數千餘、封疆百萬里、猶有不足之心、常起滅絕之意、夫天發殺機、移星換宿、地發殺機、龍蛇走陸、人發殺機、天地反覆、昔堯舜有德、四海來賓、湯武施仁、八方奉貢、臣聞天朝有興戰之策、小邦亦有禦敵之圖、論文有孔孟道德之文章、論武有孫吳韜略之兵法、又聞陛下選股肱之將、起精銳之師、來侵臣境、水澤之地、山海之洲、自有其備、豈肯跪途而奉之乎、順之未必其生、逆之未必其死、相逢賀蘭山前、聊以

博戲、臣何懼哉、倘君勝臣負、且滿上國之意、設臣勝君負、反作小邦之差、自古講和為上、罷戰為強、免生靈之塗炭、拯黎庶之艱辛、特遣使臣敬叩丹陛、惟上國圖之、

明帝得表愠甚、終鑑蒙古之轍、不加兵也云云、

征西將軍自ら臣と稱し口明國を中華明帝を陛下とあがめしは名義よろしからず惜むべし

菊池武光公ニ尊氏將軍ヨリ御教書有ル返事ニ云

受恩不報是形人ニシテ心畜類也受恩報怨何トカ謂也古今好ト欲スル所ニ非ス今尊氏兄弟ハ君恩ニホコツテ君ヲ覆シ奉リ大逆無道ニシテ畜類ニ劣レリ何ソ我レ此ノ無道ニ與セン哉偶人界ニ生シテ喜ト欲ルノ所ヲ不知畜類ニ隨エトヤ佛教顯ス處死後ニコソ三惡道ニ墮ト見ヘタリ生キナカラ畜生ノ類ト成ン事何ソ歎カサラン悲哉人皇九十五代御宇ニ至國忽チニ畜類ノ鬼國ト成事痛マシキカ日本一州都テ魔魅ノ掌ニ落ス事ヲ我今モ朝臣ト成リ一日モ命ヲ存テ憂事ヲ聞テ恨ス我自害センハ敵ハ利味方ハ損ナレハ忠臣ノ道闕タリ早尊氏兵ヲ率シテ肥後ノ地ニ押寄我首ヲ截本望ヲ

遂ヨ我小弱ノ兵ヲ以敵ノ強ニ切入數代弓矢ノ名ヲ殘ト欲ト云云

令旨

祖父寂阿元弘之軍忠不顧老體都鄙之忠節無比且兩息致命於君討死尤老心爭無其憐乎速於舉義兵抽軍忠者云本仙云天恩更不可有相違天氣如此仍執達如件

征西將軍懷良



與國元季己卯七月四日

勘解由次官

菊池次郎武重館

繪旨

立尋守義者忠臣烈士之切也撲逆撥國者武臣之節也于茲有二人之逆臣號小貳大友已爲其臣殺大内振逆威前代未聞也因茲武政隆政吞正兵之勇請舉義兵之旗誠豪傑之志淑感不斜早運逆徒誅伐之策可致天下太平之功爲捷意者也繪旨如此執達如件

應安三年正月十三日

右大辨

菊池肥後守館

大内刑部允館

菊池持朝公政隆公二代の侍付とて今に残れる有り左に記す余おもふに是は出陳の節の着到付にはあらざるや猶尋ぬべし

- 海郷式部少輔賴種
- 城右京亮爲冬
- 合志太郎重澄
- 本山三河守惟之
- 石貫民部少輔安元
- 宮崎兵部少輔重作
- 方保田丹後守守經
- 弘生式部少輔朝氏
- 竹崎安藝守惟氏
- 高倉因幡守守俊
- 鬼嶋出羽守邦久
- 西山河内守經道
- 關部伊豆守邦宗
- 高長門守高冬
- 赤星九郎重親
- 長田式部少輔基秀
- 馬見塚大和入道宥成
- 隈部上總助忠直
- 宗大和守重信
- 白石常陸助頼道
- 吉田式部少輔公貞
- 竹崎伊豆守惟岑
- 島崎右京亮公興
- 山北對馬守邦續
- 伊牟田兵部少輔家吉
- 赤星遠江守有信
- 高崎進古入道元雄
- 北島新左衛門氏也
- 編者曰與本ニハ島長門守宗次 平川與三衛門高冬ト兩人ニナレリ
- 平山遠江守盛世
- 赤星中務丞有繼

- 佐藤駿河守邦佐
- 市田美濃守惟寬
- 西山伊賀入道安貞
- 城六郎重岑
- 石貫主稅助廣政
- 塚本伯耆守親勝
- 隈部讚岐守基家
- 荒尾和泉守泰直
- 山口九郎左衛門朝昌
- 佐藤兵部少輔邦則
- 櫻井大藏少輔公岑
- 阿佐古式部少輔武貞
- 阿佐古清左衛門友貞
- 竹崎出雲守惟圓
- 瀬田隆慶坊快眞
- 早波山城守邦政
- 早波六郎次郎英冬
- 平山和泉守惟近
- 宇野刑部允忠元
- 内古閑圖書介賴績

- 隈部又十郎重光
- 若園山城守忠幸
- 伊牟田加賀守守親
- 小森田八郎右衛門邦治
- 小森田兵部少輔重也
- 小森田三河守經也
- 櫻井播磨守公綱
- 伊牟田上野入道宗興
- 山田兵部次郎朝明
- 久多羅木伯耆守良直
- 久多羅木三郎良元
- 瀬田兵部少輔武宗
- 塚本新左衛門親次
- 岩野山城守道時
- 秋藏備前守公尙
- 秋藏周防守公俊
- 合志藏人助隆門
- 山井勘翁由允重續
- 合志右近允武忠
- 窪田民部允惟冬

- 内古閑周防守誠長
- 佐藤大和守爲春
- 隈部八郎三郎朝夏
- 長野太郎重郷
- 鹿子木兵部少輔重貞
- 隈部民部少輔元成
- 隈部對馬守忠門
- 隈部近江守清本
- 宇津宮新太郎綱行
- 道田加賀守邦世
- 伊牟田勘解由允朝廣
- 高倉出羽守家俊
- 出田刑部允重綱
- 熊谷和泉前司直次
- 内藤彈正忠弘宗
- 詫摩藤内貞光
- 片山藤左衛門重光
- 田原武藏守家朝
- 古川治部允邦守
- 吉田駿河守友定

- 隈府八郎重治
- 内古閑刑部掾爲載
- 弘生太郎左衛門光弘
- 隈府次郎右衛門武治
- 長野修理允右俊
- 佐藤式部少輔爲成
- 城伊豆守朝成
- 葉田民部允元國
- 赤星修理允有直
- 結城次大夫友郷
- 方保田藤左衛門良清
- 隈部新左衛門弘通
- 吉田清左衛門守俊
- 阿部太郎次郎吉家
- 木野宇右衛門親景
- 高橋右京入道祐仙
- 小原筑前守諸元
- 田北伯耆守久長
- 小豆丹後守重綱
- 安田清兵衛守隆

合志丹波守重遠
城戸信濃守重詮

鹿島刑部允隆元
光吉刑部允

都合百十六人 内一人本書鼠損姓名不明

菊池右京大夫

嘉吉三癸亥正月日

持朝

城大藏大夫
吉田左衛門公也
隈部源兵衛守治
内田右京亮重貞
内古閑次郎左衛門朝貞
山北掃部助景直
隈部右京亮常治
宗與八郎盛頼
瀬田兵部允惟清
高倉圖書助俊直
相良式部少輔朝長
竹嶋兵部惟直
關將監公頼

隈部豊前守貞朝
北山城守公村
關部新右衛門朝家
小森田和泉守朝右
瀬田新左衛門惟夏
白間田又十郎武益
赤星右近武親
宗備前守重頼
竹島忠左衛門惟豊
隈部彌七郎清平
吉田新十郎公棟
赤星飛騨守房繼
古閑山城守貞藏

高橋薩摩守朝景
永野清左衛門運俊
内古閑周防守朝誠
本山十郎太郎能也
合志藏人少輔隆岑
小山十郎三郎運貞
窪田式部允重宗
赤星大藏少輔重生
城彌兵衛品岑
佐藤日向守重秀
白石民部允朝右
佐藤伊豆守朝經
隈部下野守鎮治
小足十郎太郎盛政
廣瀬刑部允忠岑
高瀬刑部允政元
佐野新三郎友清
千田尾張守行豊
鹿嶋民部允武詮
千田行川房

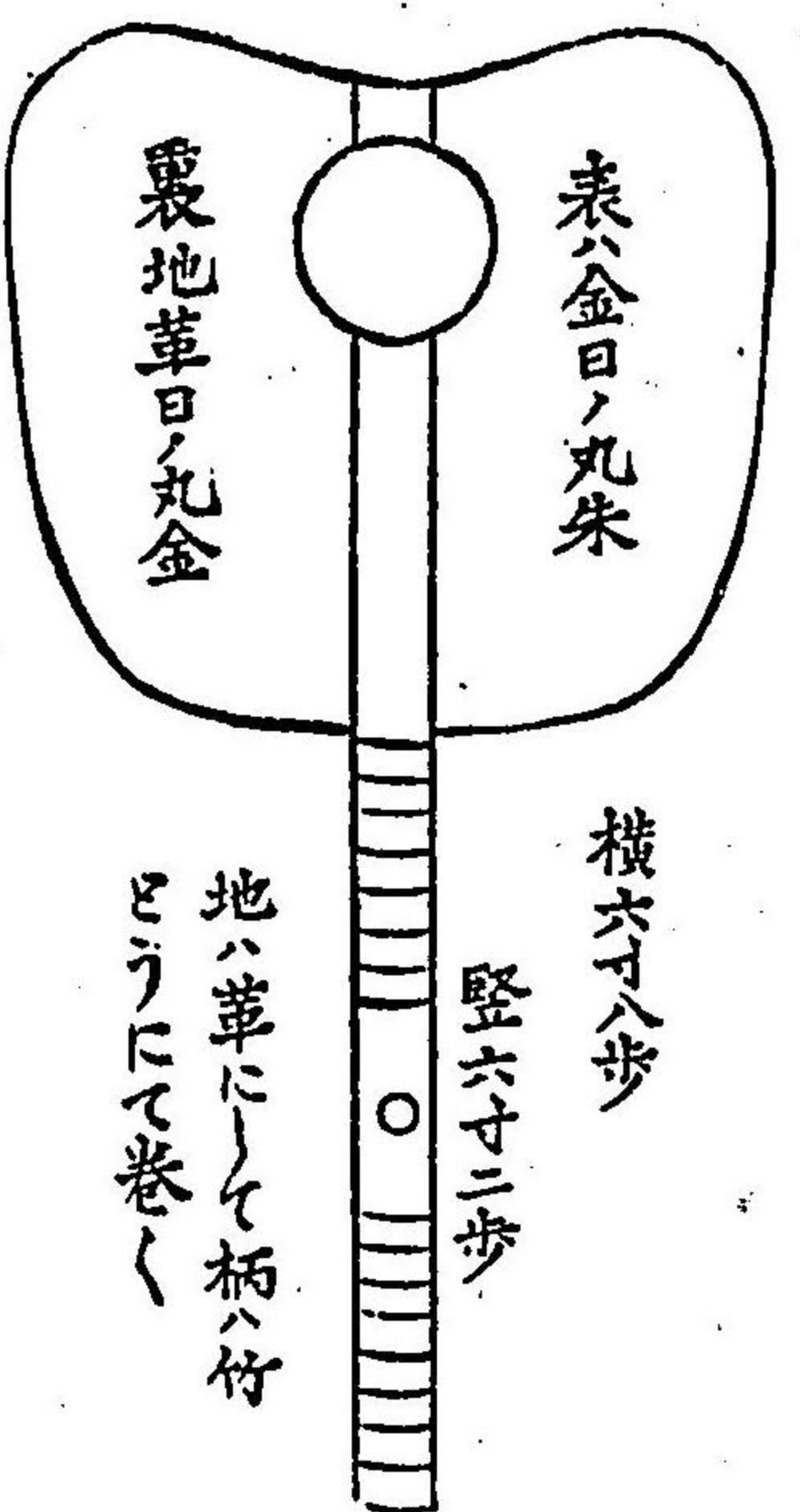
若園源兵衛忠道
阿左古清左衛門能清
小森田加賀守高也
關部滿龍丸
隈部右京亮重門
小森田四郎兵衛運清
山井丹後守頼直
隈部新兵衛頼夏
御宇田山城守直貞
馬見塚藤左衛門盛秀
竹崎又之允丸
多比良出雲守朝道
岩野彈正郷成
山鹿右近重詮
林田駿河守公康
和田兵庫頭重徳
木庭越前守重行
林原與一郎隆基
宇津宮三河守公郷
古庄出羽守宗光

伊倉掃部時長
虎口別當丹藏
迫間刑部少輔武宗
牧右馬允安滿
立田刑部少輔武貫
馬見塚新左衛門長行
若園源左衛門忠村
大河内和泉守氏直
馬見塚左衛門盛岑
竹崎圖書助惟岑
内古閑秋十郎運直
城六郎政元
西川次郎左衛門友政
岡田將監元成
大野加賀守弘成
木野刑部允親光
内田刑部允友明
一條十郎助光
大塚源兵衛盛道
伊牟田美濃守守俊

寺尾野左近景光
原田兵部允行成
深川傳十郎隆教
内田右左衛門朝藤
赤星安藝守有繼
平山中務少輔秀直
竹崎次郎左衛門惟村
田中彈正忠朝宗
山中對馬守經世
鹿兒木式部允房貞
合志掃部隆直
宗越後守重顯
加惠軒之亟武元
合志遠江守重郷
龜甲内藏助守家
津川又十郎公家
津江大和守邦郷
新開出羽守安眞
出田佐右衛門重郷
西山加賀守安親

市田尾張守雅家
石貫兵庫守政
荒尾伯耆守泰家
道田伊勢守國生
秋藏豊前守尙義
北島長門守氏定
嶋崎刑部掾興岑
隈部彌三郎親元
高嶋近江守元房
櫻井次郎三郎公村
弘生次郎太郎家久
赤星安藝守親家
出田刑部允重元

櫻井伊豆守公家
塚本若狹守親元
早波出雲守邦重
方保田新左衛門良雄
山口出羽入道祐昌
嶋伯耆守宗氏
湯郷治部允頼常
鬼島出羽守邦隆
關部兵藏邦郷
久多良村刑部良助
隈部十郎親次
城河内守資岑
城筑後守武東
出田刑部允重元
合五百十人 内拾五人本書鼠損姓名不知
永正元年三月三日
器物 軍配團扇
一軍配團扇征西將軍宮北宮に奉納有けりこそ今に北宮に在り
政隆
菊池肥後守



菊池氏の軍には良將の才有る人を軍奉行となし馬に乗り高き所に居團扇を持ち戰場を見せ味方のいくさ疲れて備みたれんと思ふ比伴の團扇を磨き太鼓にて下知して引入太鼓をうたしめて二陳を入替る故に次の軍先陳の敗れ來れども敗るるさしらす下知にて引と心得て入替る故におくれず入かはる次の軍の入替るを見て先陣の敗する兵氣を直して辭に引けるとぞ是右之團扇を用たる所也

御松雛子御能之遺品
一翁面

二三番神面 春日作 一蛙面 瘦男の面共云
一太刀 先年紛失 非美作

此外に衣裳等數多有り此に略す

按るに右之翁面は赤星道半島津義久を頼み隈部親永を攻し時北宮の事天正七歳三月廿一日の戦に薩州勢この翁の面を掠取歸陣せしかば時の能大夫藤吉雅樂と云者菊池家の寶物他邦に渡す事を本意なくおもひ雅樂薩州に三年程忍び居有所を尋しかば此翁面當國八代の様にかへしけるよしを聞て隈府に歸り座中と決し白銀を出して八代より買戻し再び隈府の寶となす雅樂の孫清十郎後に名を外記と云其後又甚左衛門と改む寛文三年六月甚左衛門と座中と翁面を争ひ公事に及び子細は甚左衛門か祖父雅樂か翁面たるに依て甚左衛門に讓受しと云座中は菊池殿より座中に下し賜りたると云て双方書物を上る郡奉行豊岡利助と云人の前にて對決に及たれ共双方是非不分明により佐藤傳七後宗加藤三左衛門後宗右兩人證據にて銀貳百目甚左衛門に遣し和平となるこの時の銀子は宗善左衛門重次後宗出し置其後座中より返さすと云傳ふ其後

妙應院殿綱利公 御花畑にて翁面蛙の面御上覽あらせらる蛙の面今紛失せり其後延享元年八月隈府右田勘左衛門出端の屋敷え

隆徳院殿 宗孝公 御成之節又々御覽に上る

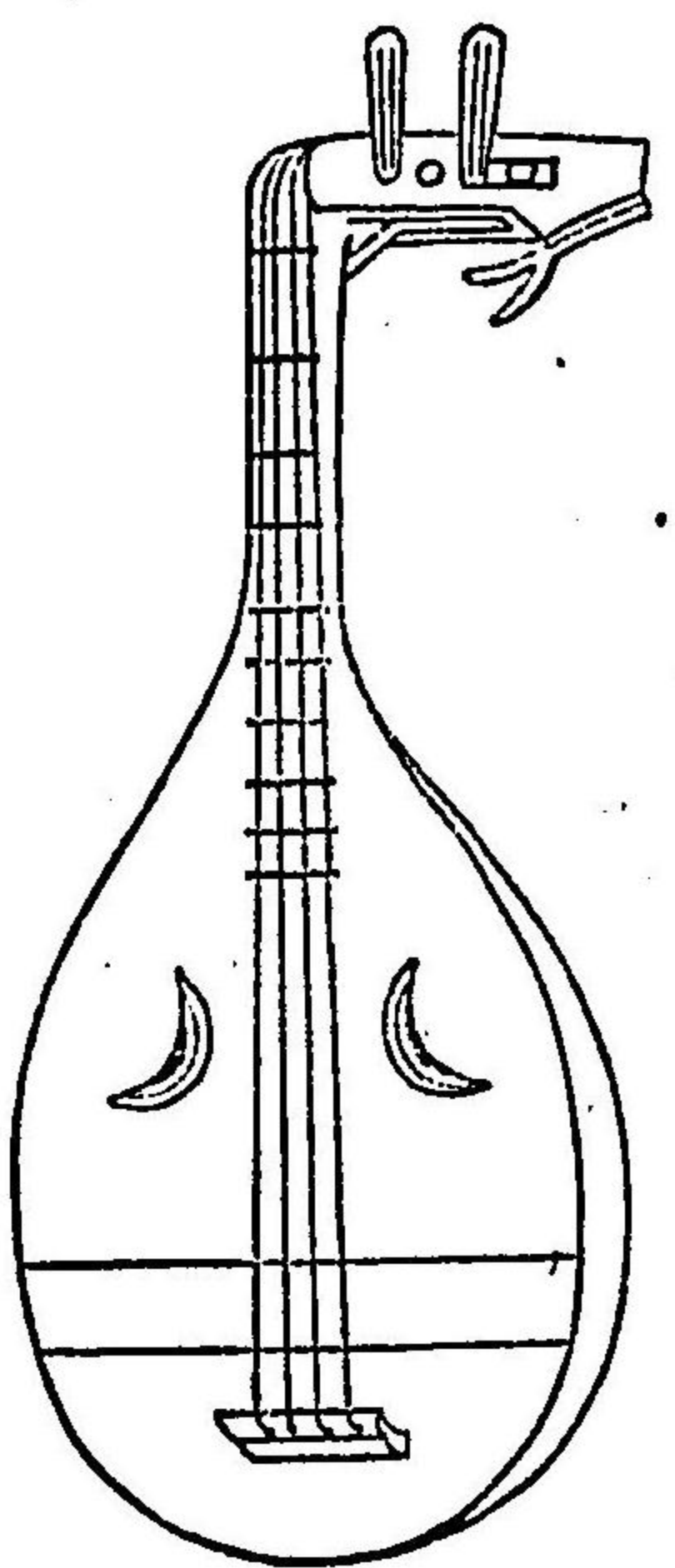
琵琶

一上妙見村の宮に在り當時座頭預て居る此琵琶は筑前と申人の所持せしと云筑前大和國吉野にてあるひと親王の弟子と成り琵琶を稽古いたし赤星はいたか天神と三七日籠りしに夢中に青梅七つを賜る夢覺めて枕の本に七つの梅有り是をはいたか殿に納む今のはいたか梅はその實植といふ今は梅といふははいたか梅の略語にはあらずや其梅の數に比して弟子七人を取る第一村上梅宅水次村の郷士村上外記の子也第二は梅養奥儀山大善寺其跡也第三は大堀木合志郡大津手水の内第四は山西小森の人南郷布田手水の内第五は熊本春日の人第八は上内田村の人山鹿郡中村手水の内第七は山鹿郡河原谷の人筑前所持の琵琶三つ妙見に傳るを雌琵琶といふ迫間村の名の都方に傳るを雄琵琶といふ先年焼失す四丁分村りわ都方に傳るをうたたね琵琶といふ此事俗説のまゝをしるす猶尋ぬべし

或は曰此琵琶は催馬樂をひくひわのよし雅樂の琵琶はこれよりは甚大なり又半月の形なき也半月二つ有るは即催馬樂の琵琶なりとぞ

琵琶長鯨尺の貳尺

ともの厚さ七步横七寸三步共に鯨尺也



正誤評説

一太平記大全に武光公は武重公の男と有り武光公は武重公の弟なり大全誤れり
一後太平記に征西將軍初下向の時に八代に入給ふと云々然れども當菊池にも御住居ましましてしゆへに其故事舊跡今菊池に在り
一又曰武光公高良山にて將軍義滿公と戦ひ降參せし

一羽根木村源吉と申者の屋敷内に在り塚印南天數本あり屋敷跡は西郷村の内に在り菊池軍記には毛利壹岐守下知して益城郡六嘉村に而首を切るとあれ共宗立菊池に逃來り此に隠居せしと云此墓今に人々太切にする事也猶尋ぬへし

山岳院

一米原村の内に在り大松の本に石碑有り高さ五尺餘横二尺餘銘左に記す

逆修之塔

寛文十庚戌天
菊池總政所大正院
十二月二十日
權大僧法印桂岩

是を見る時は三人の逆修也然るに人々此塔を山岳院の塔と稱して今は所の名と成る然共塔に山岳院の名はなし逆修有るからは其以前寺院にても有しや猶尋ぬへし

合志伊州太守の墓

一岩本村に在り自然石高三尺六寸斗横四尺三寸程厚さ八寸餘中央に彌陀三尊の像を彫る
左ニ合志伊州太守經譽一哲居士

右ニ 昔龜四年癸酉五月一日往生釋妙應
裏ニ 天正七年己卯二月日造立合志紀伊守と有り

追間刑部少輔墓

一東追間村高德寺跡に在り

花屋長榮藤原

春山内

天文十年辛丑
十月七日死去

表 追間形部少輔經吉 裏

山清開禪定
銘有闕而不知

城越前守墓

一木庭村峯泉寺境内に在り銘無し何代目といふ事不分明此寺城家の建立と承る時は城氏の元祖六郎隆經の墓にはあらずや

今村妙音寺之墓

于時天文十年辛巳

隣友周德禪定門

九月日孝子敬白

此墓宇野家光にては無之哉

寶山祥真禪定門

八月日孝子敬白

窓香勝次禪定門

正月三日施主敬白

菊池風土記卷之八

一國一己

一夫尊藩に於て阿蘇大宮司の神孫たる一國に類なきのみにあらず天下の貴名家たり八代の靈符天下に廣まれるあるは事にふれて求れば吉田氏の相撲の掌故主宰たる是を一國に尋ぬるに本より類なき事なれば誠に珍重の美にして尊藩の盛大を鳴すべけれ今尊藩に於て菊池郡にのみ有る者を擧て左に記す

十利之列

正觀寺

一正觀寺の來歴前に記すごとく數年佛法繁昌の淨境にしてあまつさへ五山之上十利の列位にのぼれり菊池二十代一國の中貴寺名多しといへども十利の爲邦公の時一國の中貴寺名多しといへども十利の列位に加はれるは此寺也他に類なき寺柄委敷事は寺院之條に見たり或説に八代に一ヶ寺有て今に廢寺となると猶尋ぬへし

軍陣之笛

高木氏

一高木上總助と云人江州高城と云所に居住有しが軍陣方に執行はるゝ笛を覺居けるに因て永正の比菊

神前山正高寺墓

現幸口德後主

逆修善根花翁正香

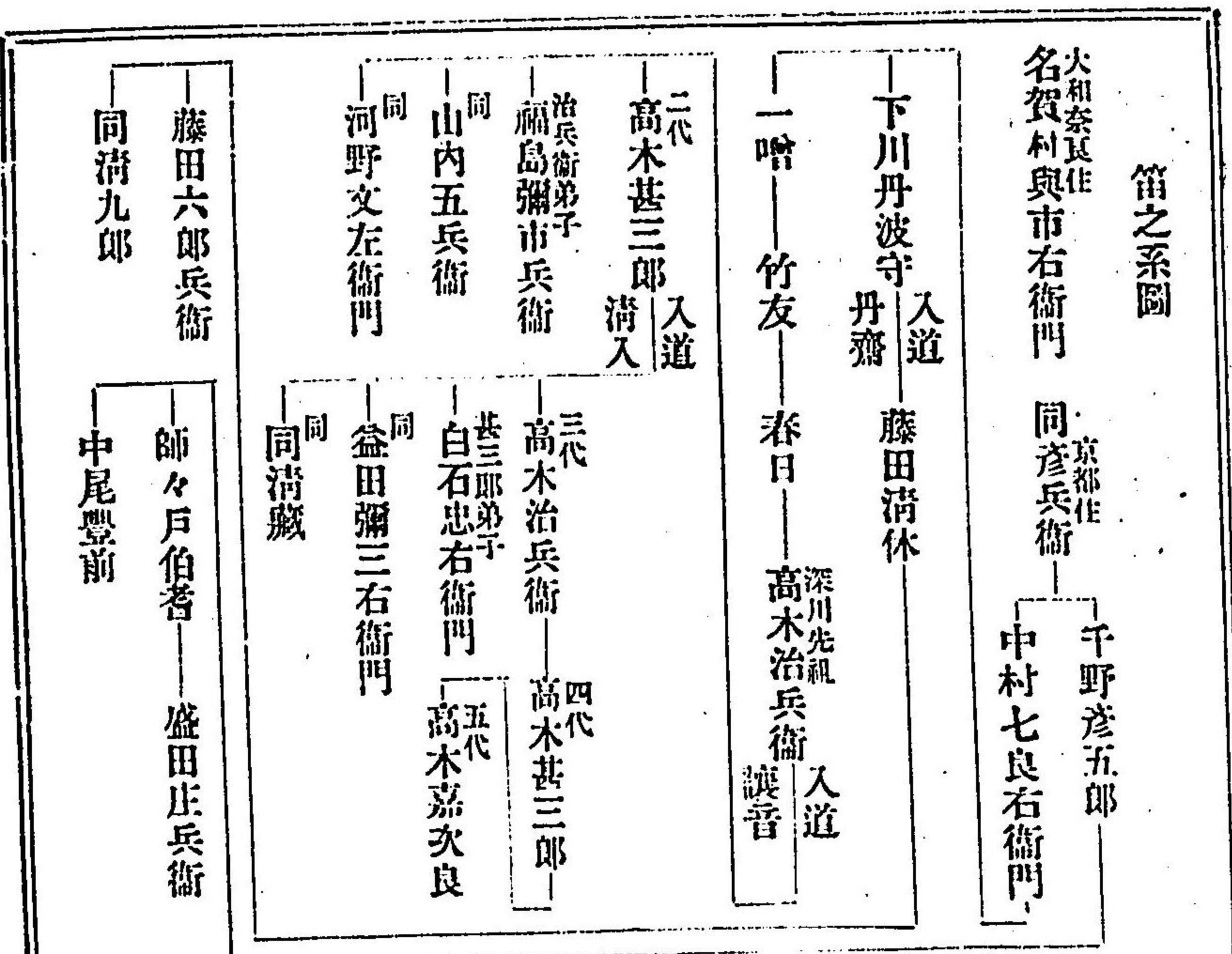
小國住下城播磨守惟秀爲現世安穩後生善處

于時永徳二天庚建

池家に仕へ程なく菊池家断絶に及ければ浪々の身
 と成り當郡深川村に居住す其子孫高木與五郎此代
高城を高右軍陣方の笛傳受して加藤肥後守忠廣公に
木を改む仕ふる内亂舞かたの笛も稽古可有よし被_レ仰付
 漢竹の笛御手つから拜領有り其後忠廣公の御家老
 下川左衛門召つれ上京有て下川丹齋弟子に付け能
 方一卷の笛不_レ殘傳受して三卷の秘書迄請取しと
 也京都滞留の内忠廣公御改易にて罷下し折から豊
 前小倉に到着の所に御當國を
 妙解院様御拜領被_レ遊御入國の折節小倉にして高
 木與五郎事御耳に被_レ爲_レ達召出さるべき旨被_レ仰
 渡_レ御入國之上浪人分にて十人扶持拜領させられ
 候て與五郎を改名治兵衛と可_レ名乗旨被_レ仰付_レ其
 後島原御陣の時御供被_レ仰付_レ彼地にて軍陣方の笛
 勤めし所に御凱陣の上 御城に被_レ召大功の儀を
 傳受いたし居候て御重寶に思召上させられ候ケ様
 の節は何時も召連らるべく候間其旨相心得武具等
 覺語仕居可_レ申尤笛一通子孫に傳置可_レ申旨被_レ仰
 付_レ候米五拾俵毛氈貳枚拜領させられ候事
 一貞源院様御代にも御懇に被_レ仰渡_レ

一妙應院様御代寛文元年六月三日爲_レ御合力米貳拾
 石宛拜領同六日御能被_レ仰付_レ首尾能相勤 爲_レ御
 褒美_レ御帷子壹井麻上下壹其拜領翌寛文貳年の秋
 田開地拜領子息甚五郎十六歳の時
 御目見被_レ仰付_レ六人扶持拜領寛文三年治兵衛甚三
 郎父子共に江戸御供被_レ仰付_レ彼地にて御用度々
 被_レ仰付_レ御褒美として金子拾兩宛毎年拜領甚三郎
 儀前髪を取可_レ申旨被_レ仰付_レ於_レ江戸_レ元服其刻御
 能被_レ仰付_レ候て御紋付の吳服壹重井長上下壹具拜
 領其後治兵衛年寄候に付隠居被_レ仰付_レ名を讓音と
 相改可_レ申旨被_レ仰出_レ之
 妙解院様御自筆に而名之文字を被_レ遊候を坂崎清
 左衛門木村古半平を以て御渡被_レ下奉_レ預戴_レ二代
 甚三郎に讓音家督田開共に拜領させられ江戸御國
 之御用數十年勤む然處年寄候に付御斷申上候に付
 て隠居被_レ仰付_レ甚三郎被_レ下置_レ候御合力米貳拾
 石之内拾五石井田地開共に嫡子治兵衛三代目に被
 爲_レ拜領_レ將又子甚三郎四代笛の稽古無_レ油斷_レいた
 し候様に被_レ仰付_レ誠に笛に於ては比類もなき家
 柄にして今に至まで其業を守りて失はず

笛之系圖



御鞍師

佐藤氏

一加藤刑部と云人伊勢國にて伊勢六郎左衛門弟子に
 成り鞍の事委敷傳を受け刑部子藤右衛門清正公に
 代へ中小姓を相勤む此時清正公の氏を憚り氏を佐
 藤と改む
 一妙解院様御入部之翌年藤右衛門子惣兵衛被_レ
 召出_レ地方高五石三人扶持拜領
 眞源院様之御時御扶持御取上開地拜領惣兵衛子傳
 七此代に又々高五石三人扶持拜領傳七子又助又助
 子傳七傳七子次郎右衛門次郎右衛門子傳吾
 我家の事みづから書載せ侍るはいかとおもひぬれ
 ども郡中の事委しく書記するからは謙讓してもらし
 置くもおほやけならさればいなみがたし此卷の末に
 書記するものなり
 天地元水神行事 澁江氏
 一人皇三十一代 敏達天皇五代之後胤葛城王王屬を
 憚り願に因て天平年中人皇四十五代聖武天皇より
 橘姓を賜り橘朝臣諸兄公と稱正一位井手左大臣是
 也夫より二代の後裔從四位下島田丸兵部大夫此代
 に和州三笠山春日大明神御鎮座に付營造之奉行職
 冥感微妙の事有_レ之人皇四十六代 稱徳天皇より

天地元水神を氏神に御附屬の勅許有り 御給旨を賜る今に本家に持
傳 其後水部乃主として代々勅許行事相承仕子孫の
外に傳る事なし 河海之事に付ては俗の 橘朝臣好古代に
は賊臣純友追討之功を以て從三位大納言鎮守府將
軍に叙爵し伊豫國を賜り宇和部の城主たり橘朝臣
公光代には人王七十四代鳥羽院御宇保安三年勅功
を以て公の一字を賜り是よりして代々實名に公字
を用來るなり其後兼倉頼朝公の代出羽國秋田郡之
内所々添たまはる橘朝臣公業代に頼經將軍より替
地として肥前杵島郡長島庄大隅國種が島豊前國副
田庄肥後國球摩郡久米郷を賜り此時より九州に來
り肥前國長島に居城公業鎌倉に仕へて軍功有り橘
朝臣公治代には室町家につかへて軍功を勵し度々
威狀を賜り橘朝臣公村初て氏を澁江を改む其弟三
人別て牛島中村中橋を名乗る勅許行事は澁江家斗
に傳へて末家には附屬せず此行事傳來相承をひて
橘姓嫡流之證據とする所なり杵島郡三法方郷潮見
山大明神上宮は正一位橘朝臣諸兄卿也中宮は泉大
明神島田丸也下宮は澁江牛島中村三社也是余が先
祖也神靈にして社司社僧守之今以退轉なく九月
二十九日には祭禮百味を備へ流鏑馬有り昔領知に

て有し時のことく民今祭て祭禮の供物今以感應院
より贈り來る上宮は感應院守之 當時院主を亮 中宮
下宮は社司守之 當時社司 社地潮見山は佐嘉御領分
也麓の村を溝の上と云連の池御領分也橘朝臣公重
代に御當國に來る當時肥前の同姓は大村侯御家中
大村右勝 君之御名字拜領 澁江惠門同橘右衛門澁江善
助同主水同國佐嘉領水神社司澁江華人長崎水神社
司澁江能登今に親施のしたしみをうしなはず古紅
毛人長崎同姓方之御守璽を受て船中不思儀の難を
まぬかれしより今に年々紅毛人渡海安全の御璽を
能登方より頂戴して歸國する事也公重子澁江九兵
衛子澁江與治右衛門與治右衛門子澁江藤右衛門藤
右衛門子澁江壽右衛門壽右衛門子澁江平之允平之
允子澁江貞之允貞之允子澁江宇内澁江壽左衛門弟
澁江儀平治別宅仕儀平次子澁江儀三右衛門其子澁
江時之允

宇野東風校
古城貞吉覆校

菊池風土記終

民草婦利

若木どりの歌とて讀める 讀人知らず
年毎に春の若木をとりそへて千代のはつたの窠木に
そたく

或人の曰、歳の旦に山に入りて、木をさる事有る
をことほきて、若木どりと名付けたるになん、其
木をば祝ひをさめて、つねにしもたかず、う月さ
月の比、はつたうゑのかま木にたきそむるを、其
日のことほきとするにや、是れ民の事は、ゆるく
すべきにあらざるををしめて、年の始より、お
のがつとめにおこたらず、遠くはかりて田うゑを
いましむるをもて、教としたるなるべし、
こぞの冬、水田のひとやをやめられしを、人々喜
びあへりける、年の始によめる

牧 正 聰

一夜あけて民の窠の末々もにきはふけふり春にかす
めり
ふりわひし床の水もとけにけり君かひかりの春を待
得て

或人の曰、冬の沼田に、あらがきゆひまはして、
土はかしらをさすばかりに茨を掩ひ、下は脛を過
るまで水をせき入れて、秋の貢のど、こほりぬる
民をば、その中につなきこめて、せめはたれる事
ありしを、水田の人屋とはいひしとかや、さらぬ
だに夜寒の風の堪へがたきに、はらひもあへずお
く霜を、夜の衣のうすきにかごち、はだへに迫り
てむすふ氷に、沼のうきねの浮世を恨みて、魂も
けぬるばかりに思ひわびぬれど、みのらぬ年に逢
ひぬれば、いかゞはせましや、家にのこれるはら
からなど、思ひやりつゝかなしみにたへずして、
とはかりかうはからひて、家をひさき身を賣りて、
やうやうとつくなへるもあれど、うるべき家もな
く、まいてこどもはらからもたぬ身には、罪あ
がなふべきたつきもしらず、手づから首しめて、
命たえぬるもありけむかし、今の君、御政をきこ
しける始の年にや有けむ、應がりをかごとにし給
ひ、こゝかしこゆきめぐりつゝ、民の苦しみ思ふ
らん事を、見そなはしきこしめし給ふに、かの人
屋を見とかめさせ給ひて、いとあやしみ間はせ給

ひければ、しかじかのよしを、人の答奉りけるに、
いたうあはれがらせ給ひて、からき政をあらため
おもきみつぎものはおき給ひて、人屋をとき
けさせ給ひしかば、國民喜びにたへすして、かく
よみきとなん、
君を猶あふがざらめや浪風もをさまるみ世の春を迎
へて

春立ける雪のいたう降りたりければよめる
堀 勝 名

秋にみむ民の貢もふる雪のためしゆたけき春のは
つ空

或人の曰、國の貧きを憂ひて、年のゆたかならん
事をいのり、末にはしれる民ををしへて、もとに
かへれる道をいさなへるは、この人の常に志思へ
りし事なりけん、さればにや、今此國のいたう富
榮わて、君の御心は、やすきたひらけく、民のつ
ごめも怠ることなくて、おのかしわざをたのしめ
るは、かゝるうたの心ばへの、する通りぬるし
しにこそあめれ、
はつ綱のうた

讀人しらす

新玉の年の初綱よりかけてにぐら小鞍の上にはな
さで
春田すく牛の引緒にねりそへよに繩口もとはなや
の繩
此綱は我にはあらず君がためはこぶ貢のこまのひき
づな
或人の曰、年の二日、家の主を始として、田長小
童にいたるまで、八聲の鳥を聞より起出でて、わ
らをうちつなをねる、あるじの妻もごくおきて、
餅ひなどやきて、つなねりのをはるを待ちて、こ
れをすゝむるを、はつ綱の祝とは云ふなり、さて
その繩を、さまざまの花の形に結ひたれて、ある
は壁にかけて、牛馬の鞍にも飾るなり、ひきすな
は、牛馬の小鞍よりかけて、からすきをひくつな
をいふ、になはとは、馬に物をおほせむ時、から
めつくべき繩なり、口もとはひきづななり、はな
やりは、田をすく時、牛馬をつかふ手繩なり、の
ちのうたに云へるひきづなは、はじめて貢物を奉
る時、引繩をも改めてつくべき事なれば、まつね
り置きて、常には用ぬ繩なり、是君をうやまひ

己をつゝしめる類なるべし、

木村 豊 持

打なひく賤が朝けの煙まで霞につゞく山本の里
初春の花鳥ごろも嬉しくも遊ふ處女の袖を連ねて
或人の曰、はな鳥ごろもは、はなとりをゑがける
衣なり、袖をつらねてつとひ遊へる、ゆたかなる
世のさまなるべし、
春といへば嬉しき物をまり小弓わらは遊に老も忘
れて

或人の曰、手まり歌を聞き、小弓の遊を見て、我
身の老いたるをもしらす、遊び戯れたるさま、い
わけなきわらべに同じ、是をや古の民とも云へり
める、そもそも手まりをもて遊へる事は、ひなも
都も同じかるべけれど、歌の言葉のひなびたる
こそ、さて中々にいとをかしく、ふるめかしけ
れ、小弓の事は、都にもたてて久しく聞え待らぬ
を、此國にはなほのこりて、春の始のわらは遊に
ぞしける、この事を思ふに、古の小弓のながれに
はあれど、その遊のさまは、おのづから此國の習
ひとして、都の遊にはことなるそなへになむ有け

民草婦利

る、里のわらはべども、皆小弓矢をたばさみ相つ
ごひて、西東にともがらをわかち、よくいるもの
をねらみて、射手の頭として、つきつきに従へり、
さてはまといふものをなげかはして、我前を過る
はご、そを射とめたるをほまれとするにや、はま
のとき事、飛鳥も猶おくれぬべくみゆるに、我おく
れじと放てる矢は、雨の如くにて飛びみだれたり、
かくてあたりあたらぬを正して、勝まけをあらそ
へるもいといごまし、これ里のわらはの戯にはあ
れど弓矢の道を忘れぬは、おのこの志なるべし、
か つ な

牧 正 聰

是ぞこの君におものゝ初めとや先つみはやす若葉な
るらん
長閑なる日影に出て、あまも猶いそなつみつゝ君祝
ふらし
讀人知らす
たらちねの齡をのへにつむものは老いせぬ年の若菜
なりけり
七種と人にはいひても野のひるや蓬あさみもつくし

六三三

てぞ摘む

或人の曰、まづ摘はやすとよみたるは、君を先とし己を後にするの心を、あからさまにもわすれぬゆゑ賤の女が、野邊の若菜をつみはやすを、是やおもひと思ひなしたるにこそあらめ、此歌の心はへの、まことよりいでたるを思ふに、此人國の政をたすけしより、下の心を動かして、上に向はしめしはじめにも有けんかし、よはひをのべにと云へるは、若菜によせて親をことほぎたるなり、そもそも若菜をつみてことほぎをのぶることは、上さま人のみ、歌には多く聞われたれど、下さまなるものは、くひものゝとほしきによりて、若菜をもつみあつむるなるを、ゆたかなるさまにもてなし、ことほぎたるこそ、親につかふる人の心にはあめれ、野のひるやよもぎあざみなどいへるは、まづしきさまを有のまゝによみ出でたる歌なり、凡七種の若菜の事は、むつきの上の子の日に、これをあつ物にしてなめそむれば、萬のやまうをのぞくとて、上はすべらさのたふときをはじめ奉りて、下は民草のはつかなる者に至るまで、皆之を

なめ初る習とはなりにけり、しかはあれど、年に一度七種をなめん、萬の疾をのぞくべきことわりはあらざるを、上さまなる人には、いかにおぼしてかなめ給ふらむ、この事をつくづく思ふに、御身常にあらかにおはしまして、あさゆふのおもひのなご、いみじううるはしきのかざりをつくし、酒肴にもあき給ふものゆゑ、御身はいたう肥えふとらせ給うて、御はらわたもたれくちなんどし給ふほごなれば、さまたまの御なやみも、これよりぞいでくめる、されば初子の日のみにもよらず、折にふれ時にしたがひつゝ、菜の葉くさびらなどいへる、味のあわあわしきをめでさせ給ひて、御身もすこしやせ給はんほごならましかば、御やまひもおのづからのぞかせ給ふべく、かつはおごりをまし給はじとの御戒ともなるべきにや、けだし下様なる者は、やまうのためにしもあらねど、年のなりはひのたらざらむ事を、種々の葉など取まじつゝ、うるをまぬかれぬべきやすがとぞすなる、これ一年のはかり事を、春のはじめにいましめたるものならんかし、

そのうしにまぐさよくかへ明日よりはこそぞのあら田に鋤おろしてむ

或人の曰、これはすきおろしの歌なり、年の始十日餘りひと日といふにあたりて、田をかへすわざを始むる事あり、此をすきおろしと云へる事は、去年より壁にかけ置し鋤をとりおろし、田をすきそむる故なり、これをすきことわづかに一うね、あるひは二うねにしてやみね、あるじかはらけをまうけ、妻はもちひなご養とのへて、田長のかへるをまちて、ことほぎをなす、これをすきおろしの祝と云へるなり、かくてのちきさらぎの初までは、又すきことなしとかや、からの歌にも、三日の日にすきとぞ作りたりける、三日の日は、此國のむつきの日に當れりとなむ、しらかゆのためしの管の敷ゝにみのりみのらぬ秋ぞしらす、

或人の曰、年の始十日餘り五日の朝けに、白かゆをすゝれる事は、七種のあつ物をなめ初の心に同じかるべし、但民の家にては、竹の管を敷々きりて、たなつ物の名、おのおの書つけて、かゆのか

まに打入れてにる事あり、これをばためしとは云ふなり、さてその管の中に、かゆのみてるみたるを見て、年のみのりみのらぬをしるなり、みてるをみのりとし、みたるをみのらぬとして、そのみてるにしたがひて、たねをまく習なり、みのりみのらぬは、人のちからにはよらで、天地のしわざなれば、わたくしにはからずして、たなつ物の神に問ひまゐらす心なり、私に計らぬが、民のつゝしみなるべし、

つなひきのうた
新玉の年の緒なかくよるつなはゆたかなる世のためしにそ引く

或人の曰、から人の河をぬく戯さは、このつな引の遊にたり、此國にては、むつきのもちの夜、又は葉月にもひくことなり、民の家々よりなはを出だし、大つなにより合せて、ともがらを西東にわかちてこれを引くに、ひきかちたらんかたは、たなつものよくみのりて、年ゆたかなるよし云へり、此つな引をはりてのち、その里の長なる者の家に納め置きて、事あらん時にもちふるなり、火

なごおこりいで、けまがたきに、家を引たふすべ
きためなりと云へり、春のいよまあるにまかせて、
このそなへをなせるなるべし。

とよもち

朝日さす池の心もうちとけて氷を出づるなみの浮草
吹くも稍長閑けき春の河風に汀の氷とけにけらしも
或人の曰、からのふみにもこち風凍をどくと云へ
るは、ささらぎの始なるべし、これや田をすくべ
きはじめなるべし、

田がへすをのこともに、かれいひおくりけるに、
くろまめをそへてやるとて、 岩野の民すなほ
あれしその去年の田のくろまめにうて茅か下根のし
たくつる迄

或人の曰、これ民のなべており立つころなれば、
二月の初なるべし、からのうたにも、四の日あそ
をあくとつくりたりしは、此國のささらぎにあた
れるとかや、これは伊形のすなほが、山本の郡岩
野が原に耕したりし時の歌なり、
さつて、はいつちへゆくぞ足曳の山鹿の市に馬かひ
にゆく 編者云サツテ、の
注解下に見たり

馬買にゆかは若草かり置きて我はまたむへはやく來
まさぬ

或人の曰、此歌はかへし歌なるべし、

あはれにも今朝うまれたる馬の子の御籠の前を三度
めぐりて

木葉の民しげる

春の田をかへすくも思ふ哉君にみつぎの秋の頼を
或人の曰、上にうつくしみふかき君しおはしませ
ば、下にかくすなほなる民もありけり、
おくれじと苗代いそぐ賤の男や夜さへいねすあら田
うつらし

或人の曰、伊形の質が、オカカ 嶺崖山に住ける比、夜更
けてくは音のしけるをあやしみて、人に問ひけれ
ば、となりのをどこの、田をうつなりといふを、
きつてよめるになん、

都の人の、歌枕見んとてつくしへ下りけるが、岩
のがはらを過ぐるどて、耕すをのこごものいとま
なきを見て、うしとおもふも力なの世やといへる
ふることを、打ちすんじけるを、をのこ共聞居て
よめる、

田はつくるてふ

木村 豊 持

賤の男がまたすきのこすかたへには小草花咲く春の
小山田

或人の曰、ささらぎのはじめつかたより、あら田
をすべて鋤返して、たねおろすべき時をまつほど、
うらなる日にからし、しめやかなる雨にうるほ
しつ、草根もやくちて、土さへいたく肥ぬぬ
るを、天の時にしたがひ、地のよろしきによりて、
人の力をつくすことを云ふへかめるを、まづしき
民の獨なご住めるは、力たらずして、草にあれぬ
るまで、鋤のこすも多かりけり、時におくれて、
小草花咲くまであらしたるさま、目に見る心地し
ていとあはれ深し、

田うち男のうた

八雲たついでもの國ゆ、おほみたの田長い來たり、
みとしろのおほみたうゑん、おほみたの西のせまぢ
も、大ちまち東のせまぢも、大千町中のせまぢの、
みとしろにみしめ引きはへ、たなつ物けふまきそめ
て、君が代を祝ひぞまつる萬代までに、

からすきのからくて過ぎし年月もうしとはいはずお
のか仕業を

或人の曰、からきにたへて、つとめにおこたらぬ
は、仰いでは天にはがす、ふしては土にもはづる
事なき民なるかな、

たらちねの爲めに田がへすからすきのうしとは更に
思はぬものを

又曰、あげまきの童が、牛を引きながらよめるとな
ん、君が爲めをおもはで、たらちねのといへるは、
いまだいとけなくて、猶ほみつから、田畑をうけ
つくれるに、力足らざれば、みつぎ物には心なく
て、只父をたすけむとの思なるべし、

今は又世につかはれぬからすきのからくて我身老い
にけるかな

又曰、八十年餘の翁が、おのが子うまごなどの耕
すを見て、田のくろにふしながら、よめるをなん
老の身の、耕にたへぬをなげきたるなるべし、
吾がせこはかの山畑に麻蔭きつつしかいもが布に
おらんかも

吾がせこよ特ひの牛はしぬといへどいたくなわびそ

或人の曰、田うち男の歌は、田がへしをすむる言葉なり、春の始に木のくはをもちて、民の家ごとにいたりて、この歌をうたひて、田をうつまねをする事あり、いにしへ八代の郡にて、いづもの大社にみとしろを奉りし時、彼國の人來たりてみとしろにたねをまきそめしより、民の事をはじめきとかや、その言葉の郷にのこれるなるべし、春の田の菜の葉むれはむ雁鶴おへごもさらす立空やなき

いつしかに野邊のおたねもく、立ちぬ今はなふりそはなの朝霜

或人の曰、立空やなきといへるは、かり追のうれひたる歌なり、今はなふりそと云へるは、く、立のいちはやきに、春のさねかへらん事をおそれたる歌なり、そもくかり追といへるは、春のかりのかへらんとする頃、己が身をやせしめて、かく飛行かんとて、たなつ物ははまだ、菜の葉のみはむ事あれば、其のかりをおごろかさんとて、なま竹をさくらにして、あわたしく打ならすをいふなり、く、立のいちはやきと云へるは、春まだ

きにあた、かなれば、只一夜ふた夜の程にも、はやく、立ちて、花もよく咲出づるほど、又さえかへりて、一度の雪霜に逢ひぬれば、はなもくきもみなうふれて、つひにみのりもやらず、く、たちゆくものなれば、そをおそろふゆゑ、いちはやく、立ちぬるをば、中々にいとへる事なり、雁鶴のわさはひは、のぞかばなとかのぞかさらん、雪霜のわざはひにいたりては、いかはせましや、こにもかくにも、民の心つかひこそ痛ましけれ、見渡せば野へは菜種の花盛さぞな小蝶のうれしかるらん

昔誰野にも山にもみちのぐのこがねの花のたねをまきけん

或人の曰、今はかりく、のうれひもなく、雪霜のわざはひにもあはで、花のさかりなるを、喜びてよめるなり、わざもこがつ、ほのもちひつかんやとけふは野のへに逢つむらんものならふこになくはせそあしものつ、ほのいひを親はくふとも

或人の曰、つ、穂と云へるは、麥いねなどからは、にてこぎ、あわをからさほにてうちちらしたるがつちにおちて取りあげがたきを、そのまふみかよひて、けがれたるゆゑに、あしもとのつ、いほはいへるなり、こと終りてのち、土塵共にかきよせて、たはらに入置きたるを、春になりてくひ物のとぼしき頃、取いで、水にゆりて、土塵をさりと、もちひにもつき、いひにもたくなり、物習ふ子になくはせそといへるは、里のことわざなり、其の故は、足下にふみけがれたるものなれば、そをくひたる兒は、おのづから心おとるさまになりて物をもねおほへすとたり、これをさなき兒どものおいさをことほぎて、たふとみ云へるなん、いと有がたき親の心なり、伊形のすなほがいとけなきて、ち、の家に入りし時、田がへすをのこごもにとらすとて、つ、ほのもちひをつきたりしを、女のわらはがつきにもりて、すなほが前にさづけければ、母のおごろき、それなまゐらせそ、つ、ほなりとて、ことさらにつきまうけたるに、とりかへてすめられしを、すなほがあやしみて、な

と彼らと、ことにはし給ひにけむと、いひたりければ、をのこは君にもつかふべし、おいさきめでたきものなれば、かくするそと答へられしに、あなもたいなしや、わらはも民なりといふに、耕もまた君につかふるにあらざらめやと聞きしも、いはけなき心にとまりて、わすれがたくなんかたりきとかや、少女子は櫛笥の小櫛さしもあへす親にこふこのまぐは取るなり、たらちねのかふこや飢ゑぬ枝ながら眞桑取りもていそぐ少女子いくばくのくはこかへばか野を遠み眞桑求むる里のをとめら筐にはみちもみたすもかへらばや桑こうゑぬと母や待つらん少女子よ芹をなつみを今朝のあさけ山時鳥なきぬちふなり

或人の曰、里の諺に、時鳥の初音を聞きし日より、芹をばつまぬものなりといへる事あれば、少女子を戒めたる歌なり、思ふに時鳥は、春の末夏の始

より、鳴きそむるものなれば、その比ほひ、水もやゝぬるみて、蛙のこの生るゝころなれば、それをくひて、人をやぶらん事をいましめたるものならんかし、都にはかゝる戒もなきにや、夏にいたりて芹をくらふ人も有るなり、

時鳥田をつくればや鋤鍬をかけたる門も鳴渡らん山ばたの大藜色づく今よりやのべの葛根はほらすもあらなん

或人の曰、春のかてにとぼしくて、麥のほにいつる間を待かねつゝ、をのこは葛の根をほり、女は菜をつみてくらせる程、いとあはれなり、くづねと云ふべきを、かつねと云へるは、よこなまれるにやあらん、里の習にやあらん、いづれもおなじかなの通なるべし、

けしねにもからは刈らなん山ばたのひなたの麥はびは色にして

或人の曰、なべて刈取る頃にはあらで、朝け夕けのまふけに、かつくかるをば、けしねがりと云へるとなん、けしねとはけしいねなり、けは朝け夕けのけに同じ、いねの事なり、しはやすめの言

葉にして、ねはいねなり、さればいひにたくべきいぬを云ふなり、いねにもとつきたる言葉にして、麥にも粟にもかよひ云ふ事となるになん、是貧しき民のさまなり、

からばしのからきしわざにこぐ麥もけむつかしとは何思ひけん

或人の曰、是麥の穂がけの歌なり、穂がけと云へるは、まづかりたる初穂をば、神のみづがきにかけて手向とし、さて飯にたきて親のみたまにすめ、その餘をおのゝくからふ事なり、からばしとは、青竹をわりてからめたるが、鳥などの口ばしの如くなるをもて、麥稻などをすきとるものなり、此事からきしわざにあれど、事終りて後は、中々に喜びとなれりとなり、さばかりからきめをみずば、いかでか此の喜あらんやと、思ひかへしたるなるべし、

わぎもこが花のかつらもあれにけりこがひ糸くりいとまなの身や

或人の曰、我つまのおのがしわざを、よくつとめたるをあはれみて、よめるなるべし、はなのかつら

と云へるは、たはふれの言葉なり、たはふれたるにて、たのしめる世のさまをしるべし、

たらちねはやすくいまさね麥もよしこがひも得たり安く座さね

或人の曰、此歌はこがひ糸くりといひし女の歌なるべし、麥もよしとは、わか男のよくつとめたるを云ひ、こがひもねたりとは、みづからのさいはひを喜びて、ちゝはゝにつげまるらせしになん、此をどこあれば、此妻もありけるにこそ、

手引の糸のあらしくしき絹をおり出でたるを、思ひかけずも國の守御覽せさせ給ひて、いとをかしきものにやおほしたりけむ、御衣に調せさせ給ひけるよし、仰せ下されけるに、守の御身にふれさせ給はん事はおほけなくさらにもいはじ、女房たちのにしきにあける御めうつしには、さぞなむさしとも見給ふべきを、御手づからたちねはせ給はんこと、思ひやればはづかしくて、

木葉のすなほか母

思ひきやしつはたぬのを七夕の雲の錦に立ちそへんとは

伊形の質か曰、是我民たりし時、たらちめのよめりしなり、かのきぬいとみじかくて、君は御たけ高くおはしければ、御そにはかた袖たらざりけりとして、又おりつぎて奉るべきよし、仰ごと有りけるに、我にかはりてよめよとて、よませけるにかくなん、

伊形の質

國民をばぐむ君がみそなればはたばり廣くおらまし物を

御きぬの袖をかみ奉りて 木葉のしげる

大君の御袖を掩ふ國なれば立ちよるかげのたのもしき哉

恒 篤

或人の曰、かの絹を奉りければ、君御喜の餘り、すなほが母に、祿かつげ給ひて、有りがたき仰ごとなど聞かせ給ひきとなん、かくてそのよしをめぐらし文して、野の末山の奥の民までも、知らせ給ひしかば、聞くものみな喜びて、絹をおる事、始めてひろまりにけりとなむ、

恵は

葛かりに行きて後よめる 岩野の質か妻
夏山の麓の眞葛誰がかりこし我せこが衣にせんと我
ぞかりにし

或人の曰、からのうたにも、葛ののびてなかつ谷
にうつれるを、こゝにかりこゝに煮てすしとな
し、あらぬのとなすと云へるは、古の聖の御きさ
きの、たらちねの家におはしけんほど、女のしわ
ざをつとめ給ひしさまを、みづからよませ給ふと
かや、きさきとならせ給ふ御身にだに、斯る事を
し給ふは、女のもとを忘れ給はぬ御心ならんかし、
さればいやしきもの、妻子などは、まいてしばら
くもおこたらざらまほしきことになん、けだし此
歌は、旋頭歌なるべし、

老らくの身に輕かれと婦のこのおりにし布の袂涼
しき
老か身の身よくかたよくよめのこのたらぬふ絹はき
れごあかぬかも
中々に涼しくもあり夏衣いもが手織のおさあらく
して
島崎のさらしの布は有りといへどいもが手織ぞいや

清げなる
山鹿寺をこそその古寺にうみそへて此夏衣おりきてん
かも

山口の瀧のほとりにて、女共の糸くりけるを
見て、 猿 唄 の 勘

山姫の車のもりに引きかけてよるてふ糸は瀧の白糸
我せこが山別衣おらんとてよりにぞよりし瀧のし
ら糸

或人の曰、猿崖の南にある瀧を、山口の瀧と云へ
るにや、車のもりは、山口の里にあり、山別衣お
らんとよみしは、糸くりの女がかへし歌なるべし、
豊 持

山姫の己か物とやなつ引の手引にさらす瀧の白糸
立田姫手染の糸のいく千入山の錦をおりはへてみる
谷の藤野邊のわらびもうらとけてしづなとるべき時
は來にけり

或人の曰、しづなと云へるは、わらびのうらとけ
たるをいひならはせり、そをとりて苗代にしきて、
こやしとすることなれば、わらびにもあれ、藤に
もあれ、なはしるにしくべき草をなづけて、皆し

づなと云へるとなん、

小山田の杉の木かげにしめはへて水口祭る里の神主
木葉のすなほ

あすよりは水つゝまんとますげ生ふるあら田の面は
けふぞうつなる

讀人しらす

荒小田のにひばり路も水越えて種まく頃になりけ
るかな

寛 流 齋

小山田のしめ引きはへて祈りつゝ君に貢のたねおろ
すなり

牧 正 聽

小山田やあせゆく水を引分けてこなたかなたにまつ
る苗代

いくばくの田を植わんごかますらをが昨日も今日も
種おろすらん

行水をこなたかなたにせき分けてしめはへにけり小
田の苗代

津 田 恒 篤

せき入れし水もどりの色見わて種蒔にけりしづが

苗代

豊

持

たなつものおろすは多し小田の原豊なる世のしづが

苗代
ますらをかまかする水のひきくもげにあらそはぬ

小田の苗代
ますらをが苗代小田にせく水もまかせやすきや川づ
らの里

此里は山方かけてせく水をたよりに急ぐ小田の苗代
雨降れば苗代小田の蛙さへ水を心にまかせてや鳴く
降雨にせき入る水もますらをが心になふ小田のな
はしる

讀人しらす

若なへもすゝめがくれになりけりあらしろいそげ
小田のますらを

或人の曰、あらしろとは、あらくすきかへしたる
ままにて、いまだならかならぬを云ふなり、そ
の田に水をせき入れて後、馬くはもてかきなら
して、苗をううへくするを、あらしろかくと云ふ
となん、人も馬もいたく力をつくせる事なれば、

俄にはいで來がたきによりて、かくいましめ云へる事なるべし、

五月雨はけしねのむしろ打しめりかたつき麥をほしぞわづらふ

或人の曰、けしねのむしろとは、かてをほしたるむしろなり、片づき麥とは、麥の皮はあからさまにはつきはがしがたき物なれば、先なかばばかりつきて、後再び搗く事なれど、まづしき民は、片づきをもくらふものなるべし、しづの女のまづしきに苦めるさまかくなん、

山畑のあかざにまじる豆の葉も君と吾としつみはやしなば

或人の曰、貧しきを樂しみて、いもせの中いと睦じきさまなるべし、まめを食ひ水を飲みて、うるを忘れたる人なるべし、

あすよりは初田うゑむとよもすがら早少女やとふをさのよび聲

西岡維則

稻種を天のさなだにうる初めしためしを今に早苗とぞるなり

或人の曰、天照す御神の、いなだねを天のさなだに植ゑそめ給ひし事は、日本紀にみえたるにや、今にそのたねを傳へて民を養へるは、彼の御神の御めぐみの、世々に絶せぬ喜びて、そのもとを忘れぬ心より、かくよめるを、愚なる民は、只己かしわざとのみ思ひて、御神のうるそめ給ひし事をもしらぬは、神の御恵の、只此事のみにしもあらで、極めて廣く大いなる故、さしてそれともなづけ難くこそあらめ、

木村とよもち

賤のめがとし有る秋をたのみてやさ苗とらん千町田のはら

津田つねあつ

千町田にすげの小笠のかすみわてゆたかなる世のさなへとるなり

西岡維則

小山田のしづがぬれぎぬ濡そひて目をふる雨にさなへ取なり

緒方知古

海士人のしほたれ衣みなと田に又ぬれ添へて早苗をぞとる

木村とよもち

おやみなき雨もいとほす里の子は植わて早苗の秋や待つらん

津田つね篤

薄きこき賤が門田の若苗にわせもおくても色ぞわか

打なびき一つみどりの若苗も先取からに早苗をぞし

ほりかつな

急がぬも田子の心や五月雨のはれておくての早苗とるなり

松村昌條

せき入る山田の水に夕月の影うつる迄早苗取るなり賤の女が袖もほしあへず時ぞとや夕暮かけて早苗取るらん

かつな

わせわくて同し緑の早苗草千町をひろみ植渡すなり

松村昌條

千町田の緑の早苗遅れじと取手數多に急ぐ賤の女豊なる秋も知られて今日幾日山田の早苗とれどつき

せぬ

つねあつ

豊なる秋も知られて少女子が取手にきはふ小田の若苗

小山田に取れども盡きぬ早苗にそ豊なるべき秋ぞみえける

とよもち

少女子がとりく植うる早苗にも豊なる世の時ぞし

つね篤

千町田に猶ほぞ餘りし賤の男が手玉もゆらにとれる

さなへは

けふ幾日みゆれどつきぬ千町田にさなへ取るくう

是常正根

つきせすも田面に残る若早苗引にあまたの神はみゆれど

つねあつ

こゝかしこつやく小笠のそれよりも餘りてみゆる小田の若なへ

とよもち
未かけて秋のたのみぞしられけるうへもつくさぬ賤
が早苗に

つねあつ

賤の女の節立たぬ間と急くらし取手暇なき小田の早
苗は

讀人しらす

わきもこがけこのそなへぞ豊かなるいくら計の田子
やとふらん

早苗とるやとひの田子の數々にけこのそなへも暇な
の身や

われはしも初田うゑたり人みなもうゑがてにする初
田うゑたり

田の神のおろしのみきに早少女も田長もいたく酔ひ
にけらしな

ますらをば小田のあらしろかきさして柳がもとにう
まやすむなり

うなるこよ小篠をりもて打はらへうしのそびらにあ
ふ付きぬなり

明日よりは足あらひてむのこる田もけふ植ゑはてぬ

日は暮れぬとも

或人の曰、田をうるはて、里にかへるを、さのぼ
りともいひ、又あしあらひともいへるにや、けが
れたる足をあらひて、やすらへるなるべし、是は
田長の田子をはげまして、つかへるさまなり、

讀人しらす

つかぬべき秋のいな手のたらしとやけふうゑわたす
苗たらずして

或人の曰、いなてとは、いねのつかね緒を云ふな
り、里の諺に、なへたらすは、いな手たらすと云
へる事あり、秋のいねの多くて、つらね緒のたら
ぬを云へり、苗のたらぬを、中々ことほぎてかく
いへるにやあらん、

さのぼりのけふの祝の嬉しきは牛に馬にも米はませ
つ、

田の神に昨日まつりしおほみきのおしろのみきにけ
ふも酔ひにけり

さのぼりし里の少女子暇あれや川瀬に出で、こあゆ
つるなり

或人の曰、これさのぼりの歌なり、おのれ先にさ

のぼりぬれば、人をたすけてううるなり、一里皆
うるはてぬる後は、かたみに行きかよひて、酒な
ごたうべて遊びたはふる、事、三日四日の間なり、

女ははじめてくしけづり、かたちよそほひて、とも
ごち相つごひて、いで遊ぶ事なり、

とみ草のとし有る秋を祈りつゝ飯たくかまに苗たて
まつる

つゝ井津の上に早苗を手向置きて水うけ草の水をこ
そ祈れ

或人の曰、さのぼりの日、苗をもてかへりて、か
まといづゝに奉りて祈る事なり、井には水を祈り、

かまにはいひにたくべきを祈るとぞ聞えし、

田草引く比な忘れそしはし只やとひのたごはいなば
いぬとも

或人の曰、やとひの田子のさのぼりのいとまに、
家にかへらんとするを戒めて、あるじのかくいひ
たるなるべし、

さのぼると思ふ心の怠りにうるし山田や草にあれ
なん

或人の曰、是もあるじの、田子を戒めて云へるな

るべし、唐の歌にも、はなはだ大いにすさむる事
なかれと、云へる心ばへなるべし、

小山田の緑も深く成りにけり植ゑて早苗の根やくゆ
むらん

或人の曰、くゆむとは、苗の根ざしたるをいへる
なり、緑の色まされるは、根のくゆみたるしるし
なりとぞ、これ田草をひくべきしるしなり、根の
いまだくゆまざるに、つちを動かしぬれば、苗な
やみて色きはむなり、くゆみてのち久しくつちを
うごかさざれば、草の根にからまれて、苗やする
なり、始めてうるし時より、みどり一入深くなり
ぬるを見て、皆おり立ちて草をひく事なりとぞ、

里の翁の語り侍りき、

洗ひにしもすそもいまだかはかぬに又袖ひちて田草
ひくいも

あけはまた田草ひきてむいざやこら夜の暇に水まか
せてよ

君が田のあせこす水にまかすれば我田もいたくうる
ほひにけり

稲葉こそ目さすばかりになりにつれ心して引け田草

ほひにけり

ひくいも
梅の實の枝もたわゝになりしより秋のたのみも頼も
しき哉

或人の曰、梅田ぐみ麥と云へる謬あり、梅の多く
なりたる年は、稻よくみのるとし、茱萸ヅイのよくな
りたる年は、麥よくみのるしとするなりと云
へり、
岩野の里の質

五月雨は早もはれなん山本の岩野が原に粟まかま
じを

読人しらす

山畑の朝露しめり粟蒔きて夕立つ雲をまたぬ人なし
大濱やながすはらかの雨催に雲こそかゝれしまばら
の嶽
粟になふほしのおふこのたはみこそ年ある秋のしる
しなりける

とよもち

民草も時をたがへず降雨の恵にかゝる世こそしら
るれ

此秋は野分の風のふかじとやもす鳴聲をはや聞きつ
なり

或人の曰、もすの聲をはやく聞きつる年は、野分
せぬよし、ことはざにいひならはせり、からのう
たに、八月なくもすありといへるにや、このはつ
きは、この國の水無月に當れりとぞ、

とよもち

宵々の田のものを露をよすがにてほにあらはるゝ稻妻
の影

つねあつ

此秋は小田のかり庵にうちなびくいな葉のくもぞわ
きて色こき

木葉の里の茂

秋風に稻葉の雲も立ちそひてけふりにきほふ小山田
の里

読人しらす

いざごどもそま木きりおけくら立てむ八月の空に雨
ぞふりしく

或人の曰、はつきたれくら立つるといへること
わざあり、たれとは、雨のふりつゞきて、つち
のたれれたるをいへるなり、これ年のゆたかなる
しるしをいへり、萬のたなつ物のうるひて、よく

みのれる故なりとぞ、
穂にいづる門田の稻葉色づきて豊なる代の秋風の
こそ

岩壁の民

此秋も酒作らんとさびのほのうつむくみればうれし
かりけり

木葉の茂

我心秋の穂なみに寄せしより門田の面に立たぬ日も
なし

緒方敬房

はるくゝと田面の穂なみ打なびきとし有る色の秋風
ぞふく

とよもち

木々はまだ染まぬ山田の秋風に色こき稻の露ぞしく
るゝ

わせおくて千町八千町八つか穂のしなへゆたかにな
びく秋風

つねあつ

八束穂にさそふる稻も畔ゆづるむかしにかへる國ぞ
ゆたけき

読人しらす

ひく馬にくつこよく入れよあせ路の早田の穂なみみ
だれ合ひにけり

或人の曰、くつことは、口籠なり、ほそづなにてあ
みを結びて、馬の口にひき入るゝを云ふなり、みち
のゆきゝに稻穂なご、くはさじとするそなへなり、

緒方知古

豊なる世にすむ民のよろこびも穂にあらはるゝ穂の
千町田に

とよもち

をしねほす田面の夕日かげ暮れて時雨の空のなびく
山本

明日よりはむろの早わせかりはさんけふは山田のみ
な口落す

とよもち

淋しさよ小田のかり庵のうすけふりそれさへしめる
雨の夕は

秋寒きよなく露ももる庵に明し兼ねたる賤か小山
田

中山友連

ますらをば我秋ながら露しぐれもりやわふらん小田のかり庵

とよもち
ふせぐべき便もあらぬ秋やうき賤がわらやの露もしづくも

此秋は民の秋も數そひてたちやならべん千重の稻倉
或人の曰、いなぐらとは、いねをかりつみたるうへに、とまふきたるをいへるにやあらん、

うきわざにたへつゝ賤かもり明すかりほの庵の雨やわふらん、

つね篇

幾夜かも門田のいねのかりそめにむすぶ庵にもり明すらん

木葉の里の茂

もりわびぬ山田の庵の夜を寒みかたしく袖に霜をかさねて

或人の曰、まへのうたは、みな思ひやりてよめるに、此歌は自ら田をまもりてよみたれば、かへしうたににたる哉、

ほがけの日よめる

木葉の茂

君が代の千代の貢のはつ穂がけかけてぞ祈る神のみまへに

すなを
嬉しくも神もうくらん君が代のゆたけき民の秋の穂がけは

或人の曰、秋の田のよくみのりて、君のみつぎを滞りなく奉らん事は、ひとへに神の御めぐみなりとて、早田の初穂をいがきにかけ奉りて、よたこむ秋のみのりをものれるを、はつ穂がけとはいへるにや、

松井有樂

朝な夕な賤が手業のいとなさも秋ぞにぎほふ小山田の里

をどこの稻かりに行給ひしあした、露霜いたう深かりければ、衣を遺すとて詠る、

岩野の質が妻

晩田かる君が袂をぬらす露霜寒けくばいもか衣をぬぎてかさましを

或人の曰、是旋頭歌なり、

賤の女が拾ふ田の面の落穂さへ猶ほ餘り有る秋ぞ豊

けき

或人の曰、からのうたにも、こゝにをさめたるいなどあり、かしこにおちたる穂あり、これやまめまめの利なりといへるも同じ心ばへにてゆたかなる世のさまなるべし、

國の守をことほぎ奉れるうた
我君にけふ奉るとよみきはかむしやそへん千代に八千代に

去年よりも今年はかるき貢物餘り有る世の秋ぞ樂しき

君が爲め千代も八千代も八束穂のほにほさすてふ年をこそ祈れ

境野意明

さら／＼しひごのかみの、やしなへるおほんめぐみを、仰ぎてや、百のかばねの、たなつ物とりよそひつゝ、たなつ物よくすをつくり、すにかみて謠ひつゝ、みき奉る、

國のかみ深き恵に百かばねとこよにませとやしくこのみき

或人の曰、今の君、御政を聞召してより、年々に

みつぎ物をはぶき給ひて、民をつかひ給ふ事も、

みな時のいとまをもて、つかひ給ひしかば、國たみいたう喜びて、耕すわざに力を盡し、たなつ物よくみのりにけるを、君のみめぐみなりとて、早田の初穂もて、酒にかむし、もちひをつきて神祭の如くにぞまつりたりける、此事誰がしいだしけるともしらす、皆里々に傳へて、君の千年をぞことほぎにたる、是その時のうたなりとぞ、

大槻清之

風吹けば穂むけのなみのかたよりになびくや民の心なるらん

小島里邑

此時と民も仰ぎてまつりごと直れる君が世を祝ふらし

或人の曰、このふたうたは、里々の民の君を祝ひ奉りしよしをきゝてよめるなるべし、

いかたの質

かしこしな君が恵の時津風民の草葉の末も靡きて

君が世は賑ふ民の煙にもなびき合ひたる里のむら竹

君が世は民の窳も數そひて烟にぎはふ遠近の里

藪すなほ

立ちなびく烟もしるし豊年の民の窳の秋の夕暮

或人の曰、難波の宮のふることごとりをいであらも、
いたづらにはあらで、その世のさまをもおもひよ
そへたるうたなるべし、

山ばたに雪かもふると見るまでにしきて咲けるはそ
ばの花かも

かつくにくろみそひゆくそばの花すたくはへとぞ
あやまたれける

或人の曰、そばの花のくろみ行くは、みのるを云
へる也、みになりてくろくみゆるを、はへのさま
るというは、さとのことわざなるにや、すてには
へのさまりたれば、みをとらん事はなかるべし、
なごいへるはつねの言葉なり、

小山田のかりほの跡のひつち草年に二度みのる秋か
な

牛駒のはみも豊けき年なみやこそこの粟がら今年のひ
へがら

小夜更けてきね音すなり場擧のあすのまうけのけし

ねつくらし

あすはやはにはあげせんとわぎもこがもちひの粟を
小夜更けて搗く

にはあげの今日のもちひのひえぬまにまづは田長に
すゝめ申さん

まづしとは何思ひけんけふは只酒もちひもあきた
れる身を

或人の曰、これにはあげのうたなり、門田もしく
は園田を、つきかためて場として、そのめぐりに
稻をつみ置きて穂をこぐなり、かくてもみをくら
にをさめはて、そのにはをばらふを、にはあげ
とは云へる也、にわあけのいはひには、さけもち
ひなごまうけて、田長よりわらはにいたるまで、
もてなす事也、

思ふごとつかるゝ身をもなぐさめてうきふししらぬ
相杵のうた

はつ半を煮て親の靈にすゝめ奉りて、その餘りを
子うまごごにもとらすこと

おやの親のたねを傳へていもがこの子のこの末もむ
つび合ひにけり

秋風の袖に覺て涼しきは是やみにしむ始めなるら
ん

とよもち

夜更けてつゞりさしの鳴ければ

讀人不知

いもがかす破衣の寒き夜のつゞりさせとぞ蟲もなく
なる

夜更けぬるまできぬおりける折しも、はたなりと
いふ蟲さへに、鳴つゞりければ、

夜もすがら蟲も鳴くなり草の戸におるしづはたの聲
もかはして

或人の曰、よるさへにいねもやらで、きぬをおり
居たるは、つゞりさせといひしものゝつまにや有
りけん、實に貧しきものゝしわざこそいとなけれ、
からのうたにも、衣だになくば、何をもちかはは
ををへんとぞつゞりたりける、

津田恒篤

秋風の身に寒き夜は宿ごとの思ひくゝにころもうつ
聲
吹くまゝに夜寒もまさる秋風を恨みながらや衣打覽

軒つゞき同じ里わの秋風も身にしむかたや衣打覽
此頃は夜寒催す小山田のいねすや賤が衣うつらん
更くるまで月にねぬ夜も知られけり霜を重ねて衣
打聲

豊持

影寒み八月長月長き夜にうちもたゆまぬ賤が衣
打たゆむひまこそなけれあま衣たへぬ夜寒のほごも
知られて

木葉の茂

秋の田の刈穂の跡のつかの間も民の仕業のいとまな
の身や

或人の曰、秋のいねをかり取りし跡に、猶ほいな
莖のつかばかりのこりたるをば、かりほの跡のつ
かのまとはよみたるにや、きのふけふかりにし田
をもかつくすきかへして、麥なたねの種まくな
ご、いそがはしきを云へるなるべし、

讀人しらす

秋の田の刈穂の跡に麥植ゑて實らん春を待つぞ久

しき
 麥たねを蒔きにし日より小山田に鳥追ふ民の立たぬ日はなし
 蒔麥の種をまかはむ群鳥門田をおへば園田にぞ付く己が住む國ならなくに旅鳥よその麥種なに盗むらん
 或人の曰、麥といへるものは、冬より夏にいたりて、みのれるものなれば、そのほごのかてにとばしからん事を思ひて、まつぞ久しきとはよめるなり、鳥追ふ民といへるは、麥たねをまきそむるころ、多くの鳥のむれ来て、そのたねをついばむをうれひて、田ごと畑ごとにかいしなご立てぬれど、それにもおそれずなれくるを、おどろかさんとて、田の畔に立居て、さうらなごうちならず事、かり追に同じかるべし、旅がらすと云へる事は、この國のからすにもあらで、よその國よりもむれ來れる事有るをいふなり、このからすは、八百萬のかすもしらず、うちむれたれば、人にもおそれずして、田畑のたねをも、時の間にはみつくすものなれば、分けてにくむべきものなり、さればそのからすをかへさむとて、わらはべのことわざにも、

跡のからすの巢のやけたり、はや行きて、水なりとも打かけてよとぞいへる、飛行くほごに、すこしおくれたるをも、はや追立の言葉となん聞へし、はじめてみつぎ奉る日、おほみき給れるを喜びて貢物をさまる國の豊みきはくむともつきじ萬代までも
 秋のすゑ狩にいけるみちにて、山の奥より國の都に、みつぎをはこべるものに逢ひたり、さらぬだにかゝる山路は、越えうかるべきほどなるを、身にはおもにを負ひながら、いさゝかくるしげも見侍らぬは、君のみつぎとおもへるゆゑならんかしとて、そのものにかはりて、思ふらん心をのべ侍りぬ、
 さく 間
 君か爲め運ぶ貢は岩根ふみ越ゆる山路も難からなくに
 山鹿の奥より高瀬の御くらに、みつぎものをはこべる舟の、時雨に逢ひたるを見て、
 伊形の質
 松井有樂

賤の男が運ぶ貢のいとなさに豊かなる代の秋ぞしらるゝ
 讀入しらす
 暇なく運ぶや民の貢物治れる世ぞ賑ひにける
 家のわらはごもに、なはなへらん事をすゝめて、明けたらちかりに行かんいざや子ら此夜の程にねれやそのなは
 或人の曰、此歌は高本の順が、民に代りてよめるとなん、悲爾于茅、夜爾索綯と云へるからの歌の心を、やはらげたるなるべし、
 豊 持
 山深く通ひなれてもうれわさの重きたきやみにはくるしき、
 妻木こる賤が袖こそ寒からめ朝霜白き山かけの道
 妻木こる道さへ絶えて此頃は煙も立たぬ雪のやま住
 木葉のしげる
 眞柴かる賤が袂や寒からし山路しぐるゝ風のはげしき
 日暮るれば谷より谷に呼びかはし友いさなひて歸る柴人

或人の曰 家のをこの柴かりに行きける折ふしも、雨風いたう寒かりければ、思ひやりてよめるとかや、自ら民のみとして、しづとよみしは、我家のをのこをさしたる言なるべし、谷より谷によびかはしとよめるは、いとむつまじきさま、目に見わたる心地なんしける、友ごちのまことあるみちの、柴かりにおもひたるは、國のをしへのひろまりにけるしならんかし、
 安 智
 深山柴雪ふらぬ間にこりつみて冬ごもりする遠の里人
 妻木こる道さへ今朝は埋れて雪こそ積れ深山邊の里みぞれふる猿かけ山の寒き日にぬれてあこなが薪取るなり
 或人の曰、あごなどは、女のわらはの名なるべし思ふ中たゆといふなりたきさしのほたをなこひそおきはこふとも
 或人の曰、これ里のことわざなり、わが家に火のけぬるとき、人にははん事は、かたみにさるべき事ながら、火をこふにことよせて、たきさしのほた

をも取りなば、終には人にうとまれぬべきを、い
ましめたる言葉なるべし、凡民のうつくしみをう
しなへるは、いさゝかなるよりおこれる事なれば
からのうたにも、かれいひをもてあやまてるよし
いへるにや、これ女のうたなるべし、

猿がけ翁 齊藤

さつて、も雪のふる日はやすむべし寒からぬ間に薪
とりおけ

或人の曰、やゝ冬ふかくなりゆく事を戒めて、か
くしめしたるになん、さつて、と云へるも、いへ
のをのこをさしたるなるべし、

つねあつ

庵近きそばのかけ道埋れて妻木にかよふ雪の山人

とよもち

住むや誰れ朝けの煙一すぢに雪にうもれぬ山かけ
の庵

猿がけの質

あらちをのかるやむじなの装ころしも寒き老人の
ため

或人の曰、質がさるかけの山にすめる頃、山人のむ

じなをかるを見てよめるにや、冬のいとまにまか
せて、けものをかりて、そのしゝむらをやしなひ
とし、その皮を衣につくりて、冬をふせぐたより
とするになん、からのうたにも、一日こゝにむ
じなかるといへり、一日とは、十餘り一月の日
をいへるなり、さればこの國の霜月なり、年いた
う寒くなりゆくまゝに、老をやしなふそなへをし
たるなるべし、

さく問

霜深き八重山越えていしゝも老を養ふたらちねの
ため

或人の曰、此歌も前に同じ、是はものゝふの歌な
るを、此所にのせたるは、事のつひでによれる事
なるべし、

貧しき民をにきはし給はんとて、御藏を開かせ給
ひける、御うつくしみをことほき奉りて、

大君の惠の露し深ければ民の草葉もいや茂りゆく

津田つね篤

萬代も盛ゆる國のときつ風恵に靡く四方の民草

君の御うつくしみをかうふりて、民のこゝろも、

ますますにすなほならん事をことほきて、

つねあつ

今よりは聖のみ代に習へとや争ふ民の畔ゆつらん
まめのためしうた

讀人しらす

鬼やらふ豆を火に焼き空とへばてれるくもれるしる
き月々

或人の曰、年の暮に鬼やらひ豆を、月の數火にや
きて、よくやけたるを早とし、やけぬをあめふる
として、明年のいましめをなすとかや、

右民草ふりと云ふ一冊は、安永天明の頃にやあり
けん、伊形の庄助が書集めたりしを、大村源内勝
長、手つから寫し持てるを、文化の中頃にや、借
りうけ讀みたりしに、心とまりしふしゝも多か
りければ、寫し取りて我物にせばやと、思ひつゝ、
打過ぎたり、今の大村勝長より、彼一冊取返さん
と、云ひこしけるに臨んで、俄に寫し取るべき暇
なく、さりとてたゞに返さんは、本意なければ、
予か召仕ののこごもに逃へて、拙き筆もて書寫

さしめぬれば、其の誤も少からず、然れども其の
大概は推して知るべきなり、猶ほ復た大村が善本
をかりて、寫取るべき事にこそ、
因に云、此民草ふりは、士農工商の部類を分かち
て、夫々の歌共を集めんとて、先此一冊を伊形が
作り出たしけるを、大村いちちやく寫取りぬとて、
ほこり顔にて、予に觀せられしなり、此一冊の次
には、士ふりとかものゝふふりと云へるを、伊
形作らんとせしを聞きて、大村一首を詠じて、集
中に加へん事を乞ふ、其の歌に云、
静なる世にも忘れず武士の磨く矢先はゆきのみ
にして

伊形此歌を見て、ゆきのみにしてとは、みがく矢
さきの白きこと、雪の如しと云へるにやと尋ねけ
れば、歌の表はさもあらん、其の實は靴の身にし
てと詠せる也と答へければ、伊形ますゝ感吟し
て、必此一首は、集中に加ふべきよしちかひたり
しも、いつしかなき跡の、昔語りとは成行きしな
りと、大村が予にかたりしも、やがて五十年にもな
りぬべし、嘉永六年癸丑八月盡日、七十三佐吉、

甲寅の春三月二日、再此一冊を読み、漫に朱字を加へて、魯魚の誤を糺すといへども、又只暗中摸索するのみなり、其眞面目は、大村が藏本に照し見るべし、

伊形庄助、名は質、字は大素、玉名郡木葉の産なり、其居所の上なる山を雨山と云ふ、其山の巖壁を猿壁と云ふ、因て靈雨山人と號す、又猿壁の民質、又素とも書かれたり、後山本郡の岩野にも暫く居住せり、因て又岩野の民某などとも書かれたり、根元民籍より出でたる人なる故、民とは書かれたるなり、先生、學業人物の事は、世の知れる所なり

佐吉 識

民草婦利附録

八代の郡

うやなぎの里にすめる人、御はらからおはしましけり、よく御親につかへ給うければ、いみじき御聞え、世にかくれなくなむおはしたりけり、その御父わかより、すまひを好み給ひければ、御はらから耕の暇には、すまひと給ひてぞ、御父の御心をなぐさめ給ひにけるとなむ、

伊形の質

老の身も若かへるてふすまひ草まけぬ心の種やごらん

本傳目錄植柳惣左衛門

ある人の曰、この事、中村正尊があらはせる書に、くはしく見わたり、この人いやしき民なるを、うた人のうやうやしく書きたるは、まぎらはしげに聞侍れど、いま人の世にしていはい、いやしき民にこそあらめ、久方の天津御くらゐをいはい、實にうやまひたふとむべきことにあらざらめや、

民草婦利終

これぞうた人の心ならんかし、この後もみなぞらへ知るべし、

高本順

いさやこら水まかせてよ小山田の苗代櫻咲そめに覺
或人曰、宮地の里に一樹の櫻あり、里人此花の咲初むるを見て、年のはやきおそきをしる、是をなはしろ時のしるしとするなるべし、

伊形の質

蛙のなくを聞きて
蛙なく聲しきるなり小山田のなはしろ櫻いまか散るらん

高本順

卯月田の歌
神まつる比にもなりぬ八代の卯月のみたは今や植うらん

ある人の曰、此里の民、年のはやきには、卯月に田をうゑ、おそきには、五月にうゑるを、卯月田、五月田とぞいへりける、

伊形の質

遅くうゑ早くうゑるも天地の時を松江の里の小山田
或人の曰、天の時をまち、つちのよろしきにしたかへるは古の教へなるべし、

讀人知らず

さみだれに袖やくちなむつきはぎのみのしろ衣はす隙ぞなき

イニ

ツキハギノミノシロゴロモホスマナミノサミダレニクチャシヌラム

或人の曰、つきはぎは、此里にてそむる布の名なり、よく雨露のうるほひをのぞくものなれば、みのしろ衣につくるべし、

質

ひなこにゆきて、湯あみてんとて、
蘆田鶴のすだつひなこの内にこそ千代をのふてふ薬湯はあれ

質

木綿葉川たふる淵のそこ清み藻に伏すいの數も見えけり

或人の曰、かくれてふせりといへど、すなはちあきらけしと、からのうたに聞えたるは、時の民、世の政に苦しみて、身をおくに所せきさまを云へるにこそ、明かに淵のうろくすを、うかひ見た

らんは、いかにぞや、水清ければ、すめるいを少しと云へる言も傳るになむ、
 何れの年にか有りけん、卯月五月の雨久うふりついで、萩原の堤くつれにければ、松江の城、岡の里、皆淵もわかす成りにけり、家を流し身を流したる人、いくらばかりとも知らず、古に斯るためしはいとまれなる年になん、
 熊川の水かさまされる五月雨に松江の城は沖の中島熊川や木綿葉の堤水こねて浪のそなる岡への松たらちねの行衛をとへばしら浪の八百の汐合に立ちさはぐみゆ
 浪のうづ磯邊の蘆のあしも手も岩にくだけてふせる
 こは誰
 ゆく川の此水底は父の里母の住家とさくはまことかわだつみのもくづとならば諸共に我れも水泡とけなまし物を
 或人の曰、父母を流し妻子を失ひ、あるははらから友とちなど、一方ならずかなしめる人の心なるべし、
 君聞召して深くなげかせ給うける餘りに、誰れか

この水を治めてむやと宜ひければ、稻津某承りて、しぬるを吊ひ、生けるをあはれみつゝ、堤をつきて、田畑のあれたるをも、うねを正して、よくとへのへければ、民皆喜びて、神の如く佛のやうにうやまひけり、則うたへるうたを、萩原ともつきの歌といふ、そのうたにいへらく、
もといへるは此國の民の言葉にして、つゝ
いふも、さしこめられていへるになむ、
 秋の田の稻津の神のなかりせばしぬる命を誰れかたすけん
 萩原の塘つく少女いとまなみ花すり衣袖まくりしてたをやめの我身にしあれどいぐひ打石をも引かむせなに寄りては
 あなたふと君は神かも佛かもしぬる命を救ひ給へば萩原や妻こひかねて鳴鹿の聲きくらんか堤つくいも哀なり妻戀ひかねて鳴鹿も人目堤を中に隔てて赤のたすきあるの前垂誰れとだに知られぬ人を懸けて戀ひつゝ、
 わきもこはけふも堤をつきはぎの衣たちぬふひまやなからん
 白糸の夜こそ絹もたちぬはめ堤つく日はいくかもあ

らじを
 しぬ命いくとし云へば佛とも神ともなごか仰がざらめや
 けふいくかくしけの小櫛とりもみず身を八代の堤つくいも
 歌の聲聞くはなつかし唐衣たちぬふ手さへ忘れてぞさく
 我せがからき思を慰めて甘きもちひを贈りてしなわきもこが贈りし餅の甘ければ辛きしわざも忘れにけり
 はね馬にねたき男を打のせて心ちよげにもおとししてしかな
 しにもいきも君が心に任すれば神とや云はむ佛とやいはむ
 今よりは紙このてゝら身につけじ川しわたれば人わらへなり
 稻津某の下司に、いとほらあしきをこなん有りける、ともすれば腹だちて、杖をふり立てつゝ、怒りけるにおそれて、うたを作れり、それが名をばけにけちとなん呼びければ、うたの頭に置きて、

けはしくも晝飯くふ間もおそしとや杖ふり立てて怒る君かも
 になひかね引きかねにける石よりも君が心の角ぞはげしき
 けづるともあくるともなき黒髪のとけぬ恨はいふかひもなし
 ちゝ母の撫てし我身ぞあらちをのあらきたぶさの杖なふれそね
 かのけにけち、民をいたはる心なしとて、稻津の神のいましめ給ひしかば、畏まり居たりけるに、民また彼が名を呼びかへて、そこの石ぶしとぞ云ひたりける、
 流れよる水のみくすにかくろひてかしらなあけそこの石ぶし
 民のにくみしこと、かくなんありける、
 いなつの神といふ事をかしらに置きて、
 いたつらにしぬる命をながらへてうれしき世にも逢ひにけるかな
 なみの打磯邊の堤今よりは助かぬ國の固めにぞつくつゝみてふ堤はあれど嬉しさを袖につゝみはこれの

秋はら
のの末に山のきはみにすむ民も皆おり立ちてつくつ
つみかな
かみつ瀬の清き流れをくむからに心にこれる民だに
もなし

貢物またといふる秋もあらじ耕す民の力つくして
斯くて民の力を盡しけるを、稲津の神いたくあは
れみて、公に申してみくらの錢いたして、民に與へ
られしかば、皆喜びて、此ともは海山の石を引きも
てつきたれど、公の金のともなりといへりければ、
海の石山の土もてつくめれどつくはこかねの堤なり
けり

ともつき終りて松をうゑられける時のうた、
山となる磯の堤に松うゑて千年の末も浪はこさじな

蘆北郡

あらたに那のつかさにうつれる人に、おくりける
うた二首
霜枯れて春待ちわびし蘆北のあしの下根や下にもゆ
らん

読人しらす

或人の曰、郡の民、さきの司の、からき政に苦し
みて、後の司の、深き恵を希ひたらんさまを、お
しはかりてよめるにや、實によりみかへりたらんこ
ゝちこそ、すべかめれ、
蘆北の悪しきを善きにつせがひうつせば移る道し
有る世に

此郡は、國の都をさる事いと遠くして、里の習も
おのづからあしきたの名にたがはぬ民こそ、多か
りけめ、まへのうたにほめたるを、この歌にはい
ましめたるなり、道しあるよは、今の君の御うつ
くしみを、むなしからしむる事なかれど、思ふな
るべし、

駒かひの姫

駒飼の姫は、御かぞいろはやく身まかり給ひての
ち、ひとりのおほちによくつかへて、御心をつく
し給ひしかば、御名世にかくれなくぞ、聞え給ひ
にける、かのおほち馬を好みて、めて給ひけるに、
そのこまはしり 馬のしにたるを
はしるさいふ にければ、おほち
たう惜みて、つねに忘れ給はず、此事のみぞ物思
とは成りける、もろこしの馬を失ひし翁は、うし

なへるをもなげかす、又得たるをも喜ばざりしか
ど、このおほちは、かの翁には心さまおどり給ひ
にけるにや、失ひしのちは、その事をのみぞなけ
きにければ、ひめの御心にも、やすからぬ事にお
ぼして、いかにもしてよき馬を得ばやとのみ、思
しつゞけ給ひしかども、今よりまづしくおはしけ
れば、人の爲めにやとほれて、あるは衣をたちぬ
ひ、またいひしらすいやしきわざにもたへ忍びて、
つかはれ給ひしかば、人もいたうあはれがりて、
錢など與へにけるを、年月貯へて、つひによき馬
を買得て、おほちに奉り給ひければ、それよりお
ほちの御心も、なぐさみ給ひて、老の齢を樂し
み給ひけりとなむ、
少女子がかひのたなれのかげみればうせし翁のこま
はものかは

或人の曰、駒かひ姫の御事は、中村正尊が著はせ
るふみに委しく載せたり、たゞ駒をかひ給ふ事の
みにあらず、その餘おしはかるべし、此歌に、か
ひの手馴の鹿毛とあれば、甲斐の國よりいでたる
を、手飼になづけたるかげの馬とさきこわたれど、

民草婦利附録

かひの國は、良馬を出たす國なれば、そのまこと
は、甲斐のこまにか有りけん、さつま馬にか有り
けん、只良きこま買得たるを、國の名にそへ、又
草飼水かひたるにもそへていへるにや、言葉はそ
の宜しきにしたがふものゆゑまことをみたるには
いたらざるべし、その毛色も、又かげにや有りけ
ん、かす毛にや有りけん、影形のかげにそへてい
へるなるべし、正尊が書をよみたらん人、又此う
たをみてうたがふ事有るべからず、
おもかげは雲井の月にしのばれて共にみしよの人ぞ
戀しき
女島松
年ふるやめじまの松のふかみどりしづ枝は浦の浪に
ひたして
かひの國は、良馬を出たす國なれば、そのまこと
は、甲斐のこまにか有りけん、さつま馬にか有り
けん、只良きこま買得たるを、國の名にそへ、又
草飼水かひたるにもそへていへるにや、言葉はそ
の宜しきにしたがふものゆゑまことをみたるには
いたらざるべし、その毛色も、又かげにや有りけ
ん、かす毛にや有りけん、影形のかげにそへてい
へるなるべし、正尊が書をよみたらん人、又此う
たをみてうたがふ事有るべからず、
おもかげは雲井の月にしのばれて共にみしよの人ぞ
戀しき
女島松
年ふるやめじまの松のふかみどりしづ枝は浦の浪に
ひたして
かひの國は、良馬を出たす國なれば、そのまこと
は、甲斐のこまにか有りけん、さつま馬にか有り
けん、只良きこま買得たるを、國の名にそへ、又
草飼水かひたるにもそへていへるにや、言葉はそ
の宜しきにしたがふものゆゑまことをみたるには
いたらざるべし、その毛色も、又かげにや有りけ
ん、かす毛にや有りけん、影形のかげにそへてい
へるなるべし、正尊が書をよみたらん人、又此う
たをみてうたがふ事有るべからず、
おもかげは雲井の月にしのばれて共にみしよの人ぞ
戀しき
女島松
年ふるやめじまの松のふかみどりしづ枝は浦の浪に
ひたして

讀人 可考

宇野東風校
古城貞吉覆校

民草婦利附録 終

ぞおもふ

顯戀

大伴の津守が古につげねども人言しげくなりける
かも

旅宿鶏

曉のかけろ鳴なりたびごろもむれ見ばをしきいざ出
てたむむ

詠雁

秋來ぬと鳴きて渡らふ初聲は世の長人にとふふしも
なし

晴夜月

現身の世のさかしらそ浮雲にたぐへてこよの月は見
てしか

風動野花

夏草のねこの山風吹落ちて浪野のはらの尾花玉まく

行人隔霧

あひよばふ聲は隔てぬ旅人の分入る山にかをる夕
きり

互別戀

妹か門かへりみすれば赤駒のあかくをうしといた

せり見ゆ

野草露茲

いてましをしたまちはほに秋の奴の千草の露ぞ玉敷
みてる

寄鳥戀

打羽ふり八尾越乞山ごりのはつをのからみもとなか
けずば

寄斧戀

仙人になれて朽ちにしをの柄に我名はなりぬ現身
にして

寄弓戀

いかでかく手弱き兒らが葛城のそつ彦真弓こころつ
よかる

浦松風

旅人の袖吹きかへす秋風に奴島がさきのなみさはぐ
なり

禁中月

眞空ゆく月の光も大殿の玉のよそひにてりそはり
けり

甚戀

すま人のやくとふ鹽をからしとは我こふらくをしら
ぬ言鴨

名所山

繁本ゆふ葛城山にのぼりたち一言ぬしのごとたば
らむ

山家鳥

松へごくしこの村鳥金戸への山田のをしねぬすみ
どりはむ

月前松風

みそらには月照りたらひ軒端にはきくのさやけき松
風の音

寄鳥戀

をつにしあはすてふれば盗人の至りたるあるもた
のまわにけり

鳴

人とはぬ山田の田るにいへをれば物こひしきの聲の
みぞきく

いひはしむ

赤駒を打ちてさをひきひきもみでこころを人に聞え
つるかも

秋夕雲

かぎりひの夕だつくもの薄色にほふやみねの黄柴
なるらん

片戀

荒磯浪卷きもてよする片よりの玉藻や戀のたぐひ成
るらん

貴賤憐月

貴人のあはれとおもふ月影のしげこきをやにさすか
こほしさ

朝木枯

夜もすがら時雨し空は跡もなく今朝は寒けき木枯の
かせ

妻向に行んする人に贈る

まつぶさによそひたうさぬ春山の霞男と人も見る
べく

冬夜

酒のまむ友だちもがもしくくに雪の降る夜は淋し
きものを

落葉驚夢

うつより夢路にかよふ問使は風におとなふ落葉な

りけり

初黄葉

れとつ日のほごしおぼゆ露霜のおきてなげきし森
かあらぬか

寄獸戀

真山木の伏木になはる荒熊の人になしらね隠妻ゆめ
寄軍戀

軍士たけび雄たけび男さび身をたなしらぬこひもす
るかな

あひおもふ

汝おきて妻はなしとふ神言をさらに互に言出つる
かも

鹿

さをしかのかれす鳴かね秋萩はどこはの花にありこ
せぬかも

野秋風

荒野なる尾花まさ越秋風にしつまつそやもそよとな
りつゝ

久戀

おもひやる戀のたづきに植るし木は木高くしげく成

にけるかも

秋水浮舟

秋の海にはも静けし舟かけて夜たゝあそばむ月を
見がてら

松を植えて

瑞枝さしいやさかわこそ根こしもて植うる心は八千
代ぞ思ふ

思ふぞちかたらふ
神代にし出でかへらまくほしといへば各々はうべと
答へつ

山里に推拾處

み山べのさとの童にまじらひて心なぐさにしひり
ひてむ

四海

わみしらが買たへると舟こがむ四方の海べに浪立つ
なゆめ

野分

梅が枝の地につくまで吹きすすぶしなと長への御い
きかしこし

忍戀

うつそみの人なるいれや隠沼の下樋の水に成りはて
ぬべき

獨酌一盃酒

大伴の旅人の君はまさねごも月待つほどのともはあ
りけり

海外山

大海の深き心にあらそひて雲のそぎへに山のそゝ
れる

綾といふ事を

高機にかくとはすれど春鳥の聲のあやこそおられざ
りけれ

しらす

富士の雪ちるかき見て青雲の中より落つる真白ふ
のたか

八代にさゝれける時春臣に贈れる

月花のなからむさとを中々にまきて住ままくおもほ
ゆるかも

わが影を友と見るがね八代の鏡が池はあせすもあら
ぬか

釧つく手野の神杉一本はかれすてのこれ手野の神杉

磯田の克直か大江門に行ときうまのはなむけに

よめる調井短歌

浪のよる磯田のあそを君が行くあづまの國は雲はな
れ遠くしあればもろこしの虎ちふ神に飛鳥のつはさ
生ふし乗駒になすともいかでたゝゆきてたゝ立歸り
朝夕にあひかたらはむそこゆゑにかねてぞおもふ這
蕨のわかれむのちは花見ても意さぶしけむ月みても
下こほしけむしかはあれど神にしあらねば玉鉦の道
の長手をくりたゝねたゝねいよせむたさきさへ知ら
ずて無詮丈夫の何かおもはむ海路こそ千重浪へなれ
真山こそ五百重かさなれ春されば花なげなくに秋の
夜は月なげなくに月花を君と見るがね月花をあひも
ふ友と君も見まさね

反歌

つゝみなく歸らむ君をしらとりのとば山松のまつが
うれたさ

櫻の歌

久方のあめの木だねも國はきて咲くはさくらの花に
ぞありける

みるからにまうらたのしも花ぐはし櫻は花の神にか
あるらん
おしてるや難波のさきのならび濱ならぶ色なき山櫻
はな
櫻花かざしにさせる風流士の丹摺の袖もいろけたえ
けり
歌さはに歌ひ出つるも櫻とふくすしき神のしはざな
るらし
長き日を花の木のみゆ大白ユラツクのかくやくばかりあそび
くらしつ
青山に日はかくるとも櫻花つき夜とふたつ今しまし
みむ
霞立これの山間た入立てはにほひよろしき山ざくら
ばな
去年の春おひ見しまゝにけふ逢へる友さしおほゆ山
櫻花
みよしぬのよしぬのさくらをつつにはいまだみなく
に夢に見わけり
櫻花ちるをしみずばなか／＼に歸らむとこそ雁はい
ぬらめ

琴ひけばうらたのしとは春花のさき出でぬほどのこ
とにぞ有べき
あはれとふ言をおきてはさくら花先いひいでむこと
のしらなく
あしなへとめしひにあへる道にまれ花見に行くはい
とはざりけり
櫻にはいかで袖をもかけぬべきつとにはしらん丹つ
じの花
櫻さくかたのゝ芽生にまどゐして人皆われも歌をこ
そうたへ
山守はしめてか見らむ櫻花ねこしにこして植ウヅとはな
しに
櫻花咲きたるころは山守がしけこさおやもすみうか
らめや
我がしめし櫻の枝にすゞかけて木傳ひちらすとりを
しもらむ
ねもごろに櫻は見なむ一とせに二たびにはふ花なら
なくに
足引の山の櫻はよし綱を心にはへてあをよしけむか
島山の花を見がてら沖津ざりかもちふふねをいさこ

ぎ出でむ
島山の花はさきたりたくひれの鶯とかもめもむれあ
るがごと
しづきてか玉とかならん浪のよる磯山ざくら花ちり
まがふ
いたづらの都はしらす島山のさくらははいまだ花さか
りなる
なら人ぞさかしらはするしかはあれど花はめでつゝ
歌は歌ひき
言をこそ山櫻とへうち日さす都もまねく花にこも
らく
人ならぬちまたもあらぬ都べは花にしあらぬくま
へもなし
浅茅生のしぬのかりくひかりくひにあし六音ふますな花
見る人を
ねもごろにわがひりふがねさくら花ちるともくたす
玉と成りこそ
櫻花ちりてくちにし浅茅原なごくたしめししこのし
こぐさ
春花のわすらぬしめぬわすれぐさ摘みつゝもとなし

このしこ草
花はしも散過きにしをわすらぬ櫻もやがてしこの
しこぐさ
こむとしの春咲出む花をこそわすれぐさとはいふへ
かりけれ
朝戸出に花をしみたるけふにしもいつか増りて朝日
よからん
春の日はこゝら長げど櫻花めでつゝふればみしかく
おもほゆ
春山はこのもかのもに花咲きていつへをめでむよし
のしらなく
さぬばりのきぬにつくなすめにつくは春の山べの山
櫻はな
いほしめてをらまくもをし山管のすがの所に櫻花
さく
櫻咲端山おく山くりさゝね花にこもりてあらくしよ
しも
うるはしき御國の色を言擧げせずしめさんごこそ花
はさくらめ
さかしらをいかにいとへや櫻花あたし國にはにはは

ざららん
 櫻花にはふ比のみさかしらの多かるよともおもほへぬかも
 時しくに櫻の花も咲きたらば人は老いすて世をやわたらん
 馬のおおとととし聞ゆおもふちぬべの花見に行かむとすらん
 花見すとすさぶ心にくらべれば駒のあがきもおそくざりける
 櫻花わがのるこまのあを駒のにはふばかりに花のちりしく
 霞たちかけおぼしき春のよのつくよの櫻見れとあらぬかも
 月影に花をしみれば短木綿みじかきこよのふくらくをしも
 あき人はなてかひんなきひんがしの市のさやぎに花はちりつゝ
 小初瀬はみたに八十ありおきつものなはりてさける花を尋ねむ
 吾妹子が袖ふる山のさくら花こそさらにてこそ常わす

らぬね
 香久山の花のにはひはこそさらにあひ争はんうねび耳なし
 櫻がりゆくさのみちに處女あへり花のさかりはいまにか有けん
 春雨は今もふらなんわがやどのふゝめる花の咲出てぬまに
 雨のどの夜たゝ聞ゆる春はしも夢にも花のちらまくぞおもふ
 春雨の雲より上に咲きたらば花に心をわかくだかめや
 櫻花千五百のはるをくりたゝねめづともあかぬ色にこそあれ
 霞うつあらゝ松原まつばらにみれどもあかぬ山櫻ばな
 村して難波すが笠いほちもが雨打ちそゝぐ花にをさせむ
 にはつ鳥かけのたれをのたれしかも櫻をめぬ人あらめやも
 何のいとまありてかもとな櫻のさきのさかりに異四言

ひはせむ
四言
 しらぬひつくしのわたを村山にかつきたるなす花さかりかも
 春山にふすしゝにもか峯に尾にいゆきかへらひ花みてましを
 はるさめし花のちるべく打ふればきどもこよひも安寝しもをす
 人のいのちかぎりしあれば春花のさけるあひだはつきて將宴多言
 百年のいのちいきすば一年をうつらぬ花のかけにあそばむ
 まかゝやく玉とくがねとほりせずば花をし見つゝみさをしをさむ
 白玉をいほつとごへてみたりともこれのさくらにあしにかめもやも
 うぐひすはもるにかあらむ四言ひるはも日のことくくくらに來鳴
 櫻には努心をよ梅のはなこづたひちらし鳴きしうぐひす
 昨日みし花の面影夢にさへうたゝ見わつゝ長寝しつ

かも
 まつほごのこゝろ長きにくらぶればうつろひ安き山櫻ばな
 乗るこまのあがくそゝぎもにはふまで花のながるゝ春の山川
 おとりあがる駒はおしてもとゝめてむ散行花ぞすづもすくなき
 馬にかくふもたしもがもうつり行花のこすゑに懸てとゝめん
 ちる花はまでとふことをなきゝぞと一言ぬしの神やのらしゝ
 友だちのみむとちぎりし明日をだにすぎなはしゑや花は散るらん
 ほつねより落ちふらはせる下枝にし關だにするむ山ざくら花
 ちりまよひ過ぎにし花のおのかげのかはひらとちふ虫ぞとふなる
 あらたへの夢山吹の花はあれとちりぬともとは櫻はもはず
 ほとゝさす何事あれや春花のさきのさかりにおくれ

てくらむ
 ほとぎすしは〜きぬおそざくら尋て見むのた
 のみたわたり
 雀公鳥夜たゝ来鳴くは春花におくれし事を悔ゆるに
 かあらむ
 櫻花ちりて流れし山川にときのすぐれは鶴川たつ
 なり
 年魚ならば鶴やつかつげてせめもせむ山川の瀬にち
 りし花はも
 月の夜に見つる櫻のたもかげをともすごもしに思ひ
 いてたり
 咲初てちり過ぐるまでわれはもよ花の奴と成りてし
 有りけり
 花と見ておもひやらなん夏山のは山の雲の雲ごのみ
 見ゆ
 風ませに夕だつ雨も櫻花にほふ春へはよきてこそ
 ふれ
 遠近の高ねをつたふ夕立の雲にそのころ花のおも
 かげ
 春へは花をりかざしあそびつるぬへの秋はさしたな

づかしも
 花をのみめつるものとしおもひつる櫻のうら葉もみ
 たびにけり
 黄葉とみゆきと二つむかふとも櫻はなほやけたわさ
 らなむ
 ちる花を雪としみべくちる花のおもかげなして雪の
 ふりしく
 年はつと人こそさやげふるゆきの散にし花をわすれ
 てもへや
 櫻木をかたにゑるごふたくみらを打ころすべきくぶ
 つもがも
 こもりぬのしたにまちつゝひとささをわたるは春の
 花にぞ有けり
 水無月の望の日河上健雄か家に小集ひて樹蔭志
 暑と云題を設けてよめる詩一首井短哥
 いつはあれど不二の高ねのみ雪さへ消ゆとふけふは
 てれ日のあつき極みぞ暑き日のいたきかぎりぞしか
 はあれどいより立ちたるいつかしがこぬれをしげみ
 しみさふる木立をふかみ渡る日のかげさへみわす梢
 より吹おろす風はさや〜に音を立てつゝ蜻蛉羽の

袂にかよひ萩が花いまだもさかす初雁も鳴渡らねば
 まだきにも秋かも立つと曇り夜のおもひまごひて夏
 草のしなふるしらに堅庭の割くらくしらに日ぐらし
 の鳴暮すなべ卅日ぐらしつ
 反 哥
 いくばくのかあをきぬがささせりともこの木蔭に
 豈しかめやも
 夷船の流來し時の歌
 四言 六言
 不知火つくしの海は時しく浪はごよみ打羽より風こ
 そさわげ其浪のしきよらむた其風のあらぶるなへわ
 みしおね流來つゝもすめ國をいたくかしこみ浦人に
 目をだにいまだ合はせねば千尋の海に細じもの隠り
 入ぬれたのみつる舟は奪はえよるべなみむさねもど
 らえしゝじものいはひをろがみはるとりのさひづら
 ひけりぬば玉のくろき夷いぬじものおそき夷しが國
 に幸く歸らばさらにもうたゝまる來て手童およびさ
 らむて笑はゆなゆめ
 九月の二は筑前國大岡部春平明日其國に歸ると
 てとひ來つるに馬のはなむけによみておくりけ
 るうた井反歌

玉だれの岡部のあそはとなみはるさかしらごを
 られふりあなかしまして雙の耳にもふれず皇國の大
 御手ふりをおむかしむやまと心し入紐のおやしかり
 けりそこゆるにあひみるからにはらからのうるはし
 みつゝ永き夜のふくらくしらに月影のかたふくしら
 にかたからへとかたりもあかねばけならべてあひ見ま
 ほしとこもりぬのしたにはもへど鴉なくふりにしさ
 どの名にたかきいきの松原まつ人のあらむもしらす
 ひもとかぬ妹もぞあるらんしかれこそ常世の空ゆき
 その夜に鳴きわたりつる初雁の春をしまてごしひて
 とやめね
 反 哥
 春まちてごよをこふる雁がねにたぐはぬ君ぞすべ
 もすべなき
 長月の二十九日鈴屋の大人のみたま祭りに作る
 あふみのおき川まわくと、大宮におとなふ鈴、大殿に
 ゆらぎしすゝ、五十鈴ありとほきはきけご、其鈴ありと
 はいへど、懸まくもあやにかしこし、神風の伊勢の
 國なる、鈴の屋の鈴の音をこそ、まさやかにさかま
 くほり、鈴はや其鈴はや、いづくにかいかくりたる、

旅時雨

からさきの松をしぐれの笠にきてひるのにしきの家
づとにしつ

名取松

吹風も玉のごとのおとやせむよのためしを曳馬
野の松

萬葉集

ならの世のふりにし文を我はもよともとのみこそ朝
ゆふに見れ

契戀

あかすのみおもふ物から秋のよの望の月よのあかき
ちかごと

佐敷に在りけるとき小野篁のおもひきやひなの
わかれにおとろへて海士の繩たきいさりせむと

はとよまれし歌につきてよめる歌
世をうみを渡る船もが、現世を過ぎむ駒もが、船な
らば浪立な勢、駒ならばあはやくすぎね、物ごがめ
せずとふ神も、おほかたにゆるしてとほせ、天雲の
たちかきなれる、くらき夜はさらにもいはず、さな
きだにつまづき安き、習ひともかねてわしらず、富

士のねを雪もて作る、心ちしておそくも物は、學ひ

しを我よも今は、黒髪にしら髪まじり、白髪山の
山おろし、寒き日をいとひもあへず、蘆北の野坂の
浦の、浦千鳥ちどりを友と、鳥つとり鷗のすみ渡る、
水島の荒磯かくれに、舟よせて釣や鱈の、廣はたの
はた思ひ出て、むかしよぬばゆ、

反歌

海士の子のさやくさやきにうき里も事やは足らぬ月
を見る目に

熊本なる友の歌合の判をしてかへすとき其のお
くに

離けこの宇土の松山うとからぬ友の圓居の空をだに
見む

長調短調日詠々草

加れる卯月の十日まり九日おのれ將養へる我子共に
罪ありて甚も畏き
仰ごを蒙りき此折しも大西某が元より人さばに來
入居其は過にし年おのれが娘をしも彼家にやりてよ

り道は遠し是彼と押移ひて其うから族擧りては未來
ざりしを此春はしも花盛ならん比必問來なましと加
ねていひおこせたりしかご其頃はしもおのれが方に
蘆分小舟障る事ありて心ならずも程を延しぬれば
ふりはへて思ひ立たる事にしあればいかでなか空に
して止べきとて大西がうからやから將心あひの友を
も一人二人誘ひて一昨日とふ日眞震が元に来りたり
家人ら互に始めて相見たるもあり又は年久しく相見
ざりしもあればよろこびあへる事はいふばかり無し
されば櫻はちり藤山振も過ぬれど白島の清き荒磯に
ふねよせて時じくの雪の巖をも見てまし神さび渡る
水島の渚に打群て櫻貝をも拾ひては現し花にも勝り
たる家づとならむけふかゆかむ 明日かよけむなに
ごいひあへる程に右の

仰ごを蒙りしかばひたかしこみに畏むばかりなり
き此時しもあるじのおのれも客も譬は雷神なにご
の目ちかく天降たらんが如く畏みをれば詔よまむも
今の世の風俗にてはなかくにおほけなきさまにや
人々おもひなむと言に出てはえ歌はす心中によめる
もろ人も共に畏む畏みは世の畏みのおやにぞある

へき

又家づとの櫻貝をも拾はずなれる心を

家づとにいでと眞袖はかけまくもあな折悪敷花の

如世て籠りをるに其の明の日はも仕を返し奉との願
ごと申とて雪の伏木に隠るといふ荒熊の籠りをれる
群名さへやがて熊谷の某其身は如世こもり居れば、
心ならずも問す畏き

仰ご有しと風に聞いていとおぼつかなしもしは夢か
とばかり驚きつ夢ならば疾覺よかしなご言葉いとま
めやかにふみしていひおこせたるに答ふ

おほかたは夜おとづる、郭公わが住里は盡ぞ鳴て
ふ 蘆北は夜盡わかす猿公の鳴渡
ふる里にしあれば如斯歌へり

又或日我籠居を問來る人の中に或のいへらく此度お
のれが罪を得たる事は跡もなき空言をこの女の假
初に言出たるを世に倭たる人ら二人三人謀計て讒言
聞上たるより如此成れる事は一郷の人擧て知れる
なれば物憂き宇土の名におへるたはれ鳥廻にあさり
する海士ならなく浪のぬれ衣着たらむは無用なる
業ならずやなどて其倭人らを言顯はして身の塵は拂

いへるが如く懸まくもあやに恐き
 現し御神の御政事に同じかへらざる事汗の如じかに
 かくに言を入るべきにあらすしかるを讒言聞え上た
 る人を押顯すなにごいふ事は其可にもあらすして御
 政事を論ふなり其は吾敷島の道にあらずおのれ心の
 愚きは生れ得たるなればせむすべなし赤心報國とい
 ふをもて根とし磨かまくおもへるはやまこ心也其は
 眞木の柱の太くをしく飛驒人の打墨繩の直くすが
 くしからむとこそおもへなごて前妻と後妻とが互
 に恨み妬ふか如き煩らはしき業には渡るべきといへ
 ば其人諾なへるにや物いはす成りぬ故こゝに誦ひけ
 らく
 さうら形錦裏は返し見し糸の亂れも物うかるべき
 其明日雨ふりしきりていと徒然なるまゝにまれ人
 をなぐさむべきたづきもなく白き黒き石を圍み或は
 古き書籍なにご取出て讀まれ人は其を聞ながら酒の
 みつされど酔るかいは
 秋たゞば道遠く共蘆北の女島に來ませ我も酔がね
 けふはかくて日暮ぬ
 右りの誦によみつる女島はしも紫の名高の浦にあら

ねども一木の松もとも名にたかく雲の上人の御歌さ
 へ碑に残れり
 年経るや女島の松の深みどり下枝は浦の波にひた
 して
 實に此御歌の如く也むかし眞震らも蘆北に遊びし時
 此松がねにて
 火の國は。いづくはあれど。蘆北のすがの處し。
 さはにあれば。そこし見か欲り。沖津藻葉。採と
 は無しに。へつ藻葉。求としもなく。おもふごち。
 をふねつらなへ。なみ騒く。野坂漕廻。味澤ふ。女
 島の磯に。來て見れば。咲めくれる。白波の。下
 潜松の。深縁。おもひ深めて。異津浦。異津島根
 は。よしるやし。瞥見すとも。海神の。宮に一夜
 は。舍り簡。千年の下枝。敷妙の。枕にまきて。
 寐むとこそおもへ。
 浪の共女島の松により立たば千年の枝に玉藻懸れり
 如此誦ひし其木は其後枯たりしかば名にしおふ松の
 跡絶えなむことをなげきて誰にか有けむ植繼たりし
 其木今はかき抱くばかりに成りて元つ松の神さびた

りしには未およばねごとなれたる木立又類ひ無しと
 おとに聞つか故れこゝに心うごきて
 おもひきや女島の松を朝夕に水馴磯馴む友と見む
 とは
 又此程降續たる雨に求摩川の水増りて野上の原より
 麥島の古城の跡まで漲れりと人々いひあへり
 さばかりの洪水は見馴たる此處の里人は物としもお
 もはねご客人はめつちか也家づとに能き語り種なめ
 りいざ見にゆかむとて出立をいましてめがてら
 味村のさわたる人の亂あひに河の堤の端踏な努
 又來る日も雨やますいともつれくなる打しも大矢
 野菜が元よりしばしも問すおぼつかなしなにご
 つばらかにふみ書て笹の小笹の露に添へておくる二
 首
 浮雲の直わづらふもいとほしな拂ふ風の吹ざらめ
 やは
 此處にして盡ぬ別れは惜けれど同じ雲の月をこ
 そ見め
 和詞二首
 昨日今日時知がほの五月雨はしなごの風になど晴

めやも
 日は暮つ行へは遠し家路戀老いて勞れて駒も蹉跎
 其明日は雨やみぬ大西が置此程は日毎に雨降りて折
 々は風さへ添りぬればはろくの道の長て老たる人
 もあれば歸るべきたづきもなく心ならずも眞震が家
 に明し暮したりつるをけふしも全く晴れたりとも見
 えねご又大雨なにごの打零べくもあらねば海路はに
 はも静なるべし眞震が去年の冬作らし置きたる脚速
 の小舟しあれば是に乗りて松橋の浦まで渡り夫より
 彼方は歩より行くべしいで舟出せむしがよけむとて
 俄に出立行きぬかれこゝに残りゐてよめる二首
 たらちねの母が。養ふこに。あらねども。眉こも
 り如。こもりゐて。名残も盡す。朝鳥の。只立人
 を。あさもよし。紀の關守が。たつか弓。引きも止
 めず。かな戸べに。送りもあへず。行水の。過ご
 しやり筒。櫂の實の。一人二人の。家人と。打向
 ゐて。とふ言も無し。
 反詞
 妻兒共も言こそ問はね玉禱かけてやおもふ人の船
 路を

其明日も又雨降る人々集ひて一日石を圍み燈火ともすを限りて歸り去ぬ雨は猶しめやかに打降り二首盡の間ぞ。人も開來し。青山に。日がくりぬれば。静なる。斬の玉水。だましくも。我真木の戸に。おとなふは。何ぞと聞は。宵さらす。愛しき水鶏の。たぐくなりけり。

反歌

霄毎の水鶏と共に我門を叩きて問はむ風流士欲得其明日も雨降り昨日の石の敵無くは無とて人々又集ふ

白黒の色審明き争ひは世に正しかる戯ぞ是

此日も石の争ひにて暮れぬ

昨日眞震が家の奴ら旋置きつることを破りて出歩行つるが市中にて松井勝敬が家の奴と争ひ出始の程は互に鬻り合しに後にはいたく怒りたぐむきを揚げて椰合是も彼も鬻放ち衣は海松の如くわくけ泥もて造れる人の如くに成れるを市人ら群り集ひて見る者あり止る者ありていとかまびすしかりしと今朝なむ告る人有ける其やたこらを呼出て其事を尋ね問へば正しく告げたる人の言の如し何事無時すらかゝるをこ

の業は慎ふべきことなるに増て今は重き慎の中なれば家のやたごらには殊更に旋て無用にはな出歩行ぞ言問も高くなせぞと堅く戒め置きつるを背きたれば其科輕からず眞震が家にはえ置難しと云聞えつゝ常の時ならましかば行なむ駒にはあらねど心には火さへ燃えて鞭うちつべくおもひしかども其席にて身のいとまをやりて只やらひしかばはし鷹の拳の下の温鳥の放えたらむが如くいづちともなく出去りぬ如く此て未程もあらねば松井が方より右り奴を暫しが程貸してよ尋ぬべき事有りといひおこせたりしかど其はきのふ我家にて旋を破れるまゝに如此々々々からはかひて今は我家のものにはあらずとかへり言しつかくやらひはやらへるものから彼がたづきなからむ事は憐びおもへるまゝに
放ちやる心さへいざ白雲のよるべもなくて立や感はむ
折しも今一人の奴は大西が族を送らしめて松橋の浦までをふねの楫とらしそれより陸に上りては大西が奴の重荷をえたへすとわぶるを助けむとて其を分ち袋負ひて従ひ行しかば未かへらず日にけに情ありて

問人の目言しかねばつれづれをこそなぐさむれ食物精る者さへ無くていとわびしはといへる童に水汲しつゝ戯によめる
火とも成水とも成ていそしめや折焚のみの柴とおもはて

もはて

其明日曇は霧ねど朝の間雨はやみたり植置きし百合の花ひもとく長き短き二首

翡翠の。青葉隠りの。我宿に。友の目を欲。床の上に。黙止をり難み。庭の面を。たち廻れば。刈菰の。亂あひたる。蓬生に。にほひ出たる。花や何。おぼつかなしと。淺茅原。委曲に見れば。其名さへ草ふけ百合の。ゆりもあはぬ。友の目戀し。くさのゆかりに

反詞

蓬生に交りてにほふ百合見ればゆりあはぬなし許多戀しも

阜月の朔日菫ゆふをよめる二首

去年の春。花散果し。つれづれに。世の憂。こども。數そはる。思ひやらむと。松江の海。清き島廼に。船よせて。辛き戀すら。忘るとふ。貝はあれども。

目輝く。玉はあれども。巒有る。岩間に生ふる。濱水綿を。根こじにこじて。我宿の。庭の砌に。植ゑつれば。榮茂らひ。花開きて。其が名をおへる。百重なす。思ひやるべき。なぐさには。貝に玉にも。勝りて阿里計利。

反詞

三熊野の遠き濱へゆ家づとに持ちてや來しと人の問ま

或日のつれづれにこしかたを思へば源益方今の眞震らが身と同じく芦北のさきもりに移さわし時求摩川のへにて饒別に詞ひし詞
唐に。有りしむかしの。大夫が。身も棚しらぬ。別路に。男さびすと。冠を。逆立髪。黒髪。突きしと聞る。故事を。思ひ出箇。かにかくに。過こしかたも。ゆく末も。懸けてぞおもふ。清水汲。井口のおそ。君も吾も。互に今は。白髪。山の山人。水島の。島の島守。長へに。如此てあらむと。馬車。手携りて。月花も。共にめでしを。芦北の醜の御楯の。崎守と。よさしの隨意に。感から。野坂の浦に。あびさする。泉郎の綱手の。

弓也箭を疾おくりて勝れて能き造りさまの弓也され
どもともすればまよき離れ安し故古き戀の歌に
いかにせむまよきの弓のともすれば引きはなちて
は逢はぬ心を

ともすればまよきとはまよきとすればまよきといふに古へ射る時用ひたりし
柄を指さしふこころなかりていへり

此引きはなつは弓を引きたもちて矢を放つ事にては
無く弓を引くに付けて弓損なまよきの離る事也まよ
とはつぐ事にて繼母又まよのつぎ橋なにごいふにて
知るべし扱此繼木弓は離るゝわづらひあればいつは
あれども今此五月の頃なごは昔しの丸木弓古へは丸
し弓とのみひつるを丸木弓世に多く成りて丸木
弓といふこころ前にあつちへる道の論ひに似たり又よろしき
とも弓に削るべき木得安からず眞震むかし久米清澤
が丸木弓を借り置きて庭の面の放鳥を窺ふ狐をねら
ひし事有りき其弓は元橋橋翁の物なりし也橋橋翁亦の
古き武夫也其弓を清澤に返し、時計よみておくりつ
るを我友福田某名に高き繪かきなるか其歌書たるか
たわらに清澤と眞震とが像をさへ畫加へたるを清澤
一年江門に持きたりしを江戸人の見て畫のふるめ
かしくよろしきに調かきたる書さまの朽損ねたらむ

み靈添りて。獵矢さし。射るまでも無く。疑ひし。
犬も狐も。逸失せて。跡なくなれば。今はとて。君
にぞ返す。橋橋の。くしき翁の。くしき眞弓。
或夜靜なる海の面にをぶねを浮てさやけき月を見る
と夢て夢中によめる一首

春は過。秋ははまだし。霧も無く。霞もこめぬ。
夏の夜の。にはも静けき。海の面に。朝無小ぶね。
漕出て。ますみの鏡。曇なき。空に心を。沖の石
の。人に知らぬ。樂びも。半ならねば。松江の
海士。吾に告らく。水底に。飢に飢たる。鰐もを
り。心黒き。鱈もあり。月に向へば。汝がぬし
は。こころ空也。沖津楫。眞根引折。へつ櫂。眞
櫂搔はね。いざいなせ。努さしいへば。嘲笑。答
へにけらく。秋かけて。心足らひに。眞さやけぬ。
月は見なむ。うゑたらむ。千鰐五百鰐。後より。
庶莫窺へ。わが知らめやも。

五月の十日の夜いたく更けたるに眞震が門をおそぶ
りおとなふもの有誰ぞと問へば松江の驛にわたてる
使の指木より公事の御ふみ持て來つと答ふ其はお
のれ過にし月の十日まり九日より畏み籠り居つれど

釘なにどの如くふつゝかにて讀がたきも却に面白し
とて壁なふごにも懸けて見つべく装はし置きたるを
見たる事ありきしかるに此調おのれが筆の跡ながら
酔のすさびにふみでを走らしたるなればいか成鳥の
あどつも見わき難く讀なづみたるを其席にありあふ
人々笑殺へるまで書たる文字は讀ねども調は空に
おもひ出て聊耻債ひぬ如此からくして思ひ出たる
なれば今もなほわすれぬをこゝに書つけて人の笑に
備ふ

我宿の。葎かきつ。の。放鳥。盗み喰むと。晝はも。
犬匍匐ひ。夜はも。狐潜めり。眞震らが。朝夕と
れる。身ならし。の。弓はあれども。晝の戸に。矢
さゝむ時し。雨零ば。雨に損ね。夜の門に。い立
む折し。露もおかば。繼木放れて。須磨の螢の。燒
とふ鹽の。から鹽の。辛き戀する。わび人の。した
憂からむと。みづくし。八米のあそが。橋橋の。
翁ゆ得たる。短ゆふ。短きはこ。たつか弓。射
よげにしあれば。稻ふね。否と言せご。かにかく
に。弓のゆかりに。押借りて。手に取ならし。ぬは玉
の。夜晝わかす。ますらをの。守る心に。此弓の。

おのれがかしこみはゆるし給ひぬされど重ねて仰ご
とあらむまでは吾君の御目のあたりには恐みてわ出
でぬさまに意を得たてまつれとの仰ことなりしかば
少しばかりは心おちるてうれしきことかきり無し庭
雀啼もあかるべくおぼれて

とこよもの長鳴鳥もまださなけ廿日一日の金戸ひ
らかむ
如此はうたひつれど我子いまだ御ゆるし無れば門半
を開きてなほ畏みをれり
右の調ごもは日の廿日隠りをりつる程によめるなれ
ば記の名をしも牡丹とおふせぬ
植つれど食しき宿の廿日草匂ひし無しと人な答を
嘉永といふ年の二とせ五月十餘一日 橋 花押

酔のすさびの獨言

彌生の廿日餘り一日といふ日より斗石の御關屋守り
に當りて守り居り其夜皆人を寢よごの鐘打なす頃し
も斗石の海士三人り廣庭にうなねつきてけふしも思
ひも懸す沖のとなかにて大きな魚を拾ひ得たり其

得つるさまは其ひりひ得つる魚にもいや増りたる大魚なにぞにもや有らむわきはらのあたりをたかにおふせたる馬をも攀通すべく喰破りたるが八重の沙路に浮び漂ひ流行を拾ひ得てふりはへし業の鯛さへ松魚さへえ釣らず己がむれのつりぶね三艘して綱ひきかけや、／＼にひこづらひ來つと申すかれ、／＼に先下司して見しむるに折しも曇る夜のことにはあり河風は烈し燭火も吹きけち明松の火も吹靡かして何ともさだかには見えわかぬと來し船の丈と等しき大魚の片への身は魚か獸かくひつくしたる也とまをすおのれまづこことわりて曰かく大なる魚は鯨を置きて何かあらんしかるに鯨は公の定ありて火の道のくち五島平戸の浦の外にては猥りに捕るべきものにあらずされど鯨鯨なりとも異とつ大魚のくひさしならば右の掟の外なるべし汝かあま懈返ひりひ得たるなれば心まかせに取るべしされど御關屋の前には置難し海神の宮ゐるの山の裾入江のあたりに繫き置きてよといへば庭雀躍騰りてよるこぼひ楫のともさやに曳

きもてゆきぬつとめて明の朝其所に行きて見れば折しも潮は引きたり浪の眞砂の上に伏せするて有り躬の大きは立懸りたる人の胸のあたりに等し躬の長は五尋ばかりあり實にも左の腋骨の露はる、斗し、むらを喰盡して濱も狭に腸出たり此大魚をしも見知りる者ありて是はながすといへる鯢の子なるが生れて二年ばかりになれるなるべししか喰殺したるはたかまつといふ魚のし業なるべしに大なる鯨にても此高松附ては喰殺さすてはえ置かぬと也鯢牙は虎の齒の如にて口甚と廣しとも猛き魚なれと鯨にくらぶればさのみ大きな物にはあらずなにご今見るが如く詳らかに語る程に近き村々里々より此浦に名さへえ知らぬ巨魚あがりたるよし聞傳へて老も若きも男もをみなも蟻といへる虫の如く群がり來てくへしりへに立廻ほりつ、見るほどに商人さへ來りて即て此鯨を買取り切り屠れりかゝる折しも吾住む指木の友ごち西の大人を始とし關の名に懸のよろしき不破某西岡某宮島某林某なにぞ其外相識る人々打連く大魚見にとて來れるに此魚かく成りて幾らの日

を歴ぬらむ潮に浸りて有りたればこそ卿もどろろがね刀を入れて新に切破りたる折のわるくさきはえきくべからずおのも、面を背け鼻に袖を覆ひそ古を疾く退退きて御關屋に立寄皆曰く胸のこ、ちいどわらし酒も賀惠みてよと乞ふ己れも人々と同しこちしすれば關はしく有合ふ酒を出し酌かはずま、にほご、呑盡さむすれば人々も買ひ吾も負けじと買ふ買のすさびにむなしきみかむなしきほたりもなく湛へ足らはして末さかりにもえうたけねばした面白くて

甕の腹みてた、へてば真木柱太き心ぞしたにそ、
 大れる
 いど、心強くて今は大伴の旅人のまへつきみもや天翔來座む大海みの底なるものいふ獸も波の穂にや浮ひ出む吾も人もうらたぬしされど御關屋の裏は宴けすべき所にあらねば山の上遠視の廣庭こ、よけむどすがむしろしきもとほして圓居す此處より遠く南の方を見れば言轉ぐ唐しの八重の沙路目もおよばず

又華人の薩摩の山々長崎の牧も見えたり西の方は天くさの種島あるは棚底風口なにごも村々に見ゆ渡り北はむかし見馴し飽田高ねこそむら山むら雲に隔りて見ゆわかね宇土の横山うごからぬくはし女の黛の色を移せるに似たりそれより此方は瑞枝さす松江の海の島々遙けく見ゆ近きあたりには白髪白龍の沙瀬の岩むらしらたつの浪間を分けて天に登らんとする勢あり打渡す向ひの方は名にしおふ女島神の齋へる松か枝に懸る白浪をおのが羽色にまがへつ、飛渡る村鳥さへ所から又たぐひなき鯨の浦形山からぶねの巖咲栗の三島なにどいつへに向ひても面白からぬ浦島山々も無しかくて吾も酔ひ人々ももうらけて一日おもふことなく徒然を忘れて遊び暮しぬされば腐りたる鯨の故によりてはからずも我れ人いたく酔へるにつけて唐のむかし物語をなもおもひ出てたるそくの孔明玄徳を輔けて大きなるいさを立彼國世々に押渡すともならび無きばかり勝れて好きいくさぎみなりしが惜むにかひなくやみこやしてほと、みまがらむとする時までもなほまめたちてあかき心を盡し計

を死し置きつゝ遂にかむざりぬさて其のむざりし事をばあたの方には隠しおきつゝ其謀計を行ひしかば其仇といふも名たゝるいくさぎみなりしかどもうま^{所計}くはからえて軍敗れ逃奔りたりと濃霧に見えたり其敗れたる軍君の名は仲達となもいへる故其事を彼國の諺にかむざれる孔明生る仲達を走らしむとなもいへる又からうたに甚く酒を呑ことを長き鯨のものな^川がはを吸ふが如しとも譬へたりかにかくに鯨は酒を^飲ほりするわかともがらにおのつから相似たる處あるにやしかるにけふ既に腐れたる鯨の生とし生たるま^{大令}すら雄たちをいたくゑはしめたるはやがて身まがれる孔明生る仲達を走らしめしに同じとおもへること人を人は歸り果たる跡の御關屋の窓のもとに櫂の實の獨居り聲打揚げて笑つゝよめる

吾はいざ謀計とも白浪の返すくもうら面白し

嘉永六年彌生の廿二日御關守楠まゆり

寄鏡述懷歌三首並短歌四首

楠公五百年祭

東の市の巷に、あきしこり人こそさやげ、西の市に人こそごよめ、市人等ごよみにごよみ、まを鏡もとな買はずば、まさやけき人のかゝみは、楠の木のかすしきあそを、萬世の鏡をを見ね、諸人をゆめ、

又

懸卷もあやに畏き天照日の大神の、大御影うつし給はし、神風の伊勢の國なる大宮に鎮りいまし、さくすくの五十鈴の川の、萬世にいや澄わたり、久かたの天地の共、玉垣の内つ御國も、言囀ぐ四方の夷も隔なくまねくてらせる、御鏡は神にしませば、岩くやすいとも恐こみ、玉だすき掛てもいはず、みなそこふおみのかゝみと、見し人のかたらひぬれば、聞人のいひひ繼々、新玉の年の五百年、世の人の語らひわたる、楠のいさをくすしき、古ことの遠き昔を、淺茅はらつばらにもへば、なげきこそさきたゞけれ、平の高時といひし、しれ人は吾妻にありて、ちはやぶる荒ぶる神に、こひつかひすさべる業し、降雪のつもれるまゝに、御國內の人等ことごとく打麻をうみにうみしなへ、皇の神の命し、畏くも小松か末の、うれたましなげかし給ひ、そをしも討ちたま

はんの、御心しまし〜つるを、世の禍はすべなき物か、さをしかの入野の芒、音たてゝ吹しもなき、秋の風わたらひそめて、いとはやもほに顯るれ、世の人等青蠅なしつゝ、夕星のかゆきかく行、ひむがしに西にうつろひ、かけどもにそどもにはしり、さわたれは大禍つ日の、御心をたゝなごめかね、大宮を立て玉ひ、空みつ大和の國の、天をぐる笠置が奥の、足曳の岩根こゝしき、荒山の八十隈がくり、入たゝしたごらしませば、打きらし降村雨に、山の名の笠も取あへぬ、こゝちしていでもしぬれば、まへつぎみ百官も、水島の立の騷ぎに、黄葉の散まどひつゝ、行宮におほましますと、まゐりの人もかよはず、御軍をめし給へども百たらす八十人どだに、いくさ人あともひたらむ、國人はいまだまぬらす、御心をいたみうれたみ、かにかくにおもほしつかれ、みねませる御夢のうちに、よいたゝす楠の大木を、靈しとおもほし玉ひ、つとめてまかし玉ふと、御使を河内の國の、おきつ藻のなはりの山の、奥ふかくつかはし玉ひ、木津川の片淵かけて、引綱のめよしよし、なまよみの甲斐の荒駒、にはにた

て打ちてさを擲、心引心もいまだ、引みねば大御心に、大船のたのみおもほし、鳥が鳴あづまの軍、追歸へし國ことむけん、ことはかりとほし玉へば、御答をまをし玉はく、高光日の吾御子が、みくさもて天に射向ふ、やたこらを討たし給は、後つひに亡さまくは、疑ひも何か有べき、然れども年月経つゝ、戦は軍のならひ、あるは勝あるはまけなむ、かしこけごわれなげなく、鹿子自物只獨だに正成し生てし有りど、ほのかにもさかし玉は、我大君物なおほしそと、聞わあけ國に歸らひ、ごもし火の赤き心を、赤坂の城にこもりをり、一度は時いまだしと、奥山にうまくかくろひ、ひとたびは時きにけりと、國もせに軍をいだし、ますらをのいつのをたけび、たけはひ戦ふさまは、天雲をほるにふみあたし、あまちゆく龍のまころ、鳴神のはためくなして、前つべに有としもへは、後りつべにい行た、かひ、吹風の跡なきが如、篝火のもゆる影のみ、山はしも生駒の高峰、海はしも難波のうらの、浦回おちす天つ星かも、けだしくは蘆屋の里に、所がらみだれてすだく、笠ともあやまつばかり、遠近にたき

楠伊豆足か家の集

こらしぬれ、むかつぬの打向ひたる、軍きみ男さび
すと、しがきをる鏡もぬがず、しがはける太刀もど
かすて、ことあげせず仇にあひては、若芦の取ひし
がまく、心には火さへもむつ、み熊野の浦まに匂
ふ、濱木綿のもへにもへど、月の中の桂ならずは、
山鳥のをろの鏡に、向ひたる心地のみして、焼太刀
のたかみもとらず、取弓に箭をだにさす、いたづ
らに引返しぬれ、沖べよりみちくる沙の、しが跡に
ゆきかはらして、八ちまたに蔭もしみ、に、水枝さ
し實さへ花副、其葉さへ霜にしほまぬ、橘の氏人集
へ、高城とふたかきはあれど、高峰さふ高嶺のなか
に、とりよろふちはやの山に、千早振神にはあらず
て、皇の神のみいづを、かがやかしきたなきやたこ、
ことくしに討平げむ、ことはかりうまく定めて、こ
もらへば吾妻にあらく、しき人ら聞ば驚き、あげつ
らひかたらひけらく、唐の虎ちふ神は、うえてあら
む程こそあらめ、をし物ををしにをしては、いやた
けく成もてゆきて、打渡す見越の崎の、磐ぐねの悔
ともしるし、あらしとて起す軍は、はゆまちにうみ
をなしつ、い續きてさきついくさし、逢坂の關路

を過ぎて、日をふればしりつ軍は、あしかひの足か
ら山の、深山ちの坂のかなたに、たもとほり宿りて
有けり、かくばかり多き軍を、大海のしきよる浪の、
千五百重にちはやの山を、打かくみ其いくさども、
こもりぬの下におもはく、いさつけきは是の高城に、
いくばくもあらぬ軍を、たすけこむ人さへなきを、
おのが身のほごをもしらに、あはれく籠りて有り
けり、此仇をこの軍もて、磯浪のよせ戦はひ、あら
鶯の雀追ふなす、鳥の子をくふつ、い特、打つより
も猶や早けむ、ねがはくは今日一日だに、ますらを
の心振起し、楠等逃げずもあらぬか、大いなるいさ
を顯はし、劍横刀名をし立てむと、あざわらひまづ
ほころへる、軍ごも野にも山にも、みちくして時に
もあらぬ、秋の花しが色々に、張りたてる旗の靡き
は、遠かたの嶺にかゝれる、白雲を綾に彩り、くは
し鋒輝くさまは、村山の雪の光に、てりかはす月と
もみわつ、矢さけびのごよむとよみは、千よろづの
雷なして、天地に轟きわたり、痛矢串飛かふさまは、
浪速江の沙風はやみ、芦が花盛にちると、みるまで
にしげく亂れ、高きよりはなてる大木、しくく

にまろばす石は、いかり猪の落るが如く、よみにま
すやくさの神の、おきしきていさくが如く、おひた
てる並木押なみ、たくなつ、岩根ひかかし、荒海の
岸打波の、磯にふりさ霧にたちて、散々に楯さへく
だけ、人の上に人うちたふれ、馬の上にうまかき伏
せて、草むさんかばねは積みて、谷彌谷平らに成り
ぬ、かくてこそ楠の朝臣を、健しどもさとり有りこ
も、國々の人らことく、見驚き聞もおごろけ、然
れども身も捌しらぬ、東人命もしるや、朝霜のけな
ばけなすと、日やひはかくてたかひ、夜はよは唯
責めしかご、かにかくに争ひかねて、いくさごもつ
ごひに集ひ、相さにもはかりにはかり、沖津波へな
み類寄り、またの浦の定めにけらく、今日よりは軍
はせせて、いさつけき高城を仇も、三粟の中にかく
みる、稻庭川のさつをか、もるといへる網代の魚の、
のがるべきよさぢをおかず、ひた守りにまもらひを
らば、人勞れ食物盡きて、せむすべのたさきもしら
に、打いてむ時を待ちて、むだ手に只とりてむと、
月彌月海士の小舟の、水馴さをさしてなすべき、業
もなくまられるまんに、思ひやるたづきもがもと、

世の中の千々の遊びの、数々の何は有れども、歌う
たひ石をしかくみ、うかれ女にほたりとらしめ、青
丹よしならの小咋か、遠々し越にまかりて、さふる
子をさ問ひしが如、草枕旅のやごりに、若草の妻ま
きわたり、ぬば玉のよるひるといはず、酒みつぎう
たげ戯れ、笛の音も琴のひきまも、松風の音にたぐ
ひて、聞わつ、真木立山に、にぎはへる都なしけり、
かくてこそ高城の内は、火もて焼水もて漬し、ひた
ふるに責討つよりも、中々にとぐらの鳥の、羽たふ
きもせぬ心ちして、なぐさ山慰むかたも、なかりしが
いで、童の、戯れのたばかりまけて、諸人の眠りさ
まさむ、いさやとて芥をたかね、小山田のそほとに
つたる、つはもの、形をし作り、朝まだき眞霧が中
に、立置きて山彦ごよめ、さけばひ遠箭放てば、園
みたるをそ人が伴、いとはやく謀りしが如、楠等飢
につかれて、打出ついでとてんと、岸陰に所せき
まで、着粧たる鏡の袖を、つらねつ、駒はせすれ、
高きより射出づる矢は、風雅のみ雪と亂れ、たぶて
さへ霞とふりて、千曳磐に打ちくだかね、夏野行男
鹿の角の、つかの間に數をもしらず、ほろぼさぬ残

る軍は、須磨人の焼くてふ沙の、からくしてにげかへりけり、かくしもたばかりつる、其後はいよ、かしこみ、葛城の高間の山に、ある雲のよそにのみこそ、氣ならべて守りをりしが、いたづらにまもりも逃げで、飛驒人をこゝたくつぎへ、斧の音つゝのひいきし、霞ふりかしましきまで、音たて、目をふるまに、風の音の遠すめろきの、神世にし高田の宮に、宮人の仕へまつると、朝夕に有りかよひけむ、古しへのみけの小橋の、いひもえず名づけもしらぬ、かけはしを作りいでつゝ、大綱を千づな五百づな、うちはへて引起すさまは、大空に立はばかれる、虹とのみ思ひまごへば、見るがうちに倒れかゝりて、草か山たゞ越路なす、谷の上に棚橋渡し、いちはやき人らこゝく、飛鳥のい行争ひ、此山の四方をかくみて、七里のうちとに有りし、軍ごもこゝに集ひて、天雲の五百重累り、ほごに渡りさしぬれ、神無月空にしらえぬ、時雨のあめ降ともふまで、しくくに油をそぎ、あめの火を放てるまゝに、風さへ吹きまきぬれば、まさかりに燃えもてゆけど、人さには競ひかゝりて、歸るべきよきぢをなみ、焼

落る小橋と共に、彌千人等けりふりかくりの、谷かげの灰となりけり、かゝれども更に新たに、くはれる軍しあれば、そをしも思ひたのみて、此山を堀くつがへし、はて、だに仇はとらむと、鋤鍬をいほち取持、わだちつゝ口なる人は、軍してしりなる人ら、盡となく夜ともいはず、ひとむきにすきはわしかば、尾一つをば平らになしぬ、しかはあれど岩根こころしき、高ねをば神ならなく、限り有る人の力に、いかでもほりつくすべき、かにかくに思ひめぐらし、はからへば計るまに、防ぐべくたばかりまけて、戦へばたゝかふごとに、吾妻人たゝかひまけて、武藏人雄々しいへど、さがみ人健しいへど、軍せむ心はなくて、相共に語らひけらく、ちゝのみの父は老いたり、はゝそはの母はやまひて、たかんに打ちやせしを、玉章の使だにこず、今はしもいかにかすらむ、みどり子をわぎもか獨、朝夕になぐさめかねて、我をのみ戀ひつゝあるらむ、こなみがうみしをの子、うはなりがうめるをどめも、我目ほりわびなきすらん、行きてみむいどしいへば、おのおのもしたに諾なひ、鎧をばこのねにぬぎうて、弓矢

をば岩根も打置、有馬笠を裝どり着て、人しれず山ごの野行、一日には千人かへらひ、一夜には八千人にけて、人もなき宿となれば、旗の上に雀友よび、鳥とぶおほそを鳥を、打群てあさはしける、かくしも成ぬるほどに、いでましの御舟しはて、かり宮をつくらし玉ひ、ましませしはゞきの國に、劍太刀名和のともがら、播磨ゆは赤松かむれ、吾妻にはにひた足利の、人々ら軍を起し、内日刺都の内も、もろくの國へもなべて、刈藪の亂れにみだれ、戦のあるが中にも、高時がありかをしめて、住わたる相摸の國に、たつのまのあがくあがきに、鞭を打はせにはせつつ、押よせて新田のあそが、やからうからしが命さへ、いのちともおもはぬばかり、村鳥のすゝみ争へば、秋田刈鎌くら人も、やみじしのかへり見もせず、戦へばいづこをさして、まさりおどりいふべくもあらぬ、時にしも新田の君は、すめろきの神の帝に、いそしみて仕へまつれる、真心のものはなれかも、和田つ海の神のちはひに、常はしも味田の千尋の、底ふかみ船こぎ渡る、稲村の崎の潮を、はろくの沖に逃げ、見も馴れぬ干潟となれば、庭

雀踊りあがりて、よろこぼひ皇御軍は、駒なへて濱の眞砂を、あわ雪のくゑはらゝかし、唯わたり亂れ入ぬれ、鎌倉の軍人等は、折こそあれたのみおもへる、いくさ君数を盡して、千萬の軍と共に、河内なる千早の山に、行向ひ責にせむれど、楠のくすしき軍、魂を千引の石に、たぐへつゝ人の數こそ、高麗つるき若木の花の、および折りがぞふるばかり、少なければ心健くて、國々の皇みくさの、鑑とも親ともなりて、日をふればひをふるまゝに、かつらぎの襲彦真弓、つよかりと聞驚ける、やたごども心たゆみて、春の日の光に當る、うすらひの跡なく成れば、八咫知し吾大王の、行宮を定め玉ひし、伯耆なる船の上より、ふなあがりかへりいできました、大御供奉待つて、咲花のゑまひさかばわ、さゝらがた錦きそひて、御船路は浦の八十九うら、浦まおちす楫の音高く、大路ゆは道のもゝくま、行駒の鈴のこひいき、紅の塵ふみたてゝ、いく日とふ天の足日に、九重の都にいらし、宮柱底つ岩根に、ふとしりて大内山の、雲の上に匂ひあまれる、葉廣のゆづまつばき、てる花のひたりてりあまし、しか葉なすひろりあまして、

うら安の名におふ國と、やしま國しろしめしを、
禍つ日の神の荒びは、すべもなくうれたき物か、み
なものおなし氏なる、足利と新田のあそは、大君
の醜の御楯と、には鳥の相ならはして、大みかど守
らすべきを、中々に互にうらみ、争ひてはては
しも、おほげなく御仇とされる、足利のしれたる人
を、一たびは遠き國へ、たはやすく追伏せつるを、
しなが鳥いきもつきあへぬ、其程にみあたことごと、
馬の蹄いつくすきはみ、船のへのいはてむかきり、
いしきく取つくしては、梓弓末の世かけて、大御
國安うらましき、そこをしも思ひはかりて、楠のあ
そのみやたび、荒小田を返すくも、いきどほり足
もあかすに、いざなはしす、ましかども、其時の軍
の君に、まじつらく義貞朝臣は、戯業の討勝つま
に、仇をしもあたともはず、あぐらぬてのらしけ
らくは、おとつ日もきのふもけふも、馳はせてあな
やむ駒に、鞍着せてもとな追はずば、浪のよる磯の
さきぐ、真鳴つく島の崎おちす、大王のしきます
國は、おしなべて遠のみかどの、さきもり等守らひ
をれば、足利が勢れ軍を、荒山ののぬれにすめる、む

ささびの鳥待がごと、まちごりて奉らむと、大かた
に思ひ頼みて、稲舟のいなみ給へば、従へる軍人さ
へ、うへなひて馬とりつなき、ま草かひあるは水か
ひ、おひそ矢も太刀をもときて、朝鳥の只思ひ立、追
しかむ人しなければ、古の志斐のおよなが、しひ語
りしひ難みこそ、いそ浪のうつて、おさしが、いく
ばくの年をもへねば、足利のきたなき人ら、しらの
火つくしの海ゆ、朝びらき千船は千舟、つらなべて
真楫しぬき、和田のはら渡らふさきは、真帆はれ
は千島もみわす、いはつれば淡もかくり、船競ひふ
な棚打ちて、津の國に漕近つけは、真金ふく吉備の
道ゆも、みな月のひざめはららぐ、夕立の雲かおこ
ると、みるまでにこら軍、あともひて既に責め
くと、都にははゆまつかひし、しきなみのしきてし
くれば、其仇をうごのつかひ、大命かぶるまんに、
打向ふ大將達、其道に出てたつしつる、そが中に
此君ひとり、天津神直日の神の、世の禍を直し給は
む、時をしもあり待ちがてに、つばさなす鳥にはあ
らねど、うつし世を飛立ぬべく、一すじに思ひ立たし
て、花ぐはし花の親なる、櫻井のうまやの道ゆ、あし

垣のふりにし郷に、愛子をかへしやるとて、皇へに赤
き心を、つくしてよゆめとふことを、山管のねもころ
く、に、語らひてますら健男の、ならひさてかへり見
もせず、君こそは武庫のうらまに、打さらし磯もどゆ
すり、よる浪の立もかへらね、うみの子もはらからお
ちす、従へるうからこと、此君の操にならひ、敷
島の大和心を、鏡如とぎ明らめて、三芳野のよしのの
宮の、守りとも盾ともならし、いにしへの今のを、つ
に、ならびなきくしきいさを、つがの木のいや繼々
に、いちじるくたてしくことも、此君のいきほひなら
し、このあその御霊なるらし、おむかしき其古へを、
肝向ふ心もしぬに、思ひいでてうたへる歌を、春の野
に草はむ駒の、口やますことし長しと、人などかめそ
百ふねのともへならぶる、淡川淵瀬はあせて、岸の浪
かへらぬ人を、新玉の年の五百年、許多の春秋おち
す、世の人のしぬび渡りて、いたなげくおきその風
に、今たにもむこのわたりに、立霧をいぶき靡かし、
をつつにも向ふが如く、おもほへてしたと戀つ、打
わたす和田のみささの、並小松なみくならぬ、楠の
くすしき君を、遠つおやのいさをと、久堅の天地の
むた、つがの木の彌つきく、に、語りいつがむ。

反歌
ふりし世に君がなげきしなげきをやなげきいつぎ
て千々になげかむ
遠つおやしきてし忍ふ心とや折ふし君が夢にみゆ
らす

天翔り君こそみらめ大王の敷ます國のやすきこの
世を
高麗剣和田の御崎の白浪に幾代の人の袖濡すらむ
如此いふは此君のうから和田正遠の裔橘殿足

天保六乙未二月二十六日寫畢
うまこりのあやに細しき首錄のこも萬世の鏡ならすや 貞 路
明治三十二年八月寫原本誤落はく解しがたきふしもま、あ
れども今わたくしに物すべきすぢにあられば後日よき本を索得て
正しあらむべくこそ
達死

右歌楠公五百年祭は天保五年の作ならむ然らば實は四百九
十九年に當るなり一年ばかり繰あげて祭ることは例少からず
若し五百年の作とすれば公の戦死は五月二十五日に其の前二月
に他人の手でなすれば公の戦死は五月二十五日に其の前二月
に達死は和野足家足家名なり羽田家足家名なり羽田家足家名なり
りしな河島豊太郎氏が沼澤某所藏殿足家自筆の幅を寫してり
によりて校訂を加へぬ
明治四十年六月
宇野東 風識

橋伊豆足か家の集終

和田嚴足集補遺

春

春日雪

あまさらし昨日をけふと降る雪の御代の花さく白銀の山

鶯入新年語

立かへる年のことほきことさらにいはてもかほの鶯の聲

嶺樹露

朝戸あけて只みつれば菰枕高ねの松にかすみかかれり

夕鶯

花にあかてかへる山路の遠近に夕方まけて鶯をなく

野鶯

百濟野と名にこそおへれ鶯のなく音は何かこちたかへるへき

竹裏鶯

春されは雪にふしたる村竹のおきたつ園にうくひすのなく

春雪

荒駒のくるはららかすあかさより村消かかる春の野の雪

里梅花

里の子ら大宮人に梅さけは言問ひかはす折もあり鳥

依風知梅

沖津藻のなはりの山の梅か香の風の手馴の馬にのりくる

鬼神にあらぬ物から目に見ぬ梅か香つれて渡る

春風

梅留袖 春の野の梅をこされし我袖の香をこそけふの家庭に

春柳

すかねのにとりもつなかぬ駒の尾の春の柳はうちなひさけり

春草

荒駒のはらはふのへはいくはくのあるもてみとりそめかけぬらん

岡早蕨

春されはしのみの岡のさわらひもしのひかねてやほにいてぬらん

樹陰早蕨

彌生へて子日のぬへに来て見れば小松かもとに萌る早蕨

春曉月

白妙の花よりしらむ山のはにかたふきかかる山のはの月

春雨

春雨のふりしくけふのつれつれを慰めかほに蛙なくなり

歸雁

春雨は軒の窓を傳ひさしつらとなりぬ窓なからにこゑよりもつはさそさきにかくれける霞の空をかへるかりかね

旅宿歸雁

算みさしの日数を旅の宿りにてた忘れしめし歸る雁

春雉思子

歸るかりつれてはいなて草枕旅寢のゆめをなと鶯か

子をおもふ春のききしの心ゆや野はおしなへて草のもゆらん

曉呼子鳥

鴛ささすなく呼子鳥何しかもちりにし花はよひもかへさぬ

初春待花

消あへぬ雪に霞の匂ふにも面影より花のまたるる

櫻柳交枝

初入の霞隔てて待乳山待程とほき花盛かも

見山花

花のぬき柳のたての高機を春のりくらしおりはへてみむ

山花如錦

くれのおもおもひしあはれは雪と見し八尾の花に寄立にけり

花満山

櫻花ををりにををりさらかたにしき着粧る山しぞしも

隈もなく花こそさけれ端山つみおく山つみのかさしたらしに

深山花

瓣かゆく横山にふす猪にもか朝夕みてむみやまさく
らを

關路花

關の名にかけてなこそと春風をなこめもあへす花を
しきちる

河花

稻むしろ河添柳しきちれば流るる花を若鮎潜めり

古寺花

山かけのふりぬる寺も花さけはすままくほしきやと
とこそおもへ

月前見花

花にあかてくるる蕙に油火をとたにも月のいはせさ
りけり

羈中花

旅をうきものとはなとか思ひけむ花見てこゆるあし
柄の山

花下送日

いひはくもあらぬ櫻のさかりとてかくそひやかの遊
はしつる

花前待人

來ぬ人をまつらさよ姫いきかへり花のひれたにふり
こせぬかも

花面影

散まよひ散にし花の傍のかはひらこちふ蟲そ飛なる
寄花懷舊

寄花懷舊

ちりぬれば枝にかへらぬ櫻たに昔の花にありこせぬ
かも

花の白雲

ますらをの心たらひに花はみむ醜の御楯は命はか
なし

夕落花

葛城の山路嶮しみ振さけてよそこにこそ見れ花の白雲
夕落花

道落花

雪ならは老たる駒にまかせても花ちりしける道はか
へらむ

江上春曙

草香江にまたうら若き蓮葉の心浮たつ春のあけほ

彌生はかり病にふして

いましなさき今しちるとは人傳にききつつ幾日打こや
すらん

躑躅

かきろひも匂ふはかりに岩間照尾照峯照躑躅花咲く

松上藤

咲藏のなみのすさひに此の比は松の嵐のおとたゆむ
めり

藤埋松

藤なみと衣にきそひてしみたてる荒山小松乏しきろ
かも

暮春花

雀公鳥尋ぬる程の木隠れに匂へる花や春はととめし
暮春花

暮春藤

花ちりて山ほどとさすまつ程のたゆまつくとか藤は
さくらむ

夏

送春如昨日

春の日を長しとたのみたのみきて過にし程は昨日と

そおもふ

咲くを待ち散るを惜し花過ぎて春は昨日の心地こそ
すれ

新樹

そに鳥の衣きそへり夏木立真玉さはまきはけむ太刀
欲得

若楓

若かへて何かは秋におとるへさそめんにしきをした
にふくみて

路卯花

雪を見て老たる駒にまかすれば足搔に匂ふ路の卯花
足占問方こそしらね白雪のちまたとはし咲る卯花

杜卯花

森かけにあやなきやみやなからまし卯花白き月よみ
の庭

時鳥

なかなかにとりてなつければ時鳥思ひあかれる聲聞か
めやも

待郭公

花と見て欺かたにし雲にはたうしろめたくも待郭公

尋鶴公

尋ぬるもあなおほつかな五月開くらよの山の山時鳥

浦時鳥

うたかたの哀きさしる海士もなし野坂の浦の山時鳥
わひてすむ浦の苦屋のつれつれをなくさめ顔になく
時鳥

岡時鳥

とく聞くと誰れに語らむ時鳥夏もいまきの岡の初聲

山時鳥

ほととぎす富士の雲間に鳴聲を裾野につるる山おろ
しの風

深夜時鳥

時鳥夜半のつつみも打さして聞けは初音の山郭公

早苗

あさりせし髪の手業はあともなくにひはり小田に早
苗取るなり

採早苗

むか股にひちかきよせて鳴澤の澤のふけ田に早苗と
る見ゆ

池杜若

池の面にはひ餘れる杜若さそひかりする袖に摺ら
ゆな

浦五月雨

棚さらし八重立雲も日並へて長居の浦に五月雨そ
ふる

湊五月雨

ぬれて干す時間もそなき旅衣袖の湊の五月雨のころ

橋笠

亂れ飛ぶ宇治の笠は橋姫のくし笈の玉とみやまか
はぬ

澤笠

淺澤に機張廣き錦なすたてぬきしけくほたる飛見ゆ

海上笠

汐の泡の輝くかけを友と見て波の穂近く笠とふ見ゆ

笠照水草

淺澤に笠をやとす浮蕪菜夜深く人を繋ぎ留めてき

夜水鶏

雞に

水邊菖蒲

射目たてて富の小川を渡るとて苅らぬ菖蒲の袖にか
をれる

人のもゝに撫子を遺すとて

うら若さわか撫子の間使はあなおほつかな事へあへ
んかも

夏草滋

立廉のにひものあやの胸分の星も見わかぬ根白高菫

池上蓮

鏡か池處からこそ花蓮身の盛りうつす少女と見ゆれ
名にも似す立ちこそかぬれみはかしを劔の池の蓮見
るとて

氷室

跳り上る鯉の廣旗花にふり池の蓮の散るもあたらし
貢する氷室のあごをいしきいしきわたらふ富士の山
おろしの風

白雨

夕立のぼららく雨に涼やかてなかる庭の面かも

海夕立

光神なりはためける海の面に鯨のたてし沙煙はも
水邊納涼

荒金の地さへ晝は日にさけつひさ石川にゆふすすみ
せむ

山蟬

見し花は昨日の程と思ふ間に青葉の山に日くらしの
鳴く

秋

幽栖秋來

物の音はすたく鬼にもあさりき世に立わたる秋の
初風

萩告秋

破れつるゆめよりやかて秋たちてうたた恨る萩のさ
やきや

草花告秋

咲そむるくらなし色の女郎花なかなか秋をつけぬ花
かは

八千草のにはひいてたる秋の色を蟲の垂衣かかけて
こみる

風動野花

夏草のねこの山風吹落て浪野のはらの尾花玉まく

我もいて後瀬をかけて山川の友ねのをしの契りおかはや

契空戀
契りにはふさはぬ物を野坂の蟹もとなひりへりあなうつせ貝

變契戀
雨とふり雲とつるふ習とて浪たた越ゆる末のまつ山契不逢戀

大船のたのむ契しなかりせばあはて經る世をいかてわたらむ

深夜待戀
愛しきやし人まつさよのふくらくをなくさめ顔の山ほとさきす

逢増戀
逢ひみてはなくへき物を我なからことわりしらぬ心なりけり

絶後會戀
たわてありし恨はいはて逢瀬には見越の崎のくゆとのみこそ

後朝戀
住江の浦吹風に霧晴れてみどりこたかさあらう松原

名所松

住江の浦吹風に霧晴れてみどりこたかさあらう松原

嶺松

あらかわしのやどるやどりを尋ねれば嶺に年ふる松を木高き

山家松

とふ人の櫻を折し見習ひに雪のさきたる軒の松か枝

浦松風

旅人の袖ふきかへす秋風にぬ島か崎の浪さわくなり

曉灯

鶴鶴まなひの窓のともり火は曉かけて影隈もなし

寄月餞別

別路に心くまなき月影を酒にとかへて酌かはさはや身はまとし智はおそし久望の月を心の馬のはなむけ

鞆中松風

家人の我を松風心なく旅のやどりのゆめおそろかす

鞆中送日

旅衣着初し袖の花ふふきおもひそいてつ打拂ふゆき憂き旅を忘るる月も幾度か満てはかけし春と秋とに

和田藤足集補遺

きそのよのを床におとす我紐をけさしも妹かどりたくらんか

不逢戀
忘貝千貝八千貝ひりふどもあはぬ思ひはわすれかねつも

尋不逢戀
尋ねあはぬ心を汲みて妹しらは門へに杉はうねさらめやも

月前戀
ははきやし妹にあふちの花□□とさやかにてらす夏の月影

利鎌もて蟹のかりもにすむ虫の我からなりぬ戀の奴にこひわひぬ

母か何桑子のまゆに籠らねとわれ戀わひぬ心馬音蜂せみ

雑
松を植て

みつわさしいやさからこそ根こしもて植る心は八千代こそ思ふ

ま玉手の玉手さしまさいをなさす神の夜床の衾そもかも

朝眺望

寐くら出てて汐路はるけく飛わしのいかくるる島さき津島みゆ

夕眺望

遠方の嵐や松にさわくらん雲はあとなき夕暮のみね

牛

まなほにし世をしわたらは大路行ことひの牛のたそくとも吉

鬼

けたの崎なみふすわにを打橋の只渡こし神を此の神

龜のかたに

萬代を契るむそちの六十へて龜の齡を猶や重ねん

水鳥近馴

味村の狂激の水けふりけふりはたてと立も騒かす

流懷

ささらかた錦のうらはかへし見し糸のみたれのくるしがるへみ

七一

すらん
浮雲のうまのふつまを乗りかたみ振さけて見る故郷
の空
海士のかるもにすむ虫にたくふ身もわれから猫の皮
は剣見し

神祇
にひはりに蘆管生ひぬ八千銚の神の御霊は今もかは
らす
言さかの神のみことやかしくはかり國安かれとよこと
のらしく

社頭祝
ゆふしてて神に手向るいつ橙のいつより安きまよに
もあるかも

四方の海の外のねみしもうへしこそなへて畏め神の
廣銚
寄道祝
橋のかけふむ道にありかよふ人草滋き君か御代かも

寄松祝
荒山に茂れや千松しか齡をはいくらも君に奉るかね
狩人

おひそめの千篋の五百篋はすすきなす野に立双る御
狩人かも

隠士出山
大御いめを畏み畏み合せつつ功くすしきくすの木
の
君ならて外に上ね鷺の尾のそかひにおきし父母等
はも

妖怪
ますらをか弓に矢さして待としもしらぬはおそき物
にさりける

今様
初春
難波の浦にさす沙の かつ満隠すなきさには
あしかひ萌て人しれず 波の下にも春ぞたつ

又
明星
あかはしあがるあかききに 夢おとろがす羽たたきは
去年 ござにのこして啼こねは やかて今年にはつ鳥
又
須磨の浦廻にわひて住 人間惑ふ八重かすみ

八重の一重は漢鹽火の 煙なりとは今ぞ知る

又 早蕨

萩のやけはらかきわけて 蕨折る兒の袖ひくを
うしろめだしよく見れば 人にはあらで枯茨

又 春風

柳の糸を刈りこも物 みたしもあへず春風は
まづ目に見ぬうつしの 人の心をくるほせり

又

試がてら唐人に 花あはせんさあどらへば
何を持てか足曳の 山櫻はな見には来む

又
古事記神武天皇御製歌に見たり
元後妻をうはなりといふ前妻をこなみといふ前妻後妻
を妬みて打なうはなりうちといふつげらなるこは昔
葉集に見たり

隣の家にうはなりを 打つ音かまに聞ゆ也
心なくかねさくら花 一枝をりていざ見せむ

又
萬葉
琴はなはけきさきさきだつたはくはここの下種に妻や
こしれる

過し櫻をけだしくは ゆめにや見るさひひるいして
さめのまにまに目をよめば 今朝をきのふと思ひけり

又 駒さめていさ水かはむ云々

大宮人の こまにかふ 水もあたらししみづくも
奴力
井手の山吹露をだに ゆめ玉川になこぼして

又 夏
藤山振もちりすきて 合歌
ねぶの花こそうら安く
眠るに似たれたかかめる 酒ひゑひたるすさびそも

折返し
あひて眠れるねぶかしも 萬葉に例あり
まゆりもいてやゆりあひて 草ふけゆりも花さけば
真震

又
夏のにひ毛の荒熊の 心
うら珍しき月の輪の
隈とななりて村すすき 秋こそ穂には出もせめ

又 初秋三日月
文月たてと逢ふ星の 渡りの爲とかささきは
ちかへもあへぬ橋姫の 眉
まよびきなせる三日の月

又 月
名におふ今宵一村の 雲だにもなき月影に
夜ただむかひて此年も 身におもひ出をうらそふ

又 紅葉

折るもあたらし見ぬ人に
借 見せまくり慾しもみぢ葉に
袖かけながらますらをも
火夫 おもひ惑ひぬ二かたに

又 冬

朝戸おしおけ四方の山
一夜の程に雪ふれり
振放 如の意
ふりさけ見れば虎の歯の
何をさ噛みに噛む爲ぞ

又

膝折りふせて打ねふる
彼方 此方 此方 此方
かなたこなたにみそささき
鳥葉に例あり 向角
ことひの牛のむかづぬを

又 戀

富士の白雪水無月の
ふりつむ如くしきてこそ
鳥葉みな月の望に消れれば其の
望にけぬれば其の夜又
君をばわれは戀ひわたれ

又

名に聞わたる住の江の
さなかの船の百船の
あちら松風おとたてて
真帆に片帆にふきわたる

又

松を時雨の笠にきて
したおもしろしささ波や
年によしやぬるることも
志賀唐崎の旅のつと

去年の葉月もちをきのふといふ日より、石の
關屋守にさされて守りをり、同二十日の夕片
まけて、雨降出風も烈し、折しも薩摩國、飯
嶋の船、入來り、さしきの津にはえ入らず、
關屋の前に、船泊てたりしに、やや日の暮は
つる頃より、辰巳の風、いよ吹強りしかば、
打渡す、女島に並ひたるけふとまりといへる
浦に、碇をおろしぬ、夜もすから雨風をやみ
なかりしかば、船人を憐びてよめる、
野は野分、海ははやての、烈しきに、漂ひながら、
浦の名の、けふとまりたる、薩摩船、明日の身しら
ぬ、浮寝して、いかにわふらむ、是や此、けふとまり
たる、飯のおほふね、

右の哥を、いささか縮めて、今様となし、ふ
づくゑを叩きて、うたひしを、左に記す
かかる野分に浦の名の、けふとまりたるさつまつね、
あまの身知らぬうきねして、いかにわふらむこしき
人、

長歌

水無月の十日あまり二日山下素長が家に集ひ
て遠山の夏の雲といふことをよめる歌並反歌
はなまだき、はなにながひて、打わたす、峯に朝立ち
打むかふ、山に夕ごり、梓弓、はるのこころもともす
れば、まごはしけらく、ありさまをたなひきかへて此
頃はうつくし妻の黛の遠山の端にたぐつぬの眞白の
虎の眠る如雲こそ起れ、みな月の照日をいたみ千町
田の田面のひらも裂而有を、夕立雨や降り來ると下
よるこぼひ風流士の花待渡る思ひゆも増れるものを
心なき天津雲とて千引磐の動きもやらず吹風をなみ

反歌

雲のゐる山の白虎嘯かは白雨ふる風ともならましも
のを

詠瑞雪秀詞並短歌

菊の池の萃萃ならでまかなくは何を種とておのづか
ら生ふる早苗をなごてかくしけれる稻ぞ夏たけて秋
のたり穂のやつかほの秀のすさひに白玉のいほつつ
ごひのうるはしさをしねさなれば芦原の中津 皇國
にふさはしき美都能由幾てふみなをさへくだし 賜

ひてゆたかなるためしにひかむ梓弓末の世遠く玉葛
絶ることなくちまちたもさなだもおちすまきつがひ
たねは此種うゑつがむ稻ぞ此稻まがねふくさびのつ
むがりあつまなる陸奥山に花咲しくがねしるがねま
かがやく眞玉はあれど、くさぐさの寶のおやは、豊
うけの、みめぐみするく、あたまもる、うべなうべ
な、かく生ひ出しいなだねを賜るまゝに庭雀、おど
りあがりてよろこぼふおほみだからぞくはしほこ、
ちたるの國の國の本なる

反詞

大雪のあだに降とぞ去年は見し瑞穂の種の有も知ら
ずて

弓取草をよめる

おく霜の霜野廻原に狩暮し明日とて歸る狩人の馬の
しりへゆしまし雲聲こそたてねいとむる物こそあ
りけれそを何とかへり見すればうつそみの人にはあ
らすて、下頭のとらをに懸る秋の花露も亂れて色も
あやににほふなりけりあはれあはれ箭にやむ猪も荒
熊も力競はは、たはやすく、むた手に捕むさつをら
も、握りもちたるさつ弓を強ひてしひかは、はさま

0310
4

22388

肥後文獻叢書第三卷

肥後文獻叢書第三卷終

七八



明治四十三年三月廿一日印刷
明治四十三年三月廿五日發行

(肥後文獻叢書第三卷與付)



編輯代表者

古城貞吉

發行者

東京市京橋區南鍋町一丁目二番地
株式會社隆文館

右代表者

草村松雄

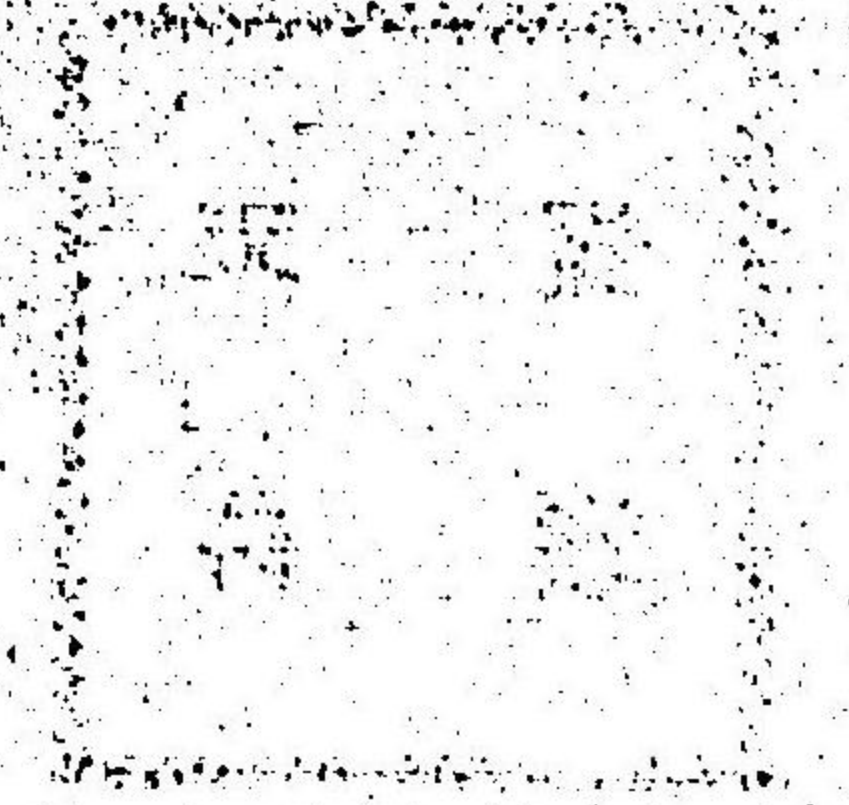
印刷者

東京市京橋區宗十郎町十五番地
武廣和雄

印刷所

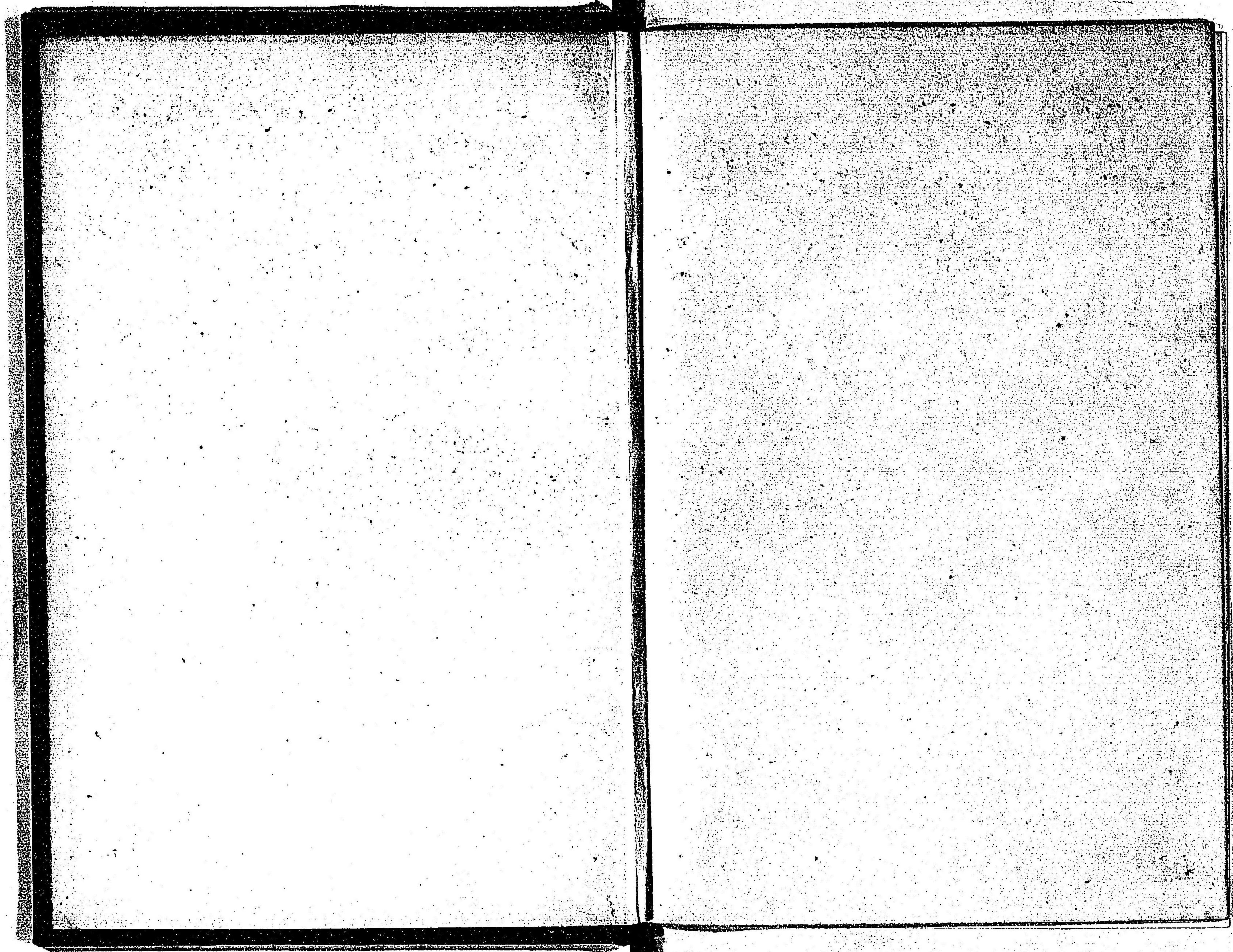
東京市京橋區宗十郎町十五番地
會社國文社

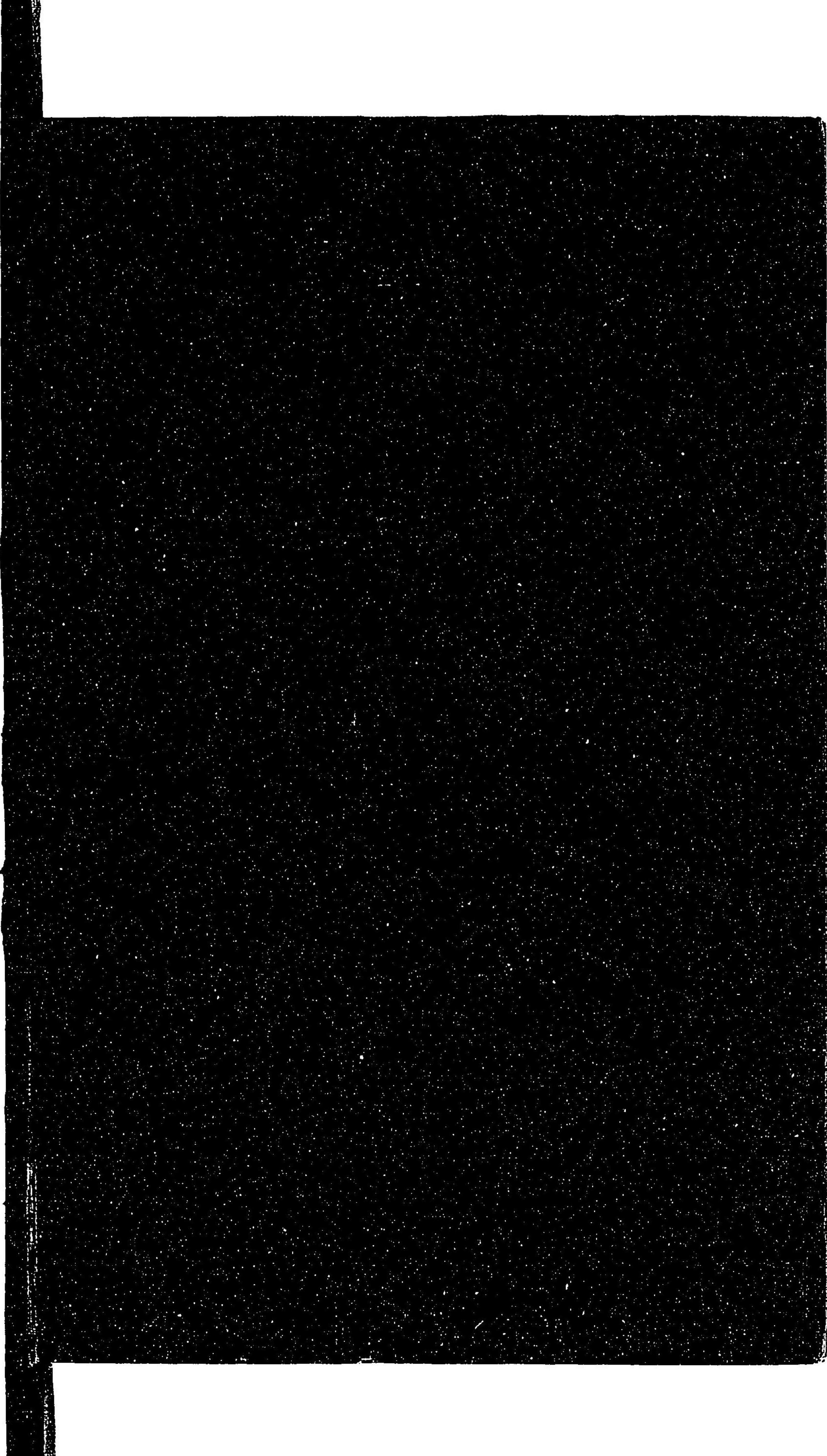
開命曰：三皇五帝，皆由德而興，由德而衰。德者，本也；財者，末也。外本而內末，則民散而國亡。故君子必先慎乎德，德薄而位高，位高而祿厚，心驕而志高，無以養民，則民將叛之。夫德者，本也，財者，末也。外本而內末，則民散而國亡。故君子必先慎乎德，德薄而位高，位高而祿厚，心驕而志高，無以養民，則民將叛之。



德者本也財者末也外本而內末則民散而國亡故君子必先慎乎德德薄而位高位高而祿厚心驕而志高無以養民則民將叛之

（Vertical text at the bottom of the page, possibly a page number or reference mark.)





0310
4

[Faint header text, possibly containing a title or reference code]

[Faint lines of text, possibly names or identifiers]

[Extremely faint main body text, mostly illegible due to low contrast and noise]

